
HUNTER×HUNTER 六つの食作法
魔女っ子アルト姫

暁～小説投稿サイト～ By 肥前のポチ

<http://www.akatsuki-novels.com/>

注意事項

このPDFファイルは「暁く小説投稿サイトく」で掲載中の小説を「暁く小説投稿サイトく」のシステムが自動的にPDF化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「暁く小説投稿サイトく」を運営する肥前のポチに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

HUNTER×HUNTER 六つの食作法

【作者名】

魔女っ子アルト姫

【あらすじ】

HUNTER×HUNTERの世界で手に入れた強い肉体を駆使して生きていくとある男の物語。

ハイメルン様との同時投稿になります。

001話

「……あれ？」

ふと周囲を見回す。まず目に入ってくるのは晴れ晴れとした青空と白い雲、典型的な快晴の空だ。次に飛び込んでくるのは木に地面に生えている草に花。のどかな草原といった表現がぴったりと当てはまる。身体を起こす、次に思ったのはどうしてここに居るのかと言う疑問点。

「……？」

立ち上がる、普段と同じように立ち上がるが膝に手を置き力を込めた時違いに気付く。

「ぬあっ!？」

余りの力にそのまま膝を押し込み地面へと転がった。何気なく力を込めたはずだった、だが自分は大きく一回半回転し再び地面に倒れた。何処かからの調子は悪くない、寧ろ良いほど。それなのに一体何が起きているのだろうか……そんな時だった、不意に身体に電流が走るかのような強い感覚を覚える。記憶、知識、経験が次々と脳裏に蘇って来る……眩暈がする、動悸が止まらない。

「ぐあ……——つあああああ!!!!」

声にもならない悲鳴、苦痛だけに溢れている感情が全身を突き抜けて声として外へと出て行く。何時収まるかも解らない地獄のような時間、一体どれだけの時間が立っているのかさえ解らない。痛みで感覚が麻痺して時間の感覚が消え伏せているのかもしれない。そんな思いを抱くほどに苦しみ抜くと漸く痛みが消え去った。

息は上がり、精神は衰弱していた。地獄そのものを垣間見たような気もした、だが代わりに得た物もあった。身体に溢れている力だ、痛みで閉じていた瞳を開けると全身から吹き上がる蒸気の如き上がっている湯気のような物が見えた。それがなんなのかも地獄の代償で理解していた。

「オーラ、か……」

オーラ、生命から溢れ出す生命エネルギーの俗称。そしてオーラは個人によって差があり特徴も違う、このオーラを自在に使いこなす者達を念能力者と呼ぶ。

「解った……ここが『HUNTER×HUNTER』の世界だって事が」

彼、時保 久世は所謂転生者。人生を一度終えたがある事情による二度目の生を得た人間である、事情とは人間が上位の存在と崇める神によるものである。久世が遭遇した神は酷く人間くさい存在だった、自分を転生させる理由としては退屈だから、人間に神が介入しその人間が過ごす生がどんな物が見たいからと言う理由で彼は二度目の生を手にした。

「…………自然と、出来たな。纏」

静かに瞑想するかのように集中する、溢れ出ているオーラが出尽くさず身体の周囲を巡回するよう。心臓から送り出されていく血液のように全身の隅から隅まで滞りなく巡るかのようにイメージ、それを行う。オーラが先程のように溢れ出し続けると自分のエネルギーを無駄に放出し続けている事になる、使わない燃料に無駄にしないようにする。

「さて……俺が望んだのは健康で頑強な強い肉体、人に好かれやすくなる事、自由に物を出し入れできる空間倉庫、そして……」

病気がちだったから望んだ健康で健康で強い肉体、そして生前はボツチだった為人に好かれやすい性質を、沢山の買い物をした際に重くて辛い思いをしないように空間倉庫を。そして——瞬間、久世は5メートル以上先の地面に立っていた。瞬間移動ではない、瞬間的に地面を10回以上蹴る事で爆発的な加速をした。

「うし、まだこの程度しか出来てないけど俺にも使えるぞ——」
六式」

最後に望んだ事、それは"ONE PIECE"に登場する人体を武器に匹敵させる超人的体術"六式"の会得であった。指銃^{シガン} 鉄塊^{テッカイ}

剃^{ソル} 紙絵^{カミエ} 嵐脚^{ランキョク} 月歩^{ゲツポ}、これらの体術を自分は習得している。知

識として熟知し、経験としてはあくまで使用できるレベルの最低限のレベルで身体が知っている。これから自分がする事は

「六式を鍛え上げると同時に念能力を鍛える事……！！！！」

病弱でまともにスポーツも出来なかった彼は喜びに浸っていた、これからどうやって身体を鍛えて強くなってやろうかと。そして彼は気付けば修行に没頭していた……。

「へいらっしやい」

「おう邪魔するぜ」

ザバン市の一角にある定食屋を営んでいる親父が入ってきた客を見て思った事はデカイ、だった。身長は楽に2メートルを超えているに加えて身体は非常にがっしりとして身長以上の大きさと威圧感を感じられていた。そして同時に感じる異様な存在感と力を、多くの人間を見てきたが初対面でこれほどまでに凄みを感じるのは久しぶりと言わざる得なかった。

「？親父、どうかしたか？」

「んっああいや何でもねえや！悪かった、注文は？」

思わず男に見入ってしまった、その威圧感に。だがその声は優しくこちらを気遣っているのが簡単に解った。

「ステーキ定食頼むぜ」

「っ！ステーキ定食ね、焼き加減は？」

男は太陽の朝の日差しのような優しい微笑みを浮かべながら右手の人差し指を立てながら答えた。

「弱火でじっくり！にな」

「あいよ、奥の部屋にどうぞ」

「おうサンキュ」

案内の女性に連れて行かれる男を見送る親父は自分の眼がまだ捨てた物ではない物と思いつつ今年はとんでもない核弾頭がやってきたと内心で笑うのであった。そして彼が、待つ間に食べるステーキ定食には特大の肉と大盛りの米を盛り付けて大急ぎで運ばせた。

「（しっかり食って励めよ）」

——定食屋の親父の密かな楽しみは、有望な新人を見送る事であった。

「うんめえなこれ！！肉は柔らかくて口に入れた途端溶けちまう！！あーもうもっと残っててくれよもっと味わいたいのに！？？」

奥の部屋へと通された大柄の男、シャイルは部屋に通されると置かれていたステーキ定食に手をつけていた。部屋に入り席に着くと部屋全体が揺れるのを感じた、エレベーターになっている部屋に納得しつつ食事を楽しんでいた。

シャイルとは新しい世界を生きる為につけた名。今、シャイルはこの世界で最も素晴らしい仕事の一つであるプロハンターの資格を取る為にその試験に望もうとしていた。理由としてはこの世界で中心となって周って行く職業であると同時にプロハンターの資格は強い力を持っており、転生しこの世界の戸籍を持っていない自分にとってこの先非常に有利になる為の物だからだ。

転生してから既に2年が過ぎ去っていた、シャイルの身体は逞しく鍛えられ身長は2 m 3 0 c m。腕や足は丸太のように太く頑丈になっている、顔には修行中に負った傷が左目と耳の間を走るように付いているが彼は全く気にしていない。

「（にしても……確かに健康的に逞しい身体だけど、これ、トリコやん……）」

彼の身体は神によって構成された物、その元となったのは漫画『トリコ』の主人公であるトリコの身体がベースになっている。同時にトリコの知識も多少ある為かサバイバルなどは全く問題が無かった。神に感謝しなければいけないかもしれない。

「面白いって話だけど……あゝあ、これなら友達あいづの話、もっと真面目に聞けばよかった」

思い浮かぶのはトリコが大好きだった友人、週間が出る雑誌にトリコの新話が出れば話してくるような友人だった。だが余り興味が無かった為が全く聞いていなかった、辛うじて覚えているのはトリコの技のほんの一部だけ、もって覚えていればこの体を有効活用でき

たかもしれないなかったのに……。

「まっいいさ、俺が俺なりにやっていけばいいさ♪」

気楽に呟くがそれは自信と確信があるから、今日まで行ってきた修行は絶対に嘘はつかない。時に号泣もしたし血も吐きもした。それだけの苦勞を積んできた、苦しかったが続けてきた自分を信じようと心の追う底から思えた。そして部屋が停止し扉が開いた、どうやら着いたようだ。降ろしていたリュックを背負い直し外へと出る。エレベーターの表示にはB100となっていた、地下100階。かなりの深さ、エレベーターを出ると薄暗い闇が降りているトンネルの中には人がぎゅうぎゅう詰めになるほどに押し込まれていた。

「（すげえ人数だな）これ全部試験者か」

「はいそうです、どうぞ試験番号札です」

「おっすまないな」

小柄な人物から札を受け取る、405番。少なくともこれほどの大人数が試験を受けると言う事なのか、札を胸へとつけていると黒髪のツンツン髪の少年が近寄ってきた。

「ねえ貴方も試験受けに来たんでしょ？」

「うん？ああ勿論、此処に来てるって事は君だろ？」

「うん！」

元気良く笑顔を見せながら返事をしてくれる少年につられてシャイルも笑顔を見せる。

「俺はゴン！」

「おっとこれはご丁寧に、俺はシャイルだ、好きに呼んでくれて良いぜゴン君」

「俺の事はゴンで良いよ、シャイルさん！」

「はははっだったら俺の事もシャイルって呼び捨てでいいぜ」

ガツチリと握手を結ぶ、なぜかこの事は仲良くなれそうな気がして成らなかった。

「シャイル紹介するね、こっちがクラピカでこっちはレオリオ！」

「私はクラピカ、宜しく頼む」

「レオリオだ、宜しくなシャイルさんよ」

「ああシャイルだ」

新たに紹介されるゴンの友人達、軽く挨拶と名前を交わす。

「ねっシャイルはどうして試験受けようと思ったの？」

「ゴン、いきなり会った人にそういう事を聞くのは失礼に当たるぞ」

「構いはしないって。簡単に言えば身分証明が欲しかったのさ」

「身分証明？そりゃ如何して」

シャイルの言葉に無意識に聞いたレオリオ、彼の質問はある意味正しい答えだろう。しっかりとした環境で生まれたのなら身分は証明されている筈だろうと。そんな彼にクラピカは軽く小突いた。

「ってえな、何すんだよクラピカァ！？」

「詮索しすぎだぞっと言う事だ」

「だから良いって、俺ってば生まれてから親の顔も知らねえし兄弟がいるのかも知らねえ。それに俺ってば捨てられたみたいだし戸籍無いんだよなあ、お陰で就職に困るわカード作れねえわで大変な訳だ。んでハンターライセンスを取りに来た訳だ」

涼しい顔で理由を語るがそんな顔で語る物ではない位に重い、が本人が最後に浮かべた笑顔に下手に聴かないほうが良いと相手は思った。本人は全く気にしていないと理解させた。

「それとクラピカありがとな、俺の事気遣ってくれたんだろ？俺が根無し草だって事気にしてるかもしれないって」

「ああ。だが要らぬ心配だったようだ」

「だけど嬉しかったぜ、ありがとな」

「っ……ああ、ああ」

クラピカの少々戸惑ったような言葉、それを皮切りと無かったのかトンネル内にけたたましく鳴り響いた。一瞬にして言葉が消えて周囲の人々は更に集中力を高めている、更にピリピリとして行く空気がシャイル達も気持ちを切り替える、それから少しするとトンネルの奥の壁が上へとスライドしていく。

——大変お待たせ致しました。ただいまをもってハンター受験者の受付時間を終了いたします。

002話

「大変お待たせ致しました。ただいまをもってハンター受験者の受付時間を終了いたします、まず忠告を。これより開始されるハンター試験は運が悪かったり実力が乏しい方は大怪我を負ったり最悪死に至る事もあるでしょう。それでも良いという方のみご同行ください。そうでない方は後ろのエレベーターへ」

スライドした壁の奥にて待ち構えていたのはランプのキングのような風貌をしている丁寧な物言いの男、懇切丁寧だが彼の言葉が孕んでいる危険は人の命を容易く奪う物なのだろう。彼の言葉通りに下手すれば死ぬ危険な試験。だが此処に集った豪傑武士共は動じなかった。

「宜しい、承知しました、第一次試験参加者405名……ですね」

試験参加者を確認すると振り返って大きく腕を動かしながら歩き始める、それに続く一同。遂に始まる、世界中の誰もが待ちわびたこの時を。帰る訳が無い、此処まで来るのにも苦労したのに勿体無い事はしないだろう。歩いていると僅かに前の人間の足を進める速度が徐々に大きく、小走りになっていく。遂にはランニングほどの速度で走っている。

「申し遅れましたが私1次試験担当のサトツと申します。これより皆様を2次試験会場まで案内いたします」

「2次試験会場？んじゃ1次試験は？」

「つまりだサトツさんよ、今から2次試験の会場まで行くのが試験って事だな」

何処か嬉しそうに笑いつつ声を発したシャネル、その言葉に周囲は動揺するが徐々に納得の声で満ちていく。サトツも肯定の言葉を送りながら唯黙々と走り続ける。

「成程、差し詰め持久力試験という所か」

「面白れえ、とことん着いて行ってやろうじゃねえか!!」

「その意気だレオリオ。喉が乾いたら俺にいいな、食料はたんまり持ってきてる」

「わあいありがとうシャネル!」

「良いって事よ、旅は道連れ世は情けってな」

シャネルの笑顔に元気を貰いつつゴン、クラピカ、レオリオ、シャネルは走り続ける。唯走り続けるという試験内容、一見酷く簡単に見える。実際に行う事は走るという行為のみだがゴールについては一切知らされていないに加えて薄暗い地下、変わり映えしないの風景は精神を蝕んでいく。

試験開始から2時間。試験者が走った距離は既に30キロを越えていた、合計で何キロ走ればいいのか解らぬ状況、終わりの見えぬ道を走る為のペース配分などをも考慮すると体力と精神力を大幅に磨り減らす事になる。既に数名の脱落者を出していた。

「はあ、はあ……（まだ先すら見えぬとは……ゴン、達は大丈夫か

「……？」

いまだ余力を残しているクラピカは共に試験を受けたゴン達の姿を軽く探す為に視界内を探った。自分がいる集団より少し離れた所で息を少々切らしながらも精神力で食らい付いているレオリオ、その前を走るゴンは余裕を持っている、寧ろ同じ年位の少年と話していた。彼らの心配は無いようだ、そして……

「ふっふっふっふっふっ」

隣で規則正しいリズムを刻みながら足を動かし続けているシャネル、顔だけを見ればゴンより余裕がありそうに見える。

「（流石だな……）ッしまった!？」

思わず関心と安堵の息を漏らした時ペースを乱してしまい脚が纏れた、前かがみになりそのまま転びそうになってしまう。一旦ペースが大きく崩れると一気にきつくなる、拙いと思って自分ではどうしようもない。どうすればと思った時、背中全体を押す暖かい感触と腕が掴まれ前へと優しく引っ張れた。そのお陰で何とか持ち直し走り直せた、だが一体何が思ったがその答えは実に簡単だった。隣に居たシャネルによる物だった。

「大丈夫かクラピカ？」

「……あ、ああすまないシャネル、世話を掛ける！しかし何故助けてくれた!？」

「言ったろ？道は道連れ、世は情けってな！気にすんなくて、怪我

しちまったらこの後の試験が大変だからな。頑張ろうぜ」

シャネルは然も当たり前のように答えてくれた、折角会えたのだからこのまま一緒に試験を受けようと。しかもまるでもしも助けの手が間に合わなかったら背負ってくれるような口ぶりをしていた、優しい言葉にクラピカは一瞬言葉を失ったが直ぐに笑った。

「有難うシャネル、お前のお陰で走れる！！」

「気にすんなって。もしも転んでも俺が背負ってでも走るからよ！」

「それは流石に申し訳ないのだが……」

「あっお姫様だっこの方が良かったか？」

「なあ！？お、お前は何を言うんだ馬鹿か？！」

「ははははっそんだけ元気があれば問題なさそうだな！」

気持ちよい笑いを上げる彼は自分の気など知らないように底抜けた笑いを上げてそのまま走り続ける、クラピカは少々呆れつつも赤くなった頬を隠しながら先程より力が出ている足に力をこめて走り続けるのであった。そんな時

「ぬおおおおおおお！！！！絶対ハンターになったるんじゃないああああああ！！！！！！！！！！」

と凄まじい勢いで集団に合流しそのまま上位集団に突入した男が居た、レオリオだ。どうやら形振り構うのを止めたのか上半身は裸になり、服は腰に巻いてダッシュしている。そのまま見えてきた地上へと向かうであろう階段を登っていく、これからは更にきつくなるという事だろう。そしてサトツはペースを上げている、これはこち

らも上げていく必要が出てくる。

「あいつも元気だなあ、ありゃ大丈夫そうだな」

「寧ろ、私たちも負けて、られないなっ！」

「おうペース上げるか、着いて来れるか？」

「愚問だ、寧ろ——お前が私に付いて来いッ！！！」

挑戦的な笑みを浮かべて挑発するクラピカはシャネルを一瞥するとそのまま階段を先に駆け上がっていきハイペースを維持し続けるレオリオと並列する、一瞬後ろを向き笑みを浮かべるとシャネルもメラメラと勝負心が刺激される。

「負っけねえぞおおお！！」

「「ゴオオオルツッ！！」」

気付けば競争になっていたのかクラピカとシャネルは階段の終わりと到達すると勢い良く飛び出して声を張り上げた。飛び出た先は深い霧に包まれて2メートル先も見渡す事が出来ない場。

「はあはあはあ……ど、どっちが先だった……！！？」

「お疲れ様シャネルにクラピカ！」

「ようゴン……ふう、んっそちらさんは新しい友達か？」

「うん！一緒に競争してたキルアだよ！」

「宜しく、それと俺の目には二人同時だったぜ」

「おうよろってマジか……」

結果に若干がっかりしながらもバックからドリンクを取り出してゴクゴクと飲む、流石にあれだけ走りこんだ後に飲むドリンクと言うのは身に染み込んで来る。

「シャネル俺にも貰えないかな？」

「おう約束だからな、ほれ好きに飲めよ」

「あっ俺にもくれよ」

「私にも頼む」

次々とドリンクへを手渡し一同は喉の渇きを潤していく、休憩しつつ他の試験者がやってくるのを待っているとよろよろと階段を上りきったレオリオは倒れ付した。

「つ、着いたぁ……」

「レオリオお疲れ様！」

「お先に休憩させて貰ってるぞ」

「だらしねえぜおっさん」

「誰がおっさんだてめえ！！俺はお前らと同じく10代だああ！！！！！！」
『えっっうそ！？』

レオリオの発言に思わず凍り付き動揺しまくる一同、何気に今日一番驚いた出来事かもしれない。まさか20代後半のような風貌で10代だとは…………。

「レオリオって10代だったの！？うっそお！？」

「うそじゃねえよ！！っててめえらだけなんでなに飲んでんだよ！！！？」

俺にもくれ！！」

「あ、ああほらよ」

「老けすぎだろ……」

「喧しい！！」

不貞腐れたようにドリンクを飲むレオリオ、あそこまで驚かれたならまあ解らなくも無いが。

「あゝ一応言っとくが俺は20代だからな、今22だ」

「あゝ良かった、もしもシャネルまで10代だったらもう顎外れちゃうかと思ったよ」

「寧ろそんな形で22なのかよ、もっと歳行っても可笑しくないだろ」

「（私と5歳差だったのか……もっと年上かと思ってた）」

003話

ハンター試験第1次試験、薄暗い暗闇のトンネルを抜けた先に広がるは霧に包まれている湿原。

「ヌメーレ湿原。詐欺師の壱とも呼ばれています。2次試験会場へはここを通らなければなりません。ここにいる動物達は人間を欺いてエサにしようとする狡猾で貪欲な生き物です。うっかりしていると死にますよ。十分に注意してください」

「けっ騙されると解って騙されるような玉じゃねえぜ俺は」

自信満々に言い切るレオリオに同調するように多くの受験者は大丈夫だろうと思っているが、その自身は命取りにもなりえる。だが一部の受験者は息を呑んだ。

「騙されるなあ!!!」

その声と共に受験者達は動物の浅知恵程度に掛かる物かと思っていた自分を後悔するのであった。

——声と共にここへと出口の傍から這い出した来た男は酷くボロボロになりながら、サトツは偽者の試験官だと言い切った。瞬間的に広まるのは疑念の思いが駆け巡った、まさか既にっ。

「こいつを見る、この湿原に生息する人面猿だ!!!」

「うわぁサトツさんそっくりだ!?!」

男が見せたのは同じようにボロボロとなって朽ちかけているサトツの同じ顔をしている猿、この湿原に生息し人を騙して住処に誘い込んで捕食する猿だ、自分こそ本当の試験官だ！！と主張している。受験者の間にも疑問の念が入り、如何した物かと言っている。

「嘘、付かない方が良いいぜエテ公」

「っ！？」

ボロボロになった男と死んだと思われる猿の頭部が背後から掴まれ持ち上げられた、大人一人を容易く持ち上げ嘘と言いつ放ったのはシヤネルだった。

「な、何をする貴様！？し、失格になりたいのかぁ！？」

「嘘はいけねえな、お前からは獣臭がプンプンする。死んだフリは止めとけよ、下手くそ過ぎる。それにお前がホンモノならハンターライセンスを見せてみろ」

シヤネルの言葉に一同は一気に納得した、自分達が目指すハンターならばその証であるライセンスを持っていて当然。ライセンスはある意味では命よりも大切な物だ、それを持っていた物こそ本物になるが男は奪われて持っていないと言った。

「お前なあ……んな簡単に奪われるんだったらハンター辞め、っ！！！」

丸出しの嘘に呆れた時、突然感じた殺気。その直後掴まれていた男の顔と胸にはトランプが突き刺さり自称本物の試験官は命が終わっ

た。

「——これで決定◆ そっちが本物♥」

その言葉の先には指で軽くトランプをキャッチし傷ひとつないサトツが居た、ハンターの端くれであろう者がこの程度の事でやられる訳がない。それを証明する為の攻撃、それを行った男は不気味に笑いつつピエロのような顔を歪めていた。言い訳染みている訳でもなく挑発のように言った彼、ヒソカの言葉にサトツは唯淡々と答える。

「褒め言葉と受け取っておきましょう。ですが次からはどんな理由があろうとも私への攻撃は試験官への反逆とみなして、即失格とします。よろしいですね？」

「はいはい♣」

「おいピエロ野郎、俺を攻撃した理由はなんだ」

シャネルの手に握られているのは4枚のカード、偽者を攻撃する際にヒソカは同じようにシャネルにも攻撃を行っていた。カードをその場で捨てつつ睨み付ける、同時にオーラを発し威嚇も行うがヒソカはそのまま歪んだまま。

「なんとなく面白そうだったから♠」

「……なに言っても無駄だな」

肩を思わず竦めつつゴン達の元へと戻ると、サトツがこれから沼を越えていくと宣言した。騙し愛が日常として行われる湿原、気を抜けば惑わせられて命を落とす危険な道。一同は足を踏み出した、ぬ

かるんだ湿原を踏みしめて進む。霧は、奥へ奥へと行くほどに濃くなっていく、サトツを見失ったら最後追いつくことが出来ないだろう。

「ちくしょう何も見えねえぜ！！」

「五里霧中とはこの事か……」

「レオリオくラピカくシャネルく！」

霧の奥から聞こえてくる陽気なゴンの声、この状況でも声は明るかった。緊張感という物がないというのだろうか。

「キルアが前に来た方が良いつてさ！」

「ドアホく！行けるもんなら行ってるわい！！！」

「私達に構わず先に行ってくれ！！」

「えっく！？何とかならない！？」

「ゴン安心しろ、俺がついてる！お前たちの後をしっかりと行くさ！！」

力強く返事を返す、ゴンは一瞬考えたように間を空けると

「うん、シャネルも気をつけてね！！二人をよろしく！！いこっキルア」

「ああ」

と遠ざかっていく声、更に霧は濃くなっていきゴン達の姿は完全に見えなくなった。辛うじて見えるのは前を走っている人間の影のみ。

「これでは何処を走っているのさえ解らないな」

「大丈夫だ、前の影さえ見失なければ……」

「無駄だな、あれは偽者だ。ほら影無くなったぞ？」

「なあに！？」

眼を凝らしてみれば先程まで会った筈の影が消えている、前を走っていた筈の物は何かによって生み出された偽物、そして目の前に出現したのは人一人はあるかという巨大なイチゴ。

「なんだなんだ！？」

「これは……」

「俺の傍から離れない方が良いぜ、来るぞ」

「うわああああああ！！？」

周囲から響いてくる悲鳴は霧の中にまぎれている何かの存在を示唆している。クラピカとレオリオは言うとおりにチャンネルに更に近づいた。そして霧の奥から顔を覗かせているそれは口に試験者を咥えながらこちらに向かっていた。

「で、デカァ！？」

「こいつらの罠だったと言うわけか！」

その正体はこの湿原に生息するキリヒトノセガメ。背中に生えたヒトニイチゴを使い、騙された人間を捕食する待ち伏せ型の猛獣である。

「落ち着け」

動揺する二人が掛けられた声、シャネルの落ち着き払っている声。

「動揺は危険を誘発する。——おい亀公、俺と……じゃれ合うかあ！！！」

覇気が込められた一喝、同時に空気が変わりシャネルを中心とした周囲の霧が吹き飛ばされていく。霧が晴れるとたった一言、相手を威嚇するシャネルの感情が込められていた。霧の中に居た亀達は次々と啞えていた人間を捨てその場から次々と逃げ出していく。

「な、なんだ亀達が……？」

「逃げていく……？」

圧倒的捕食者に相対したかのような命の危険を感じさせれた亀達は一目散に逃げていく、一瞬にして恐怖が本能を支配し生きる為にその場から逃がした。

「うし威嚇、利いたな」

「お、おい今のお前がやったのかシャネル！？」

「ああ。威嚇した」

「い、威嚇と言うが周囲の霧さえ吹き飛ばしているぞ！？」

「まあその辺は気にしないでくれよ、さて時間食っちまったな。急ぐぜ」

そう言う二人をひょいっと脇に担ぐとそのまま勢い良く再び包み込んできた霧の中に突撃して行った。

「お、おいシャネル！？降ろせってか道解るのかよ！？」

「解るぞ、あの試験官の臭いは覚えてる」

「に、臭いって……は、恥ずかしいから降ろしてくれ！！」

「おいおい今降ろしてダッシュすると間に合うか解らんぜ？」

顔を赤くしているクラピカはそう言われると黙った、恥ずかしいがこのまま失格になるよりはマシだと思ったのだろう。

「（は、恥ずかしいぞこれは……）」

「おっと目の前に崖があるな、飛ぶぞ」

「おいおい今何だった！？崖がある飛ぶ！？否止まれよ！！？とまれええええ！！！？」

レオリオの叫びはシャネルには届かずシャネルはそのまま地面を大きく蹴った。レオリオはそのまま止まれと叫び続けるがふとした時足音が全くしなくなっている事に気づく。

「お、おいクラピカ……あ、足音、してないよな………？」

「い、言われてみれば……」

先程まで聞こえていた筈の地面を蹴る音が全くしていない、代わりに響いているのはまるで風が炸裂しているかのような耳心地が良い音のみ。つまりこの状況は自分達が飛んでいるということになり得る。

「あとちょいで着地するからな」

「えええええっマジで飛んでるのか!!?どうやってんだお前!!?」
「んっ体術?」

「んな体術があつてたまるかあ!?!」

「ハイ着陸するのでシートベルトは無いですけどショックに備えて
くださーい」

「「ええええっ!?!」」

霧が晴れてきたと思えたその直後、二人が感じたは落下する感覚だった。風が勢い良く肌を通り過ぎていく、間違いなく自分達は落ちている!!出来る事と言えば手でシャネルの身体にガッチリと掴む事だった。そして約3秒後、ドシンイン!!という音と共に3人は着地した。

「とおくちゃく、シャネル航空のご利用有難う御座いました」

「マ、マジで着いてやがる……」

「シャネル、お前は何でもありか……?」

着地した辺りは受験者が腰を下ろしたりして休憩していた、試験官のサトツが時計を見つつ待機している姿もあり間違いなく目的地であると納得せざるおえなかった。クラピカとレオリオがどっと疲れたように腰を降ろすとそこへゴンとキルアが走ってくる。

「シャネル、クラピカ、レオリオ!!やっぱりだ、空にいたのって3人だったんだ!」

「如何言う事だどうやって空飛んでたんだよ!?!」

少年というべき二人は眼を輝かせながらシャネルを凝視する。

「おうそうだぞ説明しろよチャンネル！！」

「ああ、説明を求めろ！」

「あゝ解った解った！そう詰め寄るな！！」

迫ってくる4人を退けつつ適当にそこらへんの木に背中を預けつつ休憩する、それに合わせるように4人もその周りに座り聞きの体勢に入っている。

「サトツさん、まだ時間あるよな？」

「ええ、後15分ほどで締め切るつもりです」

「ありがとう、んじゃ話すか。まず俺が空を飛んだのは間違いない」

「あれは体術だって言ってたけどあれってマジなのかよ？」

先程聞かされた飛んだ手段、それが体術だと言われた二人は俄かに信じられなかった。人間の身体能力と技術を組み合わせた結果空を飛んだという事が納得できない。

「マジだ。俺はいくつ硬い術を使えるんだがその一つ、さっきのは月歩っていう体術だ」

「月歩？」

「そっ。簡単に言えば空気を蹴る技だ、所謂ゲームの2段ジャンプをする体術だ」

「マジかよすっげえ！！なあそれって俺にも出来るのか！！？」

「俺もやってみたい！！」

興味津々に聞いて来たのはキルアとゴン、正確には空を飛んだのではなく空気を蹴り続けて移動しているという事だが擬似的に空を飛んでいるに等しいからか少年二人は自分もやってみたいという思いに駆られていた。

「キック力を高め続けりゃ出来ると思うぞ？俺にだって出来た位だから」

「凄いや俺にも出来るかもしれないだ！！よし絶対にやってやるぞ！！」

「なあなあもっと聞かせてくれよ、他にはどんなのが使えるんだ！？」

「私も興味があるな、私にも習得出来る物ならな習得してみたい」

「俺もだな。習得したいかって言うと微妙だけど興味はあるな」

この後質問攻めにあうシャネルを救うのは大きく声を張り上げ此処が第2次試験会場だと宣言したサトツであった。

004話

12時を刻んだ時計が鳴り響く時、2次試験会場と案内された建物の扉が大きく開いた。一同が氣を立て直しつつ固唾を飲んで見守る、が中から聞こえてきたのは凄まじい唸り声……

「如何お腹はだいぶ減ってきた？」

「聞いて通りもうペコペコだよお」

「そんな分けて二次試験は料理よ！美食ハンターである私たち二人を満足させる食事を用意したものが合格よ」

どうやら先程から響いていたのは腹の音だったようだ……だが腹を鳴らしている男はかなりの巨体。成人男性の平均身長を軽々と超える2メートル越えのシャネルでさえ見上げるほどの体格、そしてその前でソファに腰かけている女性、この二人が二次試験官という事になる。

「タイムアップは俺たちの腹が満ちたらね。そして俺が指定するメニューは俺の好物の豚の丸焼き！！この森林公園に生息する種類なら自由、では二次試験スタート！！」

中には料理をした事も無いと不安になる受験者達だが少なくとも食材を捕獲する事さえ出来る簡単に調理出来る丸焼きという事にほっと胸を撫で下ろした。そして一同は一気に獲物を探して走り出していく、他の受験者よりも早く発見し調理するために……。

「いやぁ丸焼きで助かったぜ、俺料理なんてした事ねえからよ」

「捕まえて焼くだけだもんね」

「まっさっさと見つけますか」

「そうだな、幾らあの男が大食漢そうだといっても限度はあるだろうし」

「おっ居たぞ」

シャネルが発見する、一同は喜んで向かおうとするがその豚が食べているものを食べて絶句する。骨、動物の骨をバリバリと噛み砕いて食している、つまり肉食の豚。そしてそのサイズ、目測で4メートル近い。そんな豚が群れを成している、下手に突っ込めば食われるだけだろう。

「おいおいマジかよ……ほ、他の探した方が良いじゃねえか？言ってたじゃねえか種類自由だって……」

「でも急がないと拙いよ」

「うし、俺が一肌脱ごう」

立ち上がるシャネル、サムズアップすると单身豚の群れへと向かっていった。

「お、おいシャネル!!」

「静かにしろレオリオ、豚が気付くぞ!」

「大丈夫なのかあいつ」

「大丈夫だよ、だってシャネル強いもん!」

「さてと、確かこいつはグレイトスタンプ。鼻は固く相手を押し殺す寧猛な種類、やるか」

身体から余計な力を抜きつつ呼吸を整える、意識を周囲の空氣に溶け込ませつつ静かに体を流しつつ氣配を断つ。ゆっくり、ゆっくりと5匹ほどのグレイトスタンプに接近し右手の人差し指だけをゆっくりと伸ばす。指先に力を込め、豚の肉体へと打ち込んだ。

「指銃・ノッキング」

指を打ち込まれた豚は数秒の間は何事もなかったのようになっていたが、少しずつ動きが鈍っていき遂には横倒しに倒れこみ動かなくなっていく。シャネルが行ったのはノッキングという技術、本来は細い針などを使用し生物の小脳にある運動を司る神経組織に刺激を与えて一時的に麻痺状態にする。シャネルの場合はそれを六式の一つである指銃と併用して成功させた。

「すっごおーい！！！凄いよシャネル、カッコ良かった！！」

「へへへっそうか？」

「いやマジですげえよ、ちょっと見直した」

軽い威嚇で他の豚を追い払うと捕獲された豚の元へとゴン達は降りてくる、流れるような氣配断ちに瞬時に相手を麻痺させる技術。キルアは純粹に感心していた、面白いものが見れたと言いたげな表情を浮かべながら。

「あれも体術の一つなのか？」

「ああ、指銃^{シガン}っていうんだ。それより早く内臓と血抜きして丸焼きにするぞ」

「おっくー!!!」

シャネル指導の元で行われた内臓取りと血抜きなどの処理、その後いち早く持ってきたシャネル達5人は早々に合格をもらい次の審査が始まるまで待つのであった。その間、再び六式について詳しい説明をせがまれるのであった。特にキルアにはしつこく聞かれていた。

「それじゃあこれから2次試験後半戦と行くわよ」

ブハラが出した豚の丸焼き、その課題をクリアしたのは73名。グレイトスタンプを上手く捕獲出来なかったものは脱落している、そして次の課題は……

「あたしのメニューは……スシよ!!!」

スシ、その言葉が放たれた瞬間に受験者に広がったのは？だった。殆どの受験者は首を傾げている、この世界にも勿論日本に該当する国は存在しその民族料理となっている。必要な道具や最低限必要な米が準備されていた。

「スシはスシでもニギリズシしか認めないわ。それじゃスタートよ、あたしが満腹になった時点で試験は終了、その間に何コ作ってきてもいいわよ!!!」

スタートしたと言っても全く解らない料理を作るなど出来る訳もな

く悶々と頭をひねったり米を握ったり包丁などの道具を見つめて推理をしている者が殆ど、それに寿司は知識だけあっても簡単には出来ないしよりによって握り寿司、難関と言わざる得ない。

「どうすりゃいいんだ？ニギリ……想像出来るけどどんな食材使ったらいいか解らんぜ」

「うーんこのお米を使うんだよね？」

「でも包丁とかあるって事は何か切ったりするんだろ？」

「皆ちよっと待ってくれないか？ちよっと試験官に聞いてくる事あるから」

ここで再びシャネルが行動を起こす、クラピカが何を聞くのかと尋ねると笑顔でちよっと待ってなと言われてしまう。

「なあメンチさん、食材についてだが俺が持ってきてる食材とか使ってもいいのか？」

「うーん……まあ良いでしょう、例えば食材を持っていたとしてもそれを生かす腕前がないと無意味だからね」

「了解だ、どうも」

戻ってきたシャネルに一同は駆け寄った。

「何を聞いたんだ？」

「まあここだと聞かれるかもしれない。外へ行こう。幸い、寿司の事を知ってるらしい奴に殆どの奴は夢中みたいだし」

視線をずらせば寿司の事を知っているであろう294番に視線が集

中している。周囲の人間が作っている物を見て嘖き出したりしている、あれでは自分で知っていますと主張しているようなものだ。一同はそっと外へと出る。

「結論から言うぞ、俺は寿司の作り方を知ってる」

「マァアジかもがもが……プハァ何すんだクラピカぁ!!?」

「こっちの台詞だバカリオ!!他の受験者にばれたらどうする!?!」

「まあまあ二人とも、話聞こうよ」

「早速教えてくれよチャンネル」

「おう」

「はくん成程ね」

「作り方が俺がある程度教える、食材も俺が持ってるのを使おう」

「しかし本当に良いのか?」

「いいに決まってるだろ、それにどうせなら美味しいもん作りたいからな!」

その言葉を言い放つチャンネルの顔に裏などなかった、考えてみれば前半の丸焼きの時も彼はかなり真剣に調理に取り組んでいた。一心に美味しいという言葉聞きたいが為に、彼も料理人の端くれなのだ。4人は後に続きあまり目立たないように端の調理場を使用して早速寿司の制作に取り組み始めた。

「あんまり酢は入れすぎるなよ、冷めちまう」

「うん!」「おう!」

「こんなんでいいの?」

「おいしい切り方すんなおい、上出来だ」

「空気を握るみたいに丁寧にな、クラピカ」
「解った」

懸命に調理を進めていく一同、慎重に酢を入れ丁寧にネタを切り優しく握る。本来美味しい寿司を作るには何年も修業がいる、故にこれは美味しさで決める物ではない。寿司という未知なるものへどうやって挑戦していくかを試している。

「よし出来たぜ！！！」

「結構大変だったね、でも楽しかった！」

「俺結構美味かっただな、魚切るの」

「うむシャネルのお陰だな」

「俺は助言しただけで結果的に動いたは皆じゃないだよ、さっ行こうぜ」

人数分、5人で作った寿司をいよいよ試験官へと持っていくが自分たちより先に完成させた周囲の人間を笑っていた294番ことハンゾーが試験官に首元をつかまれて大声で説教されていた。

「ざけんなてめー鰯をマトモに握れるようになるには10年の修行が必要だって言われてんだ！！！！キサマら素人がいくらカタチだけマネたって天と地ほど味は違うんだよボゲ！！！」

シャネル達は調理に集中していたために気づかなかったが、ハンゾーは故郷が日本で当然寿司を食したこともあり余裕で合格出来ると踏んでいた。が彼の作った寿司は形だけは握り寿司だがただそれだけ、しかも寿司は魚の切り身を乗せたお手軽料理と言ってしまった

為料理人でもあるメンチの怒りを買ってしまった。しかも堂々と他の受験者に情報を漏らしている。

「メンチさん、俺達も出来たぜ。5人分纏めて審査して貰いたい」
「あゝあゝあん！！？……まああんた達は自分達でちゃんと作ってたっぽいしいわ、審査してあげるわ」

ハンゾーは納得行かないと言いたげな顔で戻っていくが自分の発言で殆どの受験者が魚を捕りに行ったことに気づくと大慌てで再び魚を捕りに向かった。メンチはそれを見て鼻を鳴らしてから改めて5人が作った寿司を見た。

「（見た目は……ちょっと不格好なのもあるけど上出来な部類ね、ネタも綺麗に切られてる）」

「……」

「あむ……（んっ酢飯はかなり良いわね、バランスも良いしネタの味の障害せず引き立ててる）」

無言、先程まで騒がしかった空間は静まり返っていた。時計の秒針が動く音さえも木霊しそうなほど、思わず5人は静かに汗を流しつつ固唾をのんで見守っていた。美食ハンターとは食を追及するハンター、新たな味の創造を目指す者達。中でもメンチは世界有数の料理人として名を馳せている人物、そんな彼女が真剣に味わい審査をしているのをブハラは少し意外そうに見つめていた。そして全ての寿司を食べ終わると一口茶を啜った。

「結構美味しかったわよ貴方達の寿司、ちょっと物足りない部分も

あったけどまあ良いでしょう！貴方達は、合格よ！」

2次試験合格、よってゴン、キルア、レオリオ、クラピカ、シャネルは3次試験への切符を手に入れる事となる。この後、形だけ真似た受験者が続出しゴン達以外は不合格にすると言い出したメンチだがハンター協会の会長たるネテロの発案により合格者以外の再テストが実施、結果的に43名が3次試験へと駒を進めるのであった。

「成程。つまりシャネルは六式と呼ばれる体術を会得しているのだな」

「そう言う事だな」

第3次試験へと向かう飛行船の船内、1次2次の試験を乗り越えた受験者達は飛行船へと搭乗し次の会場へと向かう事となった。疲労の色が見えている一同だが3次試験は翌日と知らされホッと胸を撫で下ろす、飛行船での短い空の旅。食事を済ませるもの、さっさと眠りに入る者と人それぞれの過ごし方をした翌日。早朝7時ごろ、シャネルとクラピカ、レオリオとキルアは食堂で食事を行いつつ談笑を楽しんでいた。

「人間の身体を武器に匹敵させるってとんでもねえ体術だな」

「全部生きる為に足掻いた結果さ、何より死にたくなかったからな」

修行時に何度もシャネルは死に掛けた事があった、大型の猛獣に襲われるなどがその際たる物だった。生半可な六式では到底適う訳もない猛獣に心の奥底から恐怖した事もあった、このまま死んだほうが楽になるのではないかと思ったがどうせ死ぬなら足掻いてからの方がカッコいいと結論付け、馬鹿みたいに修行した。

「一日身体に重り付けてそれで動いても大丈夫なような肉体作り、何百回と岩に向かって拳振るったりを飛ばしたりした。半年ぐらいには六式は基礎部分が完成して体得が出来てたな」

「へえ……あっそうだねえ指銃ってこんなんでいいの？」
「っ！！」

会話の最中にキルアがシャネルに向かって指を突きつけた。突然の攻撃だったがシャネルはそれを左手の指と指の間で受け止めるが微かに頬には傷が出来ていた、まだまだ出来が甘いそれは十二分に指銃といえる物だった。

「おいおいマジか？まだ練習が足りないが十分に指銃と言えるぜ」
「へへへっ結構簡単だったぜ」

「俺には出来そうもねえな……」
「私もだ……」

茶を啜りつつキルアの才能にシャネルは戦慄を覚える、指銃は六式の中では難易度はかなり高い。それを簡単に教えただけで出来るようになっていいる、それだけに何処か嫉ましい……。

「他に出来る可能性があると言えば剃かな」
「剃？」

「瞬間移動術だ。これは地面を瞬間的に何回も蹴って一気に加速するんだ、だから練習すれば普通に出来る」

そんな説明を行っていると8時到着予定だった飛行船が予定が遅れたのは1時間半ほど送れて目的地に到着したとアナウンスが入った。遂に始まる第3次試験、それぞれが緊張した面持ちで飛行船へと降りた先は高い場に立てられた巨大な石の塔、トリック・タワーの頂上がスタート地点となった。ルールは簡単、72時間以内に生きて

下まで降りるという物。

「まあ簡単だな……方法が解らないと言う一点を除けばな」
「だな」

トリック・タワーの頂上はかなり高い、軽く見積もっても30メートルはくだらないかも知れない。飛び降りと言うものは論外だ。

「なあ、シャネルが空飛んで降りればいいんじゃない？」
「あっ成程キルア頭良い！！」

っと言う訳でやってくれるよね？っと言いたげに眼をキラキラさせて迫ってくるキルア、かなりいい性格をしている。だが実の所は月歩のコツを掴みたい為にマジかで見たいというのが本性だろう。

「おいおいこの人数を抱えて下まで降りろってか？無茶言うなよ……精々二人までしか抱えて行けねえって……」

「それなら大丈夫だろ、だって72時間あるんだぜ？」
こんなに

「このクソ餓鬼意地でも自分で降りない気か……！！」

そんな事を騒いでいると外壁を引っ掴んで降りていたロッククライマーの男が猛獣に食われて空高く連れて行かれる光景が過ぎった。シャネルはこれでも降りる気……？と視線を向けるがキルアは勿論！と言いたげな顔をしている。

「なら多数決ね、このままシャネルの月歩で降りた方が良いと思う人？因みに俺賛成」

「はいはいはい！！おれはの方がいいぜ！！」

「うーん、方法も解らないしね。俺も賛成！それに猛獣の迎撃は俺達でやればいいし」

「ふむ……確かにそれなら協力し自分達の力も使っている、私も賛成だ」

「お、おいしい……」

結果。賛成4、反対1でシャネルの月歩を使って降りと言う事になった。

「くそお……お前ら俺を便利屋と勘違いしてないよな」

「全然☆この笑顔に誓って☆」

「殴りたい、この笑顔（#。D。）」

「でもいざとなったら嵐脚で迎撃できるよね」

「……確かにな」

ゴン達はシャネルを酷使用する事でトリック・タワーを無事降りる事に成功。結果として、シャネルは月歩でトリック・タワーを往復する事になったため全身疲労で倒れこむように眠った。

「あああくぞお……てめえら絶対覚えてろよ……」

「おいおい多数決で決めたじゃねえか」

「つつうかキルアてめえ面白そうだからって理由で来てんのに何試験スルーしてんだよ！？自分の力でやれ！！」

「いや空飛ぶのって面白そうだったし」

「……もういや」

72時間後、無事3次試験をパスする事に成功した一同。案の定と
言うべきか、試験官からは若干呆れられていたが。どうやら頂上
には回転する床がありそこから党内部に侵入しそこから下へ向かって
いくのが正攻法だったらしいがキルアの発言が全てをぶち壊した瞬
間であった。

そして、そこで受験者はくじを引かされた。そこには狩る者と狩ら
れる者の番号が書かれていた、これより受験者達はゼビル島という
島で一週間のサバイバルバトルを行う事となった。自分の引いたく
じにかかれた番号札を持っている人物を狩るっと言う物だ。

自分のターゲットのナンバープレートは3点、自分のナンバープレ
ートも3点、それ以外のナンバープレートは1点と換算し一週間以
内に6点を集めきった物が合格となるルール。

「狩りか：久しぶりだから気をつけないとな……殺さないように」

006 話

「狩りか：久しぶりだから気をつけないとな……殺さないように」

開始された第4次試験、ゼブル島でのサバイバルバトル。他の参加者のナンバープレートを奪い合計6点分とし1週間それを保持すれば合格となる試験。シャネルの対象は198番、それが一体誰なのかは覚えていないが最悪の場合は出会う受験者を片っ端から狩って行きそれで6点分回収すれば済む話だ。

「さてと……やりますか、円！」

高い木の頂上から島全体を見張らすシャネル、遠くまで良く見えるが全員が慎重に行動しているのか視認は出来ない。流石にこれでは探しにくい、中には匂いも消している用意周到な者もいる、自分の鼻がいいといっても臭いが消されていては意味が無い。その対策としてシャネルは念能力の応用技である「円」を発動する。

「俺の円の範囲は約50m強、成長してるから大体55って所か……」

「円」。念能力の基本技を応用した技術の一つであり、数ミリから数センチの間隔で纏っているオーラを必要な間隔まで広げる技術。円の内部にはあるもの全ては肌で感じ取れるかのように認知出来るため索敵面で非常に重宝される技術。

「（取りあえずこの周囲には居ねえな……移動してみっか）」

跳躍し木の上から上へと飛び移っていく、その間にも円によってその周囲の状況がオーラを通じて伝わってくる。木の葉が落ちた枚数、風にそよいだ植物の位置、動いた生き物の動きや場所が認識できる。最初のうちは慣れなかった、本来認識出来ない筈の広範囲の物を触って見ているかのようなこの状態に。使って見て十数秒でぶっ倒れたのを覚えている。だが二年という修行、毎日毎日少しずつ慣らすように円を使って慣らして行った結果今では55mほどの範囲まで円を拡大する事が出来るようになった。

「（……んっ）」

円に反応、人間が4人、いや5人。一人は巧妙に隠れているが円にはしっかりと引っかかっている。例え気配を消していたとしても探知出来る、これが円最大の利点とも言える。良く確認して見ると一人はキルアである事が解った、ここで姿を現して合流してみるのも悪くない。何より第3次試験の文句が言える。そう思うと直ぐに木の上から降りる、そこにはキルアが一人の男で何かを投げ終わったかのような体勢でいた。その前にプレートが飛んで行き円の範囲外へ消えていくのと同時にもう一人の人間が一方のプレートへ向かっていくのを感じる。

「よっキルア」

「シャネルじゃん、どうした」

「いや纏まった気配を感じてきて見たらこの光景だったってだけ、つうか今投げたのプレートだよな」

「ああ、俺のターゲットじゃない奴2枚投げたぜ。197と198」
チャンネルは思わずアチャーと言葉を漏らした、自分の目的のプレートがどこかに飛んで行ってしまったのだから。

「ああそれなら大丈夫、投げる寸前に投げるの入れ替えたから。もう一方の取りに行つてそれをトレード搦れればいいと思うぜ」

「それナイスアイデアだな、キルアどうせなら俺と組まないか？1週間過ぎすのに一人じゃ暇だろ」

「ああいいぜ、その代わり六式の話し聞かせてもらうぜ」

「やれやれ天才に授業するはめになるとはね」

二人は同時に地面を蹴つてその場を離れつつもう一つのプレートの搜索に向かう、キルアが投げた方向に向かいつつ円を展開してプレートを探す。どうやら木にいい感じに木に引っかかっていた為プレートはあっさり見つかった。そしてすぐさま反対方向へと向かつて見ると、プレートを持ったまま地面に手について項垂れているハゲの頭の忍者、ハンゾーを発見する。

「おいそこのアンタ、198番のプレート持っていないか？」

「アン……確かに持つてるが……ってさっきの小僧!？」

「やっぱり居たんだな。結構バレバレだったぜ」

「ンガァ……」

落ち込んでいる所へプライドを抉る一撃が炸裂し更に色が白くなるように落ち込んでいく。

「あゝ……お前のターゲットは197か？それだったら今俺が持つてる197とその198を交換してくれないか」

「マジかっ！！？するする！！」

一気に顔色が回復したハンゾーは早速トレードに従った、チャンネルも少々ハンゾーのテンションに引きつつもトレードを実施する。互いが得をする事、断る理由も無い。互いにしっかりと番号を見せ合った上でトレードをし完了する、これでこの場の3人の持ち点は6点、合格するのに十分な点となった。

「おっしゃああこれで後はこれを守りきるだけだぜ！！んじゃ有難うな感謝するぜ、しかあしその小僧には礼は言わせねえぜ！！」

大笑いしながら素早い身のこなしで去っていくハンゾー、しかし騒がしい。あれで本当に忍者が務まるのか甚だ疑問である。

「さてと、俺達も適当な所で隠れつつ時間過ぎるの待つか」

「おっと六式の話忘れてもらっちゃ困るぜ」

「ちっ………っておいキルアまさか一週間で残りの六式覚えようとか言わねえよな」

「ニヒ☆」

小悪魔のような笑みを浮かべる一周り年下の少年に軽い頭痛を覚えつつ一目に付きそうに無い場所に移動するのであった。

「うゝん……らあっ！！」

第4次試験開始から7日。試験終了となる日がやってきた。シャネルとキルアは共に行動しつつ場所を変えながら六式の訓練に明け暮れていた。流石のキルアでも他の六式は中々体得出来ずに苦戦していた、剃は辛うじて擬似的なものは出来掛けているが本物と比べるに程遠いもの。現在は嵐脚の練習を行っているが出来て精々キレの良いキックにしかなくなっていなかった。

「ああゝムツズ、六式ムツズ！！指銃は簡単に出来たのに何でだよ！」
「否寧ろ指銃が一番難しいんだが……」

六式の中でも習得難易度が高いのが指銃、それを簡単に出来てしまっているキルア。出来た理由は彼は手の形をナイフよりも切れる形へと変えているからだと思われる。その状態は手の筋肉も通常よりもかなり硬くなっており指銃が凄まじくやり易い形態と成っているから。

「剃とかから鍛えた方が良くと思うぞ、嵐脚は要するに超高速の蹴りによる衝撃波だからちゃんとした剃を使えるようになれば嵐脚もやりやすくなると思うぞ」

「やっぱりか……でもなゝんか剃のコツが解らないんだよな」

「一瞬の内に全力ダッシュ、これに尽きるからなコツ」

「それコツじゃねえだろ最早精神論に近い何かだぞ」

実際そうなんだからしょうがない、瞬時に地面を10回以上蹴り、瞬発的に加速する。原理は極めて単純な物でコツも一瞬の内に全力ダッシュの他無い。これを何度も繰り返すしか無い。シャネルだっ自分

てそうやって完全に会得したんだからしょうがない。そんな話を話しあっていると船の音と大きなアナウンスの音が耳に入ってくる、遂に4次試験終了の時間。1時間以内に帰って来いという物だ。

「時間か、行くぞキルア。帰りまで剃な、そうすれば対処マシンになるだろ、んじゃスタート!!」

「あっちょっと待てよずりいぞ!!」

剃で一氣に加速してもう見えなくなりかけているシャネルを追いかけるようにキルアも同じく剃で追いかけるがレベルの差のせいか付いていくのがやっとだった。到着しプレートを見せ合格を確約させるとゴンたちが来るまで再び六式に付いて話し合うのであった。

「しかし（モグモグモグ）ストレス溜まるぜ。キルアの野郎、俺の睡眠時間を何時間削ったが（バリバリバリバリ）」

「まあ奴も子供だ、少しは大目に見てやったら如何だ？」

「（ガツガツガツ）しかしなぁクラピカ」

「まずは食べ終わってから話しをしよう、幾らでも聞く」

第4次試験合格者は再び飛行船へと乗船し最終試験へと駒を進めた。残るは最終試験、これまで過酷だったハンター試験。その最後の関門もきつと負けず劣らずの難問の筈、そんなラストに備えて一同は到着した会場となるホテルの部屋で休みを取っていた。シャネルも例外では無くクラピカと共に食事をしつつ雑談をしていた。傍から見ると大喰らいの彼氏の食べっぷりを見て笑っている彼女の図が食堂の一角に出来ていた。

「それにしても……かなり食べるんだな」

「ああ、俺は燃費悪いからな。結構な量食わねえともたねえんだ」

「しかし気持ちのいい食べっぷりだな、見ている私も食欲が出てくるというものだ」

「んっそうか？」

周囲に積み重なっている大量の皿、どれもソースの一滴すら綺麗に完食され料理人冥利に尽きる。が既に50人分異常の料理を完食している、今度は作り手としては料理人泣かせである。それと比べたら些細のものがクラピカも一般人としてはそれなりにお代わりし

ている方だった。

「ふう……ああ、食った食った俺幸せ♪」

「私もだ、少々食べ過ぎたな」

結果。クラピカは2・3人分、シャネルに至っては67人前の料理を完食していた。厨房からは料理人たちの疲れの声が聞こえて来そうだ。食後は互いに紅茶を飲みつつ雑談に華を咲かせていた。

「それだけだっつってんのによキルアの野郎しつこく聞いてくんだよ他にコツがあんだろ?! ってマジで無いのに」

「悔しいんだろうな、まあ気持ちは解らなくは無いい」

「だからって夜中俺が寝てる間ずっと言ってくるんだぜ……? ストレス溜まりまくりだ」

コーヒーを啜りつつ荒れそうになる内心を押さえ込む、一度ストレスを抱えるそれを引きずってしまうというのは悪い癖だ。一度受けた屈辱を絶対に忘れずに報復するという物に近いそれは元々持っていた気質、故に元々生きていた世界では執拗に相手を付け狙う猟犬と揶揄されていた。何とかもう抑えられているが多分その内仕返しををすると思われる。同じ位の仕返しを。

「なあクラピカ俺も聞いて良いか、お前が何でハンターになりてえるのか」

「……ああ。話したくないだろう事を聞いたのだから私も語った方がフェアだな、すまない今になるまで気付きもしなかった」

「否そこまでは考えて無かったんだけど……純粹に気になっただ

けで」

その言葉に嘘は無く本心、このハンター試験に何故参加したのかが気になっただけだった。そんな思惑とは裏腹に若干険しげな表情を浮かべたクラピカは口を開いた。

「私がハンターを志望したのは幻影旅団を捕まえる為だ」

「幻影、旅団……。蜘蛛か」

幻影旅団、通称「蜘蛛」。盗みと殺しを主な活動とする盗賊集団。上位の賞金首としてA級として手配されている盗賊集団、一流のハンターでさえ手を出すのを躊躇し出来る事ならばそいつらは相手にしたく無いと思うほど。とどのつまり、クラピカの目的は復讐と言う事になる。

「ほう……。？随分と大物を狙うんだな、それでか六式の話を聞いてきたのは。それなら別に教えてやっても構わないけどな、ハンター試験終わったら早速指導いるか？」

虚を突かれたかのように驚いた顔をするクラピカ、彼の発言に驚いたのだ。彼は復讐の為に手を貸してやっても良いと言っているのだ、普通なら復讐と聞けば誰もが止めるだろう。だがシャネルはしない、寧ろその逆をしている。

「……。意外だな、正直止めると思っていたが」

「他人の目的を他人がどうこう言って良い資格なんて無いだろ、仮に俺が止めたとしてもそれを聞くか？」

「話し自体は聞くが止めないだろうな」

「だろ？俺は復讐それを否定も肯定もしない。だがクラピカ俺はお前を肯定する」

「……何故だ？」

醜い行為をしようとしている自分を肯定する。ある意味狂っている理論にクラピカは少し混乱している。

「復讐が正しいか間違ってるなんてくだらない口論だと俺は思う、結局は自分の感情と生き方に打つ楔だ。けどな自分だけは否定しちゃいけねえ、自分を信じ続けるクラピカ。お前を信じる俺を信じろ、そうすればお前はお前でいられる」

「……………フツ」

思わずクラピカは小さく笑った、そしてそれから大きな声で笑い声を上げた。実に清々しい笑みを浮かべての笑いだ。

「私を信じるシャネルを信じろか！なんだそれはカッコ付けているのか、はははは！！！」

「そ、そんなに可笑的いか……？」

結局の所彼が言いたい事は自分を見失うなっと言う事だろう、自分が自分を見失えば色んな物を失っていく。復讐を誓った時の感情も、ここまで生きてきた思いも消え去ってしまうと。

「キャラに合っていないっと言う感じだったぞハハハハッ！！」

「ああもうそんな笑うなって！！」まったく今更になって恥ずかしくな

ってきやがった！！」

「すまないすまない！」

涙も流しクラピカは改めて席に着きむくれているシャネルをなだめるように言葉を出した。

「ここまで笑ったのは久しぶりだ、心から笑えた」

「ひ、ひでえそこまで言うか……？」

「晴れたような気分だ……有難う、シャネル。出来れば私を支えて貰えないだろうか、強くなるために」

「……まっいいか、おう！」

互いに浮かべたのは弾けたかのような笑顔、見ていくすぐったくなるがどこかずっと見て居たくかのような笑みだった。

「あっクラピカ、さっきの言葉ってちょっとプロポーズっぽくね？」

「えっ……ッ！！？い、いいいや違うぞそ、そう言う意味なわけが無くてああでも支えてほしいというのは本心だが意味が違うぞ！？支えてほしいというのはその家庭的な意味では無く心の支えという意味でだな！！？」

「うーむこれが天然キャラか……」

『受験番号405番の方。405番の方、会議室へおこし下さい』

「もう来てるんだけどね、失礼しまーす」

雑談中に響いたアナウンス、必死に弁解しようとしているクラピカ

の声を中和するように聞こえてきたのはこれから会長が面談を行うという物だった。番号順に呼ばれるということでチャンネルは一番最後、取りあえずそれまでは顔を赤くしそっぽを向いているクラピカをニヤケながら見つつつコーヒーを啜っていた。そしてやってきた自分の順番、扉を開けると和室の中に一人で会長が待っていた。

「まあ座りなされ」

「んじゃ失礼してっと」

ネテロに促され向かい合うように座り込む、間には机が置かれその上には写真があった。受験者全員文の写真だ。

「まず、どうしてハンターになりたいのかな？」

「身分証明の為だな、俺ってば戸籍が無いみたいなんだわ。んでこのままだと就職とかいろいろ大変でしょ？ライセンスあれば仕事に困らないし、漸く一般人らしい生活ができると思ってさ」

「ふむなるほど、結構苦労してるのお」

「まあね。でもまあ割と楽しい人生だったと思う」

ほう？とネテロが興味深そうに呟いた。嘘は言っていないと感じる、間違いなしの本心からの言葉だがそれで自分を捨てたであろう親を恨んだり苦しく辛い人生だったといわず、思わないのだろうか。

「まあ苦しいと思える時もあったけど今充実してるからさ、ダチも出来たし」

「そうかそうか」

今が充実していると言った時のシャネルの笑みは素晴らしかった。それに思わずネテロも嬉しそうに言葉を漏らす、まるで学校が本当に楽しいと語る孫の話を聞いている祖父のように。

「では今一番注目しておるのは誰かの？」

「ふくん……嫌な意味で44番のヒソカかな、鳥肌立つ」

「では一番戦いたくないのは？」

そう質問されるとシャネルは腕を組んで頭を抱え始めた。

「あ……う……」

「別に複数でもかまわんが？」

「え……ゴン、キルア、レオリオ、クラピカかなあ。ダチだし、でもなあゴンとキルアには何処か戦ってみたい！って衝動があるんだよなあ」

「成程成程、因みに聞くが何故その二人と戦いのかな？」

「ほぼ何となく何だけどなあ……強いて言うならゴンはなんか楽しそうだし、キルアにはちょっとした借りがあるから、かな」

「あい解った、では面接は終わりじゃ」

一度礼をしてからシャネルは部屋から出て行くとネテロは思った以上受験者の意見が偏っている事とこれをどのように整理しているか考える。

「ふむう……考え甲斐があるのお」

ついに開始されようとする最終試験。ホテルの一室で発表された最終試験内容はトーナメント形式の一对一の戦い、武器OK、反則なし、相手に参ったと言わせれば勝ちという単純明快ルール。が合格者を出す決まりがかなり変則的な物となっている。ネテロは一勝すれば試験には合格と語った、いふなればこのトーナメントは負け上がりトーナメント。本来はチャンピオンが着くはずの頂点には敗者となるという事になる。

そしてトーナメントの組み合わせはこれまでの試験内容の成績によって振り分けられていた。成績が良い人間ほど多くのチャンス、最大6回のチャンスが与えられ一番少ない者にも2回のチャンスが与えられる。成績が良い者からハンゾー、シャネル、ゴン、ポックル、キルア、ギタラクル、ボドロ、クラピカ、ヒソカ、レオリオとなっている。だがその決め方に異議を唱えたものがいた、キルアだ。

「身体能力値、精神能力値、そして印象値から成績を決められている。最初の二つは言うまでもあるまい？そして印象値は前の二つでは測れない何かじゃ、言うなればハンターの素質みたいなもんじゃな」

「……（シャネルは兎も角、ゴンに俺が負けるってのか……？）」

最低基準の一部を聞かされたキルアだがその表情は硬く納得いかなさそうな物、身体能力や精神的にも明らかに自分が勝っているという自身がある。それでも自分はゴンよりも下の成績にされている、

あまり納得出来ぬままキルアは引き下がった。

「ではこれより第一試合を開始します。ハンゾー対シャネル、前へ」

名を呼ばれた二人はゆっくりと前へと出た、シャネルはゴンから頑張れと言われレオリオからは気合入れていけ、キルアはまあ頑張れよ、クラピカは心配などしていいからなと激励の言葉を受け取り笑顔で返答しつつハンゾーと向かい合った。

「立会人をつとめさせていただきますマスタと申します。よろしく」

「おうよろしく頼むぜ」

「よお久しぶり、俺をつけてた奴だろ？よろしく頼むぜ」

挨拶を済ませると二人は向き合った、そしてマスタが開始の合図をすると一気にその場の空気が変わっていく。先程までの空気から一転、凍りついた大地の冷たい空気のような肌寒さを感じる。

「お前、つええな（こいつは……殺す気でいかねえとこっちが狩られるな）」

「お前もな（さてと……どうやって攻めるかな）」

互いに強さを解る、故に互いに動かなかった。下手に動けば先手を打たれる、それを承知しているがシャネルはそこまで辛抱強くはない。必要とあれば待つがこの場でそれほど待ってられない。

「……」

「……来ないなら、俺からいくぞ……？」

組んでいた腕を解きだらんと自然に腕を下げるシャネルにハンゾーは全身に力をこめる、いっどんな角度から攻撃が来たとしても対応が出来る体勢になる。

「―――剃!!」

「―――なっ……ちい!!」

瞬間的に姿を消したシャネルに一瞬だけ驚愕するが瞬時に思考を切り替えるハンゾー、凄まじい加速だがわずかに残像が見えた。そこから逆算し感じ取った攻撃は首へと手刀、姿勢を低くしながら身体を回し丸くなるようにし攻撃を回避する。

「指銃!!」

「おらぁ!!」

回避されても即座に引かれる腕、放たれる銃弾に匹敵する指の一突き。だが忍者も負けてもない、回転し丸まった勢いを使い二の腕へと回し蹴りを加え指銃の軌道を反らせた。頬を掠った指銃は皮膚を削り血を滲ませる。鋭い蹴りを受けた二の腕、軽く腕が痺れそうになる。

「剃」

「いてっ……ったくなんて速さだ……」

床に倒れこんだハンゾー、身体を起こせば先程まで腕が届く距離にまでいたシャネルは大きく距離を取りつつ様子を伺うようにこちら

を見ていた。蹴られた腕の痺れを取るかのように手を握ったり開いたりを繰り返していた。

「やるなハンゾー、初見で剃にまともに反応出来たのは初めてだぞ」
「俺の故郷だと更に無音でやる技法もあるんでね、それで何とか対処出来た」

自慢げに語るハンゾー、事実剃には驚いたが対処出来ない訳ではない。最初こそ驚かせたが次は完全に対処出来るだろう、だがそれ以上に相手との実力差に苦虫を噛み潰していた。普通の決闘とは違い相手に参ったと言わせるしか勝敗が決定しないこのルールではどうやってシャネルからそんなことを言わせて良いのか解らない。

「（他の六式も試すか？否、嵐脚は他の奴の迷惑になるし砕だこの部屋自体ぶっ壊しかねないからなあ）」

「（まったく冗談じゃねえなこれ、こりゃ勝てそうにねえな……）」

「ハンゾー、まだやるか？」

「はぁ〜ん……ぶっちゃけやめてえな」

ハンゾーの口から出たあっさりと自分の負けを認めるとも取れる発言。寧ろ彼にとってこの場で戦い続けることは全く上策ではないしここで負けてもまだチャンスはある。自分と相手の力量をしっかりと理解している武人の発言、だが正直ここで素直に宣言したくない自分も居ると言いたげな思いも込められていた。

「正直俺が勝つ可能性なんて0に近い、それならここは負けて次の望みを託すのが正しいって所だろ」

「正論だな、このまま続けるとなると俺は確実にお前を殺しちゃうからな」

「ぞっとしねえなあ……まあいい、俺は次に望みを託すぜ。『参った』」

そのままハンゾーは黙って自分の負けを認めた、意固地になって戦っても消耗して後で負けて失格者になる可能性が高い。しっかりと弁える事も知っている良い人物だとシャネルは思う。

ハンター試験第一合格者：シャネル

日光が降り注ぐ庭園、陽気の中に微睡みに漂える状況でただ一人異様なほど不愉快そうな表情を必死に隠すように顔の上にバックを置き横になっている男がいた。一番最初にハンター試験の合格をもぎ取った男、シャネルである。

ハンター試験は終わり彼は正式なハンターとなった、念願のハンターライセンスも手にした。会長からハンターとして歓迎するという言葉を貰った、だが彼の心は一切晴れていない。もやもやとした雲がかかっている。非常に不快な気分だ。ハンター試験最終試験、自分が一抜けした後待っていたのは不快感だけだった。

その理由はキルアだった。ゴンが大怪我を負いながらも半ば譲られるようにして取った合格後の試験で待ち受けていた戦い、キルア対ギタラクル。そこで目にしたのは異常なほどに歪んで狂った愛。ギタラクルはキルアの兄であるイルミが自らの道具によって変装していた姿だった。もはや変身と言う次元のそれを解いたの場は凍り付いていた。

『針で顔を変えていたのか!?!』

『あれがキルアの兄貴……!?!』

『……嫌な臭いがする野郎だ』

イルミは言った。家を出たキルアが心配だから様子を見てきてくれ

と、冷たく淡々とした声。録音されている声が流れているかのような暖かみの無い声。何がやりたい事があるのかと問いかけられたキルアは兄に恐れているのか気押しされているのか戸惑っているように小さな声を出すだけ、ハンターに別になりたかったわけではない。でもやりたい事はある、ゴンと友達になりたいと言った。

——お前の天職は、殺し屋なんだから——

——友達是要らない——

ハンターになる事を望んでいる訳ではないと言う言葉を聴いた、それがキーになるように人工的に作られそれを録音したかのような声が再生される。受験者の誰もが異常で恐ろしいと感じる、正しい反応だ。だがそれに強く反発したのがレオリオだ。

『キルアッ！！てめえの兄貴だかなんだかしらねえけど言わせて貰うぜ！！さっさとぶっ飛ばして合格しちまえ！！友達になりてえだと！？とっくに友達だろうが！！！ gonはそう思ってるに決まってる！！！』

強い言葉にキルアの身体が震える、嬉しさなのかイルミに対する恐怖なのかは定かではない。だがイルミは冷徹に言葉を紡ぐ。

—— gonを殺そう、殺し屋に友達是要らない——

キルアから身体を翻し外へ通じる扉に向かいながら針を手を持った、スタッフがそれを止めようとするが針を投げつけた。刺されたスタッフは顔が異常変形しながらイルミのゴンは何処にいるのかという言葉に素直に従ってゴンは隣の控え室だと伝えた。だが入り口前で立ち止まる。ハンゾー、シャネル、クラピカ、レオリオの4人がそれを遮っている。

この最終試験では受験者を殺してしまつては失格になる、仕事の関係上ライセンスがいるイルミにとってそれは不都合。そして辿り着いた答え、それが合格してからゴンを殺すと言う物。ネテロもそれをルール上は問題ないと断言してしまう、キルアはゴンを守る為には兄を倒さなければならない。だが兄との実力差はハッキリしている。

——勝ち目のない相手とは戦うな——

頭の中に深く突き刺さっている言葉が何度も何度も木霊して来る、イルミの口からも同じ言葉が響いてくる。脳を麻痺させる冷たい絶對零度の声。レオリオの必死の声援も伝わらない、聞こえてこない。近づいてくるイルミの手が頭に触れようとした時、小さく、懇願するようにイルミよりも無機質に言った。

『まいった』

その言葉が戦いに終止符を打った。それを聞いたイルミは先程の言

葉は冗談だと悪びれないように吐き捨て、そしてキルアに友達を作る資格などないと言った。

「だぁぁぁくそっっ！！！！」

「な、なんだぁ！？」

思いつき顔を上げた、バックが地面へと降りる。そんな事などどうでも良い、異様なほどむしゃくしゃする。これからゴンたちの目的地はキルアが戻ったとされる自宅、ククルーマウンテン。イルミ曰く教えてもどうせ辿り着けないという場所。そこへ向かってキルアを連れ戻す、単純なことだ。それなのに、自分が行けないと言うのがいように腹が立った。

「そりゃイラつくだろ！俺だって直ぐ行きたかったのにチケット取れませんかぁ！？どんだけ運ねえんだよ俺！！」

「はははっドンマイだってシャネル」

「慰めるなゴン！なんか惨めになるわぁ！！」

そうククルーマウンテンがあるパドキア共和国へと行ける飛行船、最も早い飛行船の空きはたったの3席。じゃんけんをした結果、シャネルのみがパドキア共和国へと向かう事が出来なくなってしまった。っというよりも大きな問題があった。

「はぁっ……まあいい、行くんなら俺の代わりにしっかり連れて帰ってこいよ」

「そっか行かないんだっけシャネル」

「ああ。迎えに行くならきっちり戸籍やらの手続きを終わらせてから行くとするよ」

シャネルの最初の目的は身分証明の確保、そのためにハンターライセンスを取りに来た。その目的自体は達成している、なら今度はそれを元に戸籍などを作って貰わなければならない。これからライセンスを元にちゃんとした社会に認められた人間になりに行く。

「到着はちょっと遅くなるだろうな、まあ直ぐに追いつくからよ。なんならさっさとキルアを連れ戻して貰っても構わないぜ」

「へへへっ競争みたいだね」

「だな、クラピカ。キルアの事がすんだら早速指導に入るからな」
「ああ解っている」

最後にそれだけを確認するとシャネルはゴン達とは反対の道を進んで行く。暫しは別れになるが直ぐに会う事になる…………。

「や、やっと終わったあ…………戸籍登録ってどんだけ時間が掛かるんだよ…………」

「本当に遅かったなシャネル」

「クラピカアお前まで言うかぁ？」

端的に言えばシャネルの戸籍作りは難航した、転生者と言う立場もあり一から戸籍を作らなければならなかった。その為に病院で精密検査を受けたり住居を指定したりと色々と面倒な事が多かった。一

番だったのがハンターライセンス、それを元に戸籍を作りに来た人間など初めてなのか難航した。結果としてシャネルがパドキア共和国に到着した時には既にキルアをゴン達が連れ戻した後だった。その時のシャネルは酷く落胆したと言う。

っと言う訳で予定通りクラピカに対する指導が開始される事となった。どうやら9月1日にヨークシンシティに集合する約束を立てたらしくそれに従って修行をする事となった。

「つう訳で六式の指導に入るわけなんだけど……あっそうだ、プロハンターになったなら教えても良いんだったよな」

「教える？何をだ？」

「念」さ」

森の中、不敵笑ったシャネルの顔。それを見たクラピカは何処か高揚感を覚えつつも念と言う言葉に首をかしげた。

「念……？何かの隠語か何か？」

「いや直球的に念って名前なのさ。念つつうのは生命が持つてるエネルギー、オーラを自在に使う事の総称だ。まあ超能力みたいに近い何かっていう認識で今は良い」

「生命エネルギー……突拍子も無くあまり信じられないのだが……」

そうだわなっと言葉をこぼす、いきなりこんな話をされてはまるで何か怪しげな物への勧誘か何かと思われて可笑しくは無い。ある意味正しい反応に笑いつつも証拠を見せるとシャネルは言う。だらん

と両腕を下げ、意識を集中する。ゆっくりと腕を挙げ両手を重ねる。

「……いただきます」

「はっ？」

いきなりの食事の挨拶宣言に呆気に取られるクラピカ、一体何をしようと言うのか理解出来なかった。構えを解くと少々遠くにあった大木へと真っ直ぐとターゲットを決めるかのように視線を向けた。そして両腕を大きく引く、その時クラピカは深く理解は出来なかったが何か、シャネルの腕が異様な存在を放っているのが解った。

「テーブルマナー
戦闘食事、フォーク、ナイフ！」

そのまま突き出すと遠くの大木にデカデカと穴が複数開いた、そして木は不自然に揺れ動き捻り切られるように倒れると次々と切り刻まれていき焚き火をするにはちょうどいい薪の山となっていた。何かが起こったのかクラピカは全く理解出来なかった、六式によるものかと思ったが全く違う何かだと直感した。

「これが念だ。プロハンターには必須条件、話を聞く限り新人は念を念を使えるハンターに習うらしい」

「で、では私はシャネルから！」

「そう、念と六式を教える」

010 話

「……………」

森の小川の近くの上で座禅を組み精神統一に励んでいる者が一人、その名はクラピカ。プロハンターの仲間入りを果たし現在はハンター試験にて知り合った仲間であるシャネルの元で念能力と六式の習得に励んでいた。念能力を開花させるためには己の体内にあるオーラに気づかなければならない、その為に禅を組みひたすらに集中していた。

「……………（体内にあるオーラ、それを気づく……………生命が持つエネルギー、どんなものなのか）」

禅を組みつつもクラピカはオーラと言うものについて思わず考えてしまっていた。1週間ほど前に念についての概要を知り、その力を目の当たりにしたが自分には何が起きているのか理解する事さえ出来ずにオーラと言うものがどんな物さえ理解出来ていない。そんなものに本当に気づけるのだろうか……………不安に包まれているとポンッと優しく頭の上に暖かい感触が乗った。指導をしてくれているシャネルだった。

「集中が乱れてるぜクラピカ、考え事か？」

「ああ、オーラと言う物を知っていないのに呼び起こせるのか不安になってしまった」

「成程な、ある意味正しい反応かもな。ちょっと休憩するか」

一旦修行を切り上げて休憩を兼ねた食事に入る。メニューはシャネルが森で捕獲して来た猛獣、本日はグレートスタンプの近縁種の赤毛ブタである。

「オーラと言う物は具体的にどのような印象を受けるんだろうか、どうにも解らず要領を得ない」

「むぐう……（ゴクン）一言で言えば不思議な感覚だな。一番最初にオーラを感じたときに思うものは全身を包む感覚、そうだな……身体の中にある炎をイメージしてみたかな俺は」

炎と言われて胸に手を当てて考え込むクラピカ、余計な事を言って混乱させてしまったかもしれない。少々悪いと思ったのかシャネルはバックから適当なネックレスを取り出しそこへほんの僅かにオーラを纏わせそれをクラピカへと投げ渡す。

「そいつを首に掛けな、ほんの僅かに俺のオーラを纏わせた。そいつのオーラを感じられれば自分の中のオーラも探しやすいだろう」

「シャネル……すまない、感謝する」

「良いって事よ、さっ早く食べて続きやるぞ」

っとそうした後ひとつ良い事を教えてやるよといって肩に手を置いて笑顔でこういった。

「大切なのは疑問を持たずに出来ると思う事だ。出来て同然と自分で思い続けるんだ」

「出来て当然……」

「そう。空気を吐くのが当たり前位に、木の枝をベキッと折るのと同じようにな」

食事を済ませると早急にクラピカは座を組んで集中し始めた、イメージするのは自分の体内にある大きなエネルギー。そして強く思う、自分は絶対にオーラを感じられる、それを感じ取り使う事が出来ると思いつける事。その認識が自信となり力となっていくと。

「（おっオーラの流れが変わったな）」

座を組みながら集中し続けているクラピカを眺めているシャネルには変化が良く解った。普段から人間が出しているオーラの流れが変わり始めている、恐らくまだ本人はまだ感じ取れていないだろうが放出されているオーラが増えている。体中にある精孔という穴が開き始めている。

「（これは、直ぐに感じ取れそうだな）」

意識が完全に身体の中へと向かって伸びていく、それすら感じ取れる程の集中力を発揮しているクラピカは徐々に何かを気づき始めていた。何か、暖かな何かがあると解った。少しずつゆっくりとそこへ歩みを伸ばしていく。気づけばその暖かみの先へと進み理解して行く、それが自分の中に眠っているオーラである事を。

『これが、オーラ……』

そう実感出来た時シャネルから渡されていたネックレスに込めれたオーラを気づいた。そしてゆっくりと目を開けると驚いた、自分の身体から蒸気のようなものが溢れ出し身体を覆っているのだから。そしてシャネルが酷く驚いた表情でこちらを見つめていた。

「…………おいおいすげなおい、精孔開いた直後に自分で纏を行ってる？なんか悪い冗談かよ」

「これがオーラ……確かに不思議な感覚だ……だが暖かい……」

誰かに優しく抱き締められているかのような感覚を味わっているクラピカ、とても心地が良かった。そして首から掛けられているネックレスのオーラがその大元になっているのが解った。

「このネックレスが私を導いてくれた、オーラまで連れて行ってくれた」

「そりやおまえさんの才能だよ、俺のオーラに気づけるってレベルまで既に至ってたのさ」

「それでもシャネルの助言が無ければ出来なかった、ありがとう」

笑みを浮かべて笑い掛けてくるクラピカ、明るい笑みに思わずくすぐったい思いをしつつ笑い返す。

「ああくんじゃこれから厳しくやってくからな！特に普通の念を覚えるだけじゃなくて六式も覚えるんだから！」

「ああ望む所だ、シャネル。いや、師匠」

「クラピカ、お前俺からかってるだろ？」

「うん？何の話かな」

それからの修行は通常の物よりも激しさを増していく、特に六式に感じては完全な体術な為文字通り身体で覚える必要があり厳しさを増していく。

「そおおらあっ！！！」

「紙絵ッ！」

六式を覚える為の修行は対戦形式、実際に戦って六式を体験しそこから練習し定期的に戦って応用すると言う物。これはクラピカの戦いの経験をつませると言う点においても良い影響を与える修行となっている。今現在も戦っているがシャネルのラッシュが起こす風圧に身を任せて回避し続けている。

「上手くなってきたじゃねえか！！なら、これは避けられるか！！！」

ラッシュを止め一歩後ろに引くと右腕を大きく震わせ地面ごと抉るように爆風を巻き起こす、風圧に身を任せて回避を行う紙絵では意味を成さない攻撃を如何するか。

「っ！はあっ！」

「おっとお！！！」

瞬時に加速、剃を行ったクラピカは背後を取りそのまま強烈な蹴りを首へと繰り出すがそれをあっさりとガードするシャネルだがその顔は笑っていた。今の蹴りは嵐脚にかなり近い物になっていたからだ、その証拠に僅かにガードした腕の皮膚の一部が切れて血が流れ

ている。

「よし此処まで！やっぱり筋が良いなクラピカ、やっぱり天才ってば何にしても覚えが良いだな」

「いやシャネルの教え方が良いんだよ」

クラピカは間違いなく天才である、修行を初めて既に六式の内二つを扱えるようになり嵐脚も体得寸前。ある意味キルアより筋が良い、まあそれについてはキルアよりも素直でしつこくないからしっかりと指導しているからであるが。

「さてと……練も十二分なレベルにまで来てるし、よし決めた。明日は遂に初の修行には入るぞ」

「ほ、本当か！？そ、それではシャネルのフォークなどの技と同じ次元には入れるのだな！！」

「おう明日を楽しみにしてな」

ガッツポーズをしつつ拳を握り締めて見つめるクラピカ、漸く此処まで来たと言いたげな様子に微笑ましくも感じていた時ポツリと額に水が掛かった。気づけば空はどんよりとした雲に包まれており徐々に雨が降り始めて来た。

「雨か」

「身体冷やして風邪引くといけねえ、確か近くに洞穴あったはずだそこ行こう」

荷物を持って大急ぎで洞穴へと向かって行くが途中本降りになった

雨はザーザーと容赦なく二人へと降り注いで行く。

「こりや堪らん！大丈夫かクラピカ！？」

「ああ大丈夫だ！」

洞穴に到着した時に全身ずぶ濡れになっていた、服が身体に張り付きなんとも気持ち悪かった。

「ふいゝ、こりや簡単に止まないだろうなあ……」

「ああ、凄い雨だ」

「兎に角っと」

「参ったな……ッ！？」

如何するかと聞こうとした時に見たのは上着を脱ぎ半裸となりながら洞穴の中にあった枝などを集めて火を熾しているシャネルの姿だった。酷く鍛えられた身体はがっちり筋肉があり円で鎧のようだった、腹筋も当然のように六つに割れていて逞しかった。思わずそんな肉体美を見せられたクラピカはぼうっと見惚れていた。

「うっし火が付いた。これで服乾かせるぜ、おいクラピカ服を……って如何した、こっち見て？」

「……ッな、なんでもない！？なんでもないんだ！！？」

「そうか？でもお前顔真っ赤だぞ？もしかしてもう風邪引いたのか！？」

「ち、違う！私は健康その物だ！そ、そのタオル無いか！？身体を拭きたいんだ！」

「ああそう言う事か。悪かったな気がつかなくて」

バックからバスタオルほどの大きさのタオルを投げ渡すとクラピカは背を向けて真っ赤になった顔を隠しながらタオルで身体を隠しつつ服を脱いでシャネルへと渡した。

「うっしこれで日に当ててればその内乾くだろ」

「そ、そうだな……」

腰掛けつつ火を弄るシャネルはなんとなくタオルを羽織って顔を背けて入るクラピカに目をやって見る。水に濡れた髪は酷く艶やかな物に見えた、元々細い身体のクラピカが雨に濡れてタオルで身体を覆っている所は官能的に思えた。

「こうして見るとやっぱクラピカって綺麗だな、マジで女みたいだ」

「や、やめてくれ私は歴とした男なんだ」

「いやだとしても妙に色っぽくてな、生まれてくる性別間違えたんじゃないねえか？」

「……まあ言われた事もあるが（間違えている、か。確かかもしれ
ないな……）」

ハッとするクラピカ、何を考えているのだと頭を振るった。自分でもどうしていきなりそんな事を思ったのか理解出来なかった、そう思ったのは間違いは無い。シャネルに対する思い、がそうなる。る。

「（何を思っているんだ！？ち、違うこれは、そうだ師である彼に
対する尊敬と親愛の思いだそうに決まっている！！）」

そう無理矢理結論付けるように考えと感情を押さえ込むと沈黙したまま火に当たる。だが心は騒ぎ続けていた。まるでそれは違うと叫ぶように……

011話

「水見式ってのをこれからやってもらうぞ」

「水見式……遂にこの段階か」

遂にクラピカが心待ちとなっていた修行であった念能力の集大成といえる発の修行へと入る事となった。発、念能力の集大成。様々な能力者が創意工夫をもって開発した固有の能力などは全てこの『発』テーブルマナーの応用である、シャネルの戦闘食事もこの発による物である。

「水で満たしたグラスに浮かべた葉、これに手を添えて練を行うんだ。それによって個人に適した系統によって水に変化が起こる」

「例えばどのような」

「そうだな、俺がまずやってみよう」

試しにシャネルが手を添えて練を行った。手によって挟まれたグラスになみなみと注がれていた水は練によって増幅されたオーラの影響を受けて変化を示す、水の色が瞬く間に赤、青と変化していく。

「水の色が変化するのは俺が放出系の系統に属する事を示している。さっお前も試してみろ」

「ああ」

新しく水を注ぎなおしクラピカは一呼吸を置いてから練を行った。一体どのような反応を示すのかクラピカは楽しみにしていた、そして練が行われたグラスの中には結晶のような不純物が漂っていた。

「不純物の出現、それは具現化系を示す反応だな。クラピカは具現化系を得意とする系統って事になるな」

「具現化系……出来れば強化系が望ましかったのだが」

自らの系統が明らかになったがクラピカの顔色は良くなかった、希望していた系統が強化系だったからだろう。しかしこれに至っては生まれた時に決まる才能、これは変えようがない。

「そうしょげるなって、別に強化系が覚えられねえわけじゃねえし具現化系は具現化系の強みがある」

「しかし……幻影旅団と戦うには強化系が望ましかった」

「まあな、戦いで一番バランスがいいのは強化系だからな」

攻撃防御回復、強化系はこれらをバランスよく補強する事が出来る為戦闘における念系統でいえばワントップと言える。

「だけど習得率的な事を言えば強化系も覚える事は出来る。話した内容は覚えてるか？」

「ああ。私の場合だと強化系は60%ほどの習得率になるのだったか」

「だけどその60%で強化系をぶちのめす事は十二分に出来る。要は使い方次第だな、それに人それぞれに癖や好みがあるように系統の習得率にもムラがある。強化寄りの放出もいれば変化よりの具現化もいるって話だ」

事実としてチャンネルもそれに入る。放出系に属する彼だが彼は強化

寄りの放出系であり操作系は強化よりも苦手な部類に入り放ったフオークやナイフの操作精度は高くはない、が威力的に見れば申し分ない。

「兎に角だ、自分の力を信じて突き進むしかないな。迷うのは壁に当たってからだ」

「解った」

「あと注意点だ、具現化するものはよく考えた方が良い。物質の具現化はかなりの集中力に想像力、そして時間を要するからな」

オーラを別の物質に変化させる能力である具現化系の習得は最も困難だと言われている、具現化に至るまでの道のりは酷く長い。具現化するものは慎重に選ぶ必要がある。

「鎖、鎖が良い……」

「鎖か」

「ああ、具現化系と聞いた時真っ先に浮かんだんだ。それ以外は何とも……」

「ならそれを尊重しよう、念能力は直感やインスピレーション、フイーリングが大切だからな」

自分のこの能力を作った時も真っ先に浮かんだのがトリコの技であるフオークとナイフであった。結果としてそれを作った際にはかなりの威力を発揮していた、頭に一番最初に浮かんだりしっくり来るものは能力としたときにも大きな力を発揮する。

「具現化系の修行ってのはキツイぜ、覚悟しとけよ？」

「大丈夫さ。私にはチャンネルがいて支えてくれる、私はチャンネルを信じる、私を信じるチャンネルをな」

「へっ、ならほらよ」

チャンネルはバックの中で空間倉庫へと手を伸ばしそこから猛獣などを運ぶようにしようとする鎖を取り出してそれをクラピカへと手渡した。ジャラジャラと金属が擦れる音と冷たい感触が手につく。

「まずはイメージ修行だ、今日から毎日鎖それ弄って遊んでな」

「えっ……はっ毎日これをか！？」

「そうだ、鎖を使ってする事なら何でもして良い。但し鎖を使っている時は六式の修行は厳禁だ、六式の修行はちょっと休憩だ」

そう修行がキツイというのは長時間具現化しようとするものを触ったり見たりしてそのイメージを強く強く脳に焼き付けなければならぬからである。ただただひたすらにそれを行われなければならないという意味できついのである。

「んじゃ俺はメシの調達をしてくる、しっかりやってるんだぞ。あと鎖は肌身離さず持ってるよ」

「……キツイとはそういう意味か」

若干気抜けしながらもやらなければいけない事にややぞっとしつつも鎖を弄るのであった。

「……」

洞穴の中でジャラジャラと響く鎖の金属同士が擦れる音、目の前でギチギチと蠢く鎖の感触と温度。唯ひたすらに触り続ける事2時間、ここまですっと弄り続けてきたかこれ以外のやり方はあるのかと思ひ始める。触るだけで良いのだろうか。

「……（スンスン）」

匂いを嗅いでみる。金属特融のややツウンとした匂いが鼻を突くがこれも自分が具現化すると思うと嗅ぎ続けた、そして次にすべき事は……

「味も、見ておこうか」

舐める、鎖をなぞるように舐めてみる。噛んでみる、五感で出来る限り感じられるだけの事を鎖で体感してみる。鎖を腕に巻きそれだけ締め付けられ痛みを感じるか、鎖を天井に突き刺しそれにぶら下がってみたりと様々なことをしてみる。

「ふむ……他には……」

「ただいまー……どうだ感想は……」

「……ふむ、少々味が変わっているか？」

シャネルが獲物を仕留めて帰って来てみるとそこにあったのは洞穴の天井に深く突き刺さった鎖にぶら下がりながら鎖を舐めているクラピカの姿、確かに鎖を使ってなら何でもやっていいと言ったが

こんな事をやっているとは完全に予想外。っというかクラピカのよ
うに外見が整っている美少年が鎖にぶら下がりながら鎖を舐めてい
る図はどうにもシュールすぎて言葉が出てこない。

「……んっああおかえり」

「………これから毎日これを見ないといけないのか……俺の方も相
当つれえぞこれ……」

「？」

修行開始から約4か月が経過。

シャネルの下で修行に励むクラピカの手には既に鎖はなかった。長
い期間鎖に触れ続けた事で鎖の夢を見るようになるという段階に達
した為、鎖は取り上げられていた。

「どうだ、感覚は」

「……妙な感じだ。何も無いと解っている筈なのに手の中に鎖が見
えていて感触がある」

「良い傾向だな、あとちょっとって所か」

間もなく幻覚ではなく本物の鎖を具現化出来るようになるだろう、
約2か月ずつと行ってきたイメージの修行が芽生えている。後はそ
の目を成長させるのみ。

「ならそろそろ考えとく必要があるな」

「具現化した鎖に付与する効果、か？」

「ああ、ただ具現化しただけなら既に存在しているものを買った方が早いからな。具現化系の使い手は何かしらの力を付与している」

例えを上げるとするならば剣を具現化したとする、だがそれだけでは意味はないし修行の意味もない。ならば燃える剣はどうだろうか、通常はあり得ないが出来ない事は無い事。具現化したものへの効果付与、これが具現化系の長所と言ってもいい。

「能力は決めている。それと先日発覚した特質系を組み合わせる
う」

「ほう？」

洞穴に少々大型の蜘蛛が入ってきた時だ。クラピカは激しく興奮し蜘蛛を瞬時に叩き潰した、がその時にクラピカの瞳がクルタ族特有の緋の目となっていた。その瞳となっていた時、クラピカが身体から出していたオーラが爆発的に増えていた。緋の目の時にだけに発現する能力、後天的な特質系があると判明したのだ。

それからクラピカは自分自身の意思で緋の目になれるように訓練し今ではそれをものにしている。その能力を物にするために鎖の具現化は遅くなったが些細な問題だった。クラピカの特質系能力はオーラ総量が増え、覚えた系統の能力を100%引き出すことが出来る
エンベラータイム
という絶対時間。

「って事はだ、緋の目になった時にだけ使う能力にするのか？」

「ああ。シャネルには話すが相手を絶にする、という能力を考えている」

「ッ！おいおい相手を絶だど？キッツいなあ……捕まったら終わりじゃねえか……」

「否そうでもない、鎖の強度自体の問題もある。最後の捕縛用と言った所だ」

確かに普通の鎖よりある程度強い強度で強制的な絶にされても腕力に自信があるものならそれを引き千切るだろう、この時点では相手にある程度のダメージを与えてそこを捕獲する捌手という選択種を取るしかない。だが自分は知っている、それを解決する方法を。

「クラピカ、その鎖の強度を上げる方法があると言ったらどうする？」

「あるのかどんな方法なんだ？」

「直ぐに食いついたな……制約と誓約だ」

「制約と誓約……！」

制約^{ルール}を作りそれを遵守する。制約が厳しければ厳しいほど威力は爆発的に増強されている。

「俺の場合はまず能力の使用前に合掌をする事だ」

「なるほど、あれはそういう事だったのか……」

思い出すのは修行に入る前、念について説明を受けていた時に使用した戦闘食事の前の合掌。

「それとカロリーだ」

「カロリー？」

「俺が大喰らいなのはそれなのさ。俺は使用したオーラに応じて力

ロリーを消費するし何もしなくても一日で10万キロカロリーは消費する、それが俺の制約と誓約だ」

「そうだったのか：ただ単に食いしん坊だった訳じゃなかったんだな」

「唯の食いしん坊が自分の身体を10倍以上ある猛獣平らげと思うか、んでこんな感じで自分の覚悟で守れる範囲のルールを作るんだ」

言われてみて納得する。制約と誓約、それを如何するか……はクラピカの中では決まっていた。

「蜘蛛以外、旅団以外の奴には鎖を使わない」

「目標以外使用禁止か、少し弱いな」

「いやこれは前提条件さ。本当のルールは私の命をかける」

そう、言うと思っていた。クラピカほどの強い執念と覚悟ならばそのようなルールを敷くだろうと直感出来ていた。だが自分は

「駄目だ、認めない」

否定する。

「何故だシャネル！！何故否定する！！？そうしなければ旅団には勝てない！！」

「お前、俺がお前を支えるって言ったの忘れたか」

「一時とて忘れた事などない！！あの時の言葉は本当に嬉しかったのだからな！！だから私も覚悟を！！」

「俺の命、使えよ」

この時、クラピカは目を限界まで見開き呼吸を忘れた。何と言ったのか解理解したくないらなかった、聞聞きたくないこえなかった。そう激しく思った。

「俺の命を使え。旅団以外のメンバーに攻撃すれば、俺が死ぬって制約なら鎖はアホみたいに硬くなる」

「…………ッ！！な、何を馬鹿な事を言っているんだ！！？し、死ぬかもしれないんだぞ、私が旅団以外のメンバーに使ったら！！？」
「だからなんだよ。俺はお前を支えるって決めた、支えるって事はサポートするだけじゃねえ。一緒に戦ってやるって意味なんだよ」

確かに言ってくれた、自分も支えて欲しいと言った。確かに自分にとってシャネルは失いたくない大切な存在、ある意味自分よりも。そんな人物の命を懸けた場合はすごい力を発揮するだろう。だがそんな事を…………！！

強い力は欲しい、だが彼に死んでほしくない。それでも彼は自分とともに戦ってくれると誓ってくれた、そんな気持ちも裏切りたくない。ぐるぐると交錯していく考え、だがそんな混乱も次の瞬間には冴えた。頬が叩かれた。

「単純な事だ、お前が制約を守りさえすれば俺は死なないから無問題だ。それにお前なら絶対に破らないだろ？そして俺もその制約を破らせないように動く、これなら万事解決だ」

「シャネル…………本当に、いいのか…………？」

「勿論」

迷いという文字など無いほどに澄み切った瞳にクラピカは圧倒されていた。今のシャネルの瞳の輝きは本物、緋の目のように美しかった。そしてクラピカも決意した。彼の、心意気と覚悟を受け取ると。

「シャネル、その覚悟受け取らせてもらう。私に、命を預けてくれ」
「ああ。俺の命、やるよお前にな」

012話

森の中を駆け抜けながら指から伸びている鎖の反応を見つつ周囲警戒をする。何処から来るのかまだ解らない、鎖の反応は著しく変化し続けている。相手も鎖の特性を良く理解している。故に警戒は常にしていなければならない。

「何処だ、何処から来る……っ！後ろか！！」
「遅い！！」

鎖に反応した先に身体を向けるがそこには既に攻撃態勢を整えている敵の姿があった、大きく振りかぶっている腕がかなりの速度で迫ってくる。

「紙絵！！はっ！」
「ぐう！」

パンチの拳圧に逆らわずに身を任せて攻撃を自然に、風に揺らぐ草のように回避しつつ腕へと鎖を巻きつけそのまま強く締め付ける。強い圧迫感と肉に食い込んでいく鎖の冷たさに一瞬顔を顰めるとそのまま鎖に掛ける力を強くして大きく振る回すように木へと叩きつけた。

「……嵐脚！！」
「くっ！」

木に強く叩き付けられたがダメージは少なくそのまま敵、チャンネルは嵐脚での反撃に出た。鎖使い、クラピカはチャンネルにまだ巻き付けたままの鎖を一旦消してそのまま後退し回避し人差し指の、先が三日月になっている鎖を伸ばしチャンネルに向けた放った。

「（鉄塊で防御、否不味い！）」

皮膚を鉄の光度にまで強化して防御する鉄塊を取ろうとするが即座に鎖の危険性を理解し横っ飛びでその場から退くが鎖は易々と木を切り裂くように貫通しそのままチャンネルを追いかけるように弧を描きながら木々を切断しながら追う。

「ナイフ！！」

右手をナイフのような形に変えつつ迫り来る鎖へと振るい強く弾き返すがすぐさま鎖は自分へと迫り直して来る。迫ってくればナイフで弾き再び迫ってくるのを何度も何度も繰り返しつつチャンネルは鎖の硬度と切れ味に驚きを隠せなかった。師としてクラピカに念を教えているがクラピカの能力の全ては把握していない。

「（鉄程度なら俺のナイフは切断可能、だがこの鎖は俺のナイフと同等の切れ味だ！）らああ！！！」

「（流石はチャンネルだ。この鎖と同等の切れ味とは……！！）」

鎖その物が鋭利な刃物、しかも鉄程の硬度ならば切断可能なほどの力を秘めている高い攻撃力を有している。それを強化した腕一本で凌いでいるチャンネルもだがクラピカも大したもの。

「（ちっこのまま時間を掛けすぎたら俺の方がガス欠になっちまうぜ、それもクラピカの狙いだろうけどな）ナイフ、&フォークッ！！！！」
「ッ！！」

強く大きく鎖を弾いた所へ左手で放つフォーク状の念弾がクラピカ目掛けて飛んで行く、その数5。攻撃の意識を防御へと割り先程シヤネルを探す為に使用していた鎖でフォークの正確な弾道を把握してそれらを全て受け止める。

「ちっ、やっぱりそうなるか」

「（なんて威力の念弾……！伝わってくる衝撃で手が痺れそうだ！！）」

クラピカが具現化した鎖は全部で5本。右手の各指に装着された5本の鎖で戦うと言うスタイルを取るが特質系を発揮した時にのみ使う、幻影旅団だけに使うという制限がある為実質今の戦闘で使用出来る鎖は4本。

「クラピカ、お前の鎖は大した物だぜ。俺の能力とほぼ差し支えない」

「師匠が良いからな」

「褒めるなよ」

「ダウジングチェイン導く薬指の鎖、カッターチェイン切断す人差指の鎖。師匠であるシヤネルのお陰で出来たのだからな」

集中力を強化しダウジング効果を発揮し防御にも応用出来る薬指の鎖、高い切れ味によって高い攻撃力を持つ人差指の鎖。旅団以外で

の主な戦闘で使えるのはこの二つ、特に人差指の鎖はシャネルのナイフが大いに参考になっている。

弟子であるクラピカの念能力、具現化された鎖の名称を聞くと思わず嬉しくなってくる。これが弟子の成長を実感出来た師と言うものなのだろうか、実に興奮する。あれが自分が育てた弟子だ、これからも更に昇華させて見せると思ってしまう。口角が上がってしょうがない。これだけ嬉しい思いをさせてくれたのだから新しい技を見せる他あるまい。

「ならクラピカ見せてやるよ。俺の新しい技をな」

「見せて貰うぞシャネル、私の師が偉大な所を」

「ふうく……いただきます、はああああ……！！！！」

一度合唱をし直すとシャネルは一気にオーラを放出し始まる。先程とは比べ物にならないほどの量、森の一角を多い尽くさん程の量のオーラが迸っている。人差指の鎖を伸ばして何時でも迎撃体制を整えるクラピカ、そしてシャネルは握り拳を作りそのまま真っ直ぐ突き出した。

「行くぜ、箸ッ！ハッ！！」

強い言葉と共に射出された念、フォークと同系統の念弾攻撃だとクラピカは人差指の鎖で念弾そのものを切断しようと操作するが念弾は鎖を挟みそのまま完全に動きを封じた。

「なっに！？」

「そおらよっ！！」

大声を上げつつ突き出した腕を真上へとあげると念弾もそれに呼応するように鎖を挟んだまま上へ向きぐるぐると鎖を絡め取るように回り始める、鎖が引っ張られ動きが封じられすぐさま鎖を消すがそこへ迫ってきた指銃。

「「剃！！」」

回避の為に一気に加速するがそれは読まれていたのか全く同時に加速し背後を取られ豪腕によって背後から抱き締められるような形で捕縛される。こうされてしまったてはクラピカに脱出の手段は無い、単純な腕力で言えばシャネルに敵う道理など無い。肩に置かれた顎の感触に身体を硬直させてしまう。

「俺の、勝ちだなクラピカ☆」

「あ、ああ。わ、私の負けだ……だ、だから早く離してくれ……」

耳元で囁かれるように告げられた勝利宣言を受け入れつつも吐息交じりの言葉に顔を赤くしながらクラピカは開放された。同時にシャネルは地面に座り込みしんどくと間の抜けた声を上げた。

「あ……疲れた、この能力結構オーラとカロリー使うんだよなあ……」

「最後の「箸」っという奴か？」

「ああ。ナイフやフォークと違って精密な操作を要求される技でな、その分オーラを使うからカロリー消費もでかい。あんま使い勝手の

良い能力じゃねえかも」

大らかでどちらかと言えば大雑把で豪快な性格なシャネルにとって細かく繊細な操作が要求される技との相性は良いとは言えない。必要と感じて作った訳だが苦手な分類である為に制約を他の技よりも重くした分、燃費自体はかなり悪くなってしまったようだ。

「にしてもクラピカ、あの鎖は切れ味抜群だな。おかげでほれ、俺のナイフもタジタジだぜ」

右手を見せてみるとそこにあったのは刃こぼれしているという表現が相応しい右手。^{ナイフ}傷も出来て血も流れている。

「す、すまない今治療する」

「おう頼めるか」

「ああ、癒す親指の鎖」
ホーリーチェイン

先端が十字架になっている鎖が右手に巻きついていくオーラを発していく。そのオーラによって自己治癒力が増強されていき右手の傷が少しずつであるが修復されていく。10分ほどすると右手は全快の状態にまで修復された。

「うっし治った、サンキュウなクラピカ」

「いや大した事はしていないさ」

「さてとクラピカ」

「ああ」

真面目な顔つきへと変わったシャネルは真っ直ぐと茶化す事無くクラピカを見つめる、それに答えるように真っ直ぐと見つめなおすクラピカ。

「お前は念の基本から応用まで習得した、見事だ。半年足らずで此処まで来るとは……才能の塊って奴だな」

「何度でも言うぞ、師匠が良かった」

「へっ師が良くても努力が足りなきゃ何も出来ねえよ。そして、裏ハンター試験合格だ」

「裏、ハンター試験？」

ハンターライセンスを取っただけでプロハンターを名乗れる訳ではない。本来のプロハンターは念能力習得しそれを扱える人間の事を指す。しかし念の存在を下手に公にすれば、能力を悪用するハンター紛いの犯罪者を大量に生み出す事になってしまう為に試験に合格したものに念能力を習得している者がこっそりと教える事になっている。まあクラピカの場合は既に念を習得していたシャネルが教えていたが。

「成程、これで本質的に私もプロハンターと言う訳か」

「そう言う事。さてと、そろそろ行くかヨークシン」

「ああそうか。そろそろ約束の日が近いな」

ゴン達と再会を誓った9月1日、その日は既に近くなっている。そろそろ向おうとしないと遅れて間に合わなくなってしまう、出発する時が来たようだ。

「さてと、久しぶりの都会かぁ……」

「修行ばかりで文明的な物はあまり無かったからな」

「だな。あく飯食いたいなぁ」

「そればかりだな、シャネルは」

「なんなら映画でも見に行くか？デートみたいに？」

「い、幾ら私が女のようなだからと言っても一応男同士だからデートは可笑いだろう!？」

約束の日となった9月1日。修行の為に森の中に籠っていたシャネルとクラピカはヨルビアン大陸西海岸の都市、ヨークシンシティへとやってきていた。毎年9月に世界最大のオークションが開催されるために非常に人が多くごった返していた。

「ひゃあゝ凄い人混みだな、こんな中でゴン達探すのって結構面倒じゃないか？」

「いや連絡を取って何処かで待ち合わせするでしょう、そういえばシャネルは携帯は持っているのか？」

「今まで戸籍さえ無かった人間が持ってなかったと思うか」

「すまない私が悪かった、今すぐ買いに行こう」

そう言えば自分の師匠が元野生児だった事をすっかり忘れていた。携帯はハンターの必需品でもある、それを持っていないと連絡するときにも不便だしこれからは持っていた方がメリットが大きい。早速形態ショップを探し始める。

「そう言えば所持金は大丈夫なのか？なんだったら私が出すが」

「良いや大丈夫だ、ハンターライセンスでカードとかも作ったし現金だって結構な預金額がある」

「預金額？しかし今までほぼ無一文だったのだろう？」

「ああ。イメージ修行の時に俺の帰りが遅かった時あったろ？」

確かにイメージ修行をしていた時、何処かに出かけて居た時も多か

った。あの時はてっきり食料となる猛獣を狩っていたと思ったがその時資金稼ぎでもしていたのだろうか。

「あの時に、高級食材になる猛獣とかを狩って市場で売ってたんだ。ライセンスのおかげで飛びつくように売れてな、今預金には5000万近くあった気がする」

「それは、またずいぶんと稼いだな」

「おう」

既に世間的に高級食材をほぼ無傷かつ生きたまま仕留めてくれる新人ハンターとして有名になりつつある。その為かシャネルは世間一般的には美食^{グルメ}ハンターとして浸透しているが、その事は本人の耳に全く届いていないのは余談である。

「さくてとどんな機種が……ってあれゴンにキルア？」

「んっあっ！！シャネルにクラピカ！！」

手頃な携帯ショップに入った時にいた先客、それは再会の約束をしていたゴンとキルアであった。ゴンは花を咲かせたような笑みを浮かべキルアもそこそこ嬉しそうな笑みを浮かべていた。

「本当に久しぶりシャネル！戸籍とかってもう良いの？」

「おいおい半年前だぜ？とっくに確保出来てるつつうの」

「それもそっか♪」

「よおシャネル。お前も来るんじゃないかって期待してたのによ」

「悪かったな、直ぐ行けると思ったら予想外に時間食ったんだよ。

パドキア共和国着いた時には全部解決してたんだよ」

若干げんなりしつつも事情を説明するチャンネルに悪戯気で笑顔を浮かべ続けているキルアの姿にクラピカは笑った。久しぶりに会うがハンター試験の頃を殆どやり時が変わっていない、まるで兄弟のようだ。

「俺はお前達と連絡取る為に携帯買いに来ただけどなあ、どれにしたら良いんだ？」

「うーんとね、俺はおじさんお勧めの超薄型タイプを買おうと思ってるよ。一緒に如何？」

——そりゃ止めとけ。

どんなのだと言おうとした言葉を遮って一人の男の声が響く。そちらに顔を向けて見るとまたまた懐かしい顔があった、再開を誓い合った仲間であるレオリオだった。

「リオレオ！」

「レ・オ・リ・オ！！お約束のギャグやらせんなルキア！！」

「誰がルキアだ！！」

「ヘン少しは気持ちが解ったかってんだ。よお久しぶりだなチャンネルにクラピカ」

「おう」

「久しいな」

集合場所さえも決めていなかったのに何時の間に集結してしまった一同。これも運命と言う気概が持っている気質の影響なのか、兎にも角にもあっさりと合流出来た事を光榮に思うべきか。

「にしてもお前ら携帯買うのか？」

「うん、俺携帯持ってなかったから良い機会だと思ってね」

「同じく、俺も持ってないからな」

「なら俺に任せろ、良い機種見繕ってやるぜ。ついでにキルアとクラピカも新調したらどうだ」

「なら頼もうかな、良いの頼むぜ」

「では私も頼む。修行で少々ガタが来てしまっている」

「まっかせとけ！！」

と意気込んだレオリオは店が置いている携帯を物色し始めた、どうやら自分が今使っている携帯が一番のお勧めらしくそれを探しているらしい。発見するとそれを人数分頼むと店主に頼むが、4人で80万ジェニーという金額を聞いた時に高すぎるという言葉と共に目を光らせた。

「一本10万！」

「駄目だって！？」

「おいおい何処まで値切るつもりだよあいつ……？」

「なんというか、恥ずかしくなって来たぞ私」

「ってうわぁっ！？なんかギャラリー出来てるう？！」

「い、1の桁まで値切り始めた……未体験ゾーンだぜ俺」

「いおしゃあ買ったぁ！」

結果。レオリオ、新機種ビートル07型を本来一個20万の所、一本11万580ジェニーにまで値切る。商談後拍手喝采を浴びながら会計を済ませ一同は一旦ホテルへ向かうのであった。

「グリードアイランド？」

「確かアホみたいに高いゲームだったかな」

ホテルでコーヒープレイクをしながらそれぞれがどのように身を振っていたのかを語る、矢張り一番気になった話はゴンとキルアの話だった。天空闘技場で資金稼ぎ兼実力試しに行き念を習得し更にヒソカにプレートを叩き返したと語った。一同驚きつつ、更に今現在あるゲームを追っているという事に耳を傾けていた。

「そのゲームにゴンの父親の手掛かりか……うん、オークションに参加した方が良いのは間違いないな」

「でも問題は値段だろ。オークションだから当時の販売価格より高いんじゃない？」

「その通り。最低落札価格が89億ジェニーだってさ」

「ハ、89億ううう!!!??」

この中で一番の守銭奴なレオリオは引っ繰り返りそんな大声を張り上げた、89億。とんでもない位の高額、それだけあったら一体どれだけ遊んで暮らせるものかと脳内で計算でもしているのだろう、驚きはシャネルとクラピカも同様だった。高がゲームがそんな値段なんてとんでもないと。

「そ、それを狙っていると言う事はそれだけ蓄えがあるのか!？」

「あー……最初は天空闘技場で稼いだ8億があったんだけど、増やそうとして失敗しちゃって。手持ちは500万」

はあ……と思わずため息をついてしまふ、そんなに資金が足りていない状況で良くもまあそんな高額なゲームのオークションに参加すると言ったものだ。

「俺の預金も含めて5500万、約161倍にしなきゃ行けねえのか……」

「しかしどうした物か……私も資金稼ぎには手伝う気だが、その手段が問題だな……」

「あれクラピカ、ヒソカと連絡取り合ってるんじゃないの？」

「あれなら既に止めた。よくよく考えて見ると胡散臭すぎるし、奴を信用出来る材料など一つも無い」

「確かに懸命かもな」

だが本当はそれだけではなかった。クラピカが制約と誓約としてシヤネルの命を賭けている今、今まで以上に慎重に、信頼できる情報を使って歩いていく必要がある。自分の命を賭けていたらヒソカとの話も生きていただろうが今はそうは行かない、シヤネルを絶対に殺させない。クラピカの心の中ではそれが強い理由として根付いていた。

「兎に角金を稼ぐ方法を探すぜゴン！！」

「うん！！」

「うゝん……ここに大食いチャレンジとかないかな」

「それならシヤネルは楽勝だろうが直ぐに情報が知れ渡って、出来なくなる可能性も高いぞ」

ここから彼らの資金稼ぎが始まる……それが大きな波に関わるのは

そう遠くない未来……。

「さあゝいらっしやいいらっしやい！！条件競売が始まるよく！！」

日も傾いて空が夕焼けに染め上がってきた頃、町の一角で上がった明るい声。人々が行き交っている道の途中に置かれた机と椅子、そこに座っているのはゴンとシャネル、その傍にはプレートの上に乗せた宝石をそれぞれ持っているキルアとクラピカ。

「競売品はこちら、300万相当のダイヤ！その店で買った鑑定書つきだぜ！落札条件は腕相撲、こちらの少年に勝った者に与えられるます！！参加費用は1万ジェニー！」

その近くで木の棒をマイクのようにしながら大会を盛り上げる実況者の如く熱演しているレオリオ。これはホテルの部屋に備え付けられていたパソコンで稼げる手段を調べていた際に発見した条件競売を実践している物。

「更あにゝ腕自慢にはこちらの青年！こちらの方は5万ジェニーとちょっとお高め！しかあしその青年近くの方が持っている宝石はなんと1000万相当のダイヤ！！正に一攫千金！自信がある方は是非どうぞお！！ではオークション……スタアアアアトツツ！！！！」

レオリオの声と共に1万ジェニーを掲げて参加表明する男たち、あからさまに小柄な少年であるゴンなら勝てると踏んでいるのだろう。シャネルの方も少数ながらも参加しようとしている者達もいる。体

格的にシャネルの方が勝つのは困難と思われる、だが5万ジェニーで1000万の宝石が手に入るというならば十分参加は見込めるし、例えば5万で負けても1万の方ならまだ勝てるかもと言う希望を抱いて参加する事もありえる。2重の資金稼ぎが可能になっている。

「兄ちゃん、悪いが1000万は俺が貰うぜ」

「へへっやってみな」

「5万ジェニー確認終了、では互い手を握って……用意、スタート!!!」

「「ふぬう!!!」」

ゴンとシャネルも腕相撲へと入っていく、腕相撲のコツは相手にそれなりの手応えを味合わせる事。圧勝では相手の心を折って再度挑戦する事は難しくなる、だが惜しい所まで行けた、後ちよつとで勝てるという思いがあればリトライしたりゴンの方へ挑戦者が流れる事が多くなる。

「（でもこれだけで89億稼ごうとしたら88万9千勝……時間、間にあわねえだろこれ）」

「（シャネルへの挑戦が5万、それだと17万8千勝……今日一日で500万行けば上々レベルだな）」

その後も途切れる事の無い挑戦者にゴンとシャネルは腕相撲を続けるのであった。絶え間なく続けているとすっかり夜も更けて暗くなってしまう街灯が腕相撲を明るく照らしているが未だ二人は負けずに続けていた。シャネルの方は挑戦する人数は減って来ているが代わりにこんな楽金を稼いで良いのかと疑問に思い冷や汗をかいているゴンに流れて行っていた。

「あー肩凝った……つうか好い加減疲れたわ」

「お疲れさまだシャネル、38連勝。190万だ今の所」

「ゴンの方はまだ続いているな、もう151連勝だろ？」

「ああ、シャネルに負けてだいぶそちらに流れているな」

幾ら5万で1000万と言えどシャネルの見た目も影響してか良い加減挑戦するものは消えて来ていた、今は疲れて暇そうにしているフリをしつつもゴンの腕相撲を鑑賞していた。152戦目の相手はなんと初めての女、黒髪的眼鏡を掛けた少女だった。

「へえ……割と若そうだけど自信あんのかね」

「でなければやらないだろう（妙に見つめているな……もしかして黒髪眼鏡がいいのか……？）」

クラピカの心中はさておき、ゴンと少女が手を握りあった時ハッと顔を鋭くした。手を握り合った瞬間に感じる彼女の強さ、オーラの力強さに驚愕した。まるでシャネルと手合わせをして入るかのような感覚に近い。

「ようござんすか！？レディ、ゴォー！！」

合図と共に一気に力を込めて互いに相手の手を握り潰さんとする勢いで握り締めて一気に相手の腕を倒しに掛かる。此処まで余裕を残し、相手には良い感じの優越感を浸らせていたゴンだが今回に限ってはそんな余裕など無かった。一瞬でも気を抜けば負ける、そう確信できる。

「んっ……んんっ……!!！」

「ぐううう……ぐうあああああ!!！」

必死に歯を食い縛り今出せる全力を発揮するゴン、本気の本気であった。あまりの力で机には罅が入り始めミシミシと音を立てていた。机が音を立てて崩壊しようとしていた時、ゴンは何とか相手の拳を机に付け勝利する事が出来た。

「ふう………」

「有難う御座いました」

「あっこちらこそ」

周囲の見物人達は少女に良くやったなどの声を掛けて盛り上がっている。事実、今日一番ゴンが力を発揮した取り組みだったし傍から見てももっとも互角と言える物だった。しかし、凄まじい腕力だ。

「すっげえパワー……」

「ああ。とても少女と思えんな……」

「あの挑戦して良いですか」

クラピカと彼女に対する感想を言い合っている今度はこちら側に挑戦しにやってきた、クラピカは5万を受け取りつつ彼女を席へと案内する。シャネルも気を引き締めながら左手を差し出し、彼女もそれに従って左手を出してきた。

「よし準備は良いね、用意……スタート!!！」

先程の事を見ていたからかシャネルは加減する気など一切無く本気でやる気だった、それに加え自分もゴンと同じように彼女と手を会わせた瞬間にオーラの強さを感じ取ったからだ。故に全力を出す事にした、だが

「ぐううううう！！うおおおおっ……………！！！」

「んっ……………！！んんんんっっ！！！」

互いに一步も譲らず互いに腕が殆ど動かないと言う状況が発生していた。その光景にクラピカは目を疑い、周囲の見物客もその光景に目を奪われていた。

「（この子、なんてパワーだ……………！！！！重機と腕相撲してる気分だぜ……………！！！！）ウオオオオオオッ！！！！！」

「んんっ……………！！！！！」

互いに更に力が籠っていく、それは机を掴んでいる右手にも現れており互いの右手は既に机の一部を握り潰す域にまで入っていた。一向に好転しない状況が1分ほど続いたが終りは唐突に訪れた、二人の力に机が耐え切れずに木っ端微塵に碎け散ってしまったのだ。

「なっやべっ！？」

「あっいけない」

粉々に碎け散ってしまった机を見つめる二人、それを拍手喝采で興奮を見せる見物客たち。だが行為は如何した物か……………。

「如何しますかお嬢さん、これはこちらの机のチョイスミスとも言えます。挑戦金は返金しますが」

「多分鉄の机でやっても勝負付かなかっただろうし、もう行かないや行けないみたいなんで。有難う御座いました」

一礼をして去って行く少女を見送るシャネルとクラピカ、だが彼の左手は小刻みに震えていた。彼女の握力と腕力で腕が痺れてしまっている、机が壊れてしまいこちらは操業停止したのはいいがこのまま続けていればかなり不味かったしれない。

「シャネル大丈夫か、今の本気だったんだろう」

「ああ。あの子マジで強いぜ、恐らく左手が利き手なんだろうな……さっきはゴンが右出したから右で応えたって所か……つうかマジで少女か、あの子」

「シャネルとほぼ互角とは……もしや強化系の念能力者か」

「可能性としては十分にあるな……おゝ、俺もまだまだ鍛えねえとな」

この後 gon は 275 連勝を記録した所で切り上げた。gon は 275 万、シャネルは 195 万、二人合わせて 465 万ジェニーを稼ぎ上げた事になり、総額約 6500 万ジェニーを有している事になるだが目標とする 89 億にはまだまだ遠く及ばない金額。

翌日も資金稼ぎは行われるのだが、そこで事件は起こるのであった……。

015話

「さあ〜いらっしやいらっしやい！！条件競売が始まるよ〜！！」

腕相撲での条件競売二日目、今度は朝早くから競売をスタートさせている。朝早い矢張り1万で300万、5万で1000万という宝石がゲット出来る事もあって多くの人間の目を引いている。だが

「お、おいやろうぜ！」

「やめとけよ。あの坊主昨日は275連勝だったそうだぜ」

「275連勝！？」

「腕を折られた奴も20人以上いたって話だぜ！？」

「あの大男だって相手の腕を粉碎したって話だぜ」

昨日の大勝が色んな意味で噂になっている、凄まじい力の少年と青年の噂は尾ひれが付きまくり真実でない事が真実であるかのように話されている。まああれだけの勝利をすればその結果に尾ひれが付くのは当然かつ、それを信じて挑戦者が極端に少なくなるのは当然といえるだろう。

「これでは挑戦者は現れそうに無いな」

「だ〜な、どう済んだよレオリオ」

「まあ見てろって……多分、もう直ぐ釣れるぜ」

何を待ち続けているレオリオに顔を見合わせる4人。そんな時大柄の男を連れて一人の男がやってきた、挑戦者かと思ったが全く違っ

た。

「なあ兄ちゃんたち、もっとでっかく稼ぎたくねえか。稼ぎたかったら付いてきな」

「よし、釣れたぜ……しかも大物がな、行くぜみんな」

レオリオはそのまま二人の男についていくのでゴン達もその後を追って続いていく。裏路地に入っていく男たちはとある建物に入っていく、そのエレベーターに入るとなにかカードキーを通してからボタンを押した。

「ねえチャンネル、これって一体何なの？」

「所謂裏の賭場への入り口ってとこじゃねえか？」

「正解だぜでかい兄ちゃん。さあ着いたぜ」

エレベーターが停止し扉が開くと聞こえてきたのは凄まじい歓声と溢れている殺気、暗い部屋の中の中心に明るく照らされているリングの上では屈強な男達がアームレスリングで勝負を競っていた。

「これが裏の賭場……裏アームレスリングという所か」

「その通りだ、ここでは一試合毎に賭けが行われている。勝者には掛け金の10%が支払われる、一回の試合で動く金は1億を超える」

「一回勝てば1000万を超えるって事か……」

「場合によってはもっとだ」

「おっしやあゴン行ってこおい!!」

興奮するレオリオに若干引きつつも金が必要な為、少々乗り気がし

ないが行こうとした時突然暗かった筈の部屋が明るく照らされリングの上に一人の奇抜な格好をした男がマイクを持ちながら飛び降りてきた。

「突然ではありますがアームレスリングは中止させていただき条件競売を始めさせてもらいまぁゝす!!」

「条件競売い?」

「条件は、かくれんぼで御座いますゝ!!」

周囲の客達がブーイングをする中全員に配られていくプリント、シヤネル達に受け取りそれを見て見るとそこに写っていたのは7人の男女。しかもそのうちの一人には昨日来ていた少女が含まれていた。

「落札条件はターゲットを捕獲し我々に引き渡すことお!一人につき、20億ジェニーの小切手と交換させていただきまぁゝす!!」

「ひ、一人につき20億だと?」

「全員捕まえたら140億だぜおい!」

「期限は御座いません、生死も問いません!捕らえ次第後連絡くださあい!但し、参加費用として500万ジェニーいただきます!」

法外ともいえる異常な懸賞金、しかも生死も問わず期限も無い。条件競売というよりもまるっきり賞金首探し、何かあると踏むべきだろう。だが取り合えず参加する事にした一同は一旦外へと出たがそこでは既に多くの人間が連絡を取って7人の行方を捜していた。

「俺達も急いで探そうぜ!!なんたって140億だぜ!!?」

「心配せずともそう簡単に見つけられないさレオリオ。マフィアが

態々懸賞金を掛けるほどの相手だ、簡単に発見出来る訳が無い」

「ああ、マフィアが自分達の力で捕まえられないって言ってるのと同じ」

「確かに……こいつらをそこまでしてでも捕まえる必要が出てきたって事か」

「理由は解らんがな」

7人の男女がマフィアに狙われる理由、それはマフィアに対する敵対行為。そして20億と言う検証を掛けられている事を考えると、んでもない事をやらかしている事になる。そして先程と場で聞こえてきた話……そうなるはこの男女の正体が見えてくる。

「さっき聞こえたんだが、地下競売が襲われたらしい」

「地下競売が！？」

「おいおいマフィアのお宝を奪ったって訳かよこいつら……？頭逝かれてるんじゃないか？」

「だけど俺たちはそんな逝かれ頭に心当たりがあるだろ」

「――」
「幻影旅団……！！」「――」

その言葉に激しく反応していたがクラピカだった、プリントに映し出されている人間全てに憎悪の感情が乗せられた視線を送りつつ腕を震わせながら息を荒げていた。捜し求めていた復讐の対象が、近くににいるのかもしれない、それがクラピカの感情を酷く荒げていた。そんな彼を静める為にシャネルは背後から彼を抱き締める。

「落ち着けクラピカ……落ち着くんだ……。お前の気持ちは解るが冷静にならなきゃ見える物も見えなくなっちまう」

「ハア、ハア、ハア……ふう……すまないチャンネル、私とした事が……」

「しかし如何するか、これから如何動きか入念に考えなきゃいけないぜ」

「情報提供者を募ってるしかないだろうな、賞金を掛けてな」

情報提供者を探すのが矢張り一番無難、高い賞金を掛ければ当然飛び付く奴も居るだろう。

「しかしどの位掛けるんだ？」

「2000万だ」

「「に、2000万!？」」

「俺の預金はまだ4000万近くあるし宝石だってある、2000万使ったって余裕はある。ついでにオークションに参加するのは参加賞つきのカタログだって俺が出してやる」

「し、しかし良いのかよチャンネル!? 確かカタログは1200万だぞ!? 合計3200万の出費!？」

「構わないって。仲間の為だしな、なくなったらまた稼げば良い」

チャンネルの好意に甘え、お尋ねサイトに上げられた2000万という破格の賞金額。但し条件も厳しく、旅団の現在位置とその証拠を提示しそれが信用出来ると判断できた場合のみ支払われるという仕組みにした。これならガセネタが来たとしてもかなり絞れる事が出来るし本物かどうかの判断も出来る。

「クラピカ、如何した眠れないのか？」

「ああ……シャネルか」

取り合えず一同はホテルへと戻りお尋ねサイトの監視と出来る限りの情報収集にをし始めた。だが矢張りまともな情報は見つからず伝言サイトに投稿されて来た情報もガセネタばかり、状況は芳しくなく夜も更けていた。交代でサイトの監視をしていた際、休憩していたクラピカが居ない事に気づいたシャネルはベランダで夜景を眺めているクラピカを見つけ話しかけた。

一旦は落ち着きを見せたがそれでも矢張り心中は穏やかではないのだろう、復讐の対象が直ぐ近くに居る事に。

「シャネル、あの時私を止めてくれた事感謝している。あの時、冷静になれなければ私は何も考えずに行動していただろう」

「気にするなっお前の気持ちだって解るからよ。お前が荒れそうになったら何時でも止めてやる、それが支えるって事だぜ」

シャネルの言葉は本当に頼もしく有難い、先程まで荒れ狂っていた感情が収まり始めている。自分を支えてくれる強い存在が自分を鎮め、正しい方向へ修正してくれる。有難い事この上ない。

「にしても良い夜景だな」

「ああ、美しい」

唯の夜の浮かんでいるビル郡の明かりだというのに修行の際に良く見ていた星空に良く似ていた、あの時もこうして二人っきりで空を見上げていた。そう思った時、ドクンと心臓が大きく跳ね上がった。

「（わ、私は……師として尊敬と親愛を……）」

「今度はじっくり、旅団とか関係なしでこういう所来たいよな♪」

「あ、ああそうだな（私と一緒に来たい……！？）」

笑いながら掛けてくる言葉を聞く更に心臓は早打ちになって爆発し
そうになっていく。自分で解っている筈、この感情が既に尊敬や親
愛などでは済まされない事は……。これは……明らかに

「シャ、シャネル！！！」

「んっ何だ？」

恋、なのだろうか。

「私はシャネルと会えて本当に良かったと思う！」

「なんだよいきなり照れるじゃねえか♪俺もお前に会えて良かった
と思うぜ」

静かに夜は更けていく、激しく渦巻く感情と共に。

お尋ねサイトに情報提供者には2000万という大金を出すという触れ書きを出した翌日の昼、ゴンとキルアがグリードアイランド購入の資金稼ぎのために外出している時に遂に情報が舞い込んで来た。証拠として髪の毛の長い男とキツめの女性が写っている動画が添付されていた、明らかに本物の旅団のメンバーと断定したシャネル、クラピカ、レオリオはゴン達と外で合流して旅団の二人の位置を聞きつつ監視できる位置の店に移動し監視する事にした。

「さてと問題はこれからだな、どうやってあの二人を捕まえるかだが……」

「「無理だな」」

シャネル、クラピカ、キルアが同時に声を上げて捕まえる事は不可能だと断言した。冷静にしつつ暢気にジューズを啜っている3人に思わずレオリオは半ばキレ気味に何故だと言いつつ立ち上がるがキルアに諭されて渋々席につく。

「私は対旅団の能力を持っているが、流石に二人ではキツイ。僅かでも単独になるかそれなりの隙さえ出来れば捕らえる事は出来るか……人も多いしかなり警戒している状態では無理に等しい」

「俺も賛成だな、そうは見えないだろうがあいつらさき気無く凄じ警戒してるぜ。下手に捕まえようとするとアウトだな」

「そんなにか……?」

「あそこにヒソカが二人居るって思えば良いよレオリオ、そうすれ

ばやばさが少しは解る」

そう言われて想像したのかゴンとレオリオは身震いと確かにやばいと言う事を理解した。シャネルとクラピカ、どう足掻いても身震いと寒気がとまらない結果となった。移動を始めた二人組、一瞬クラピカは真っ先に追いそうになるがそれを必死に押さえ席に着き直した。

「さてと、何度も言うけどともに戦って勝てる相手じゃないぜ」
「何とかするしかねえって、しなきゃなんねえだろ？」

「うん、俺もこのまま引き下げるのは嫌だ」

「私も同感だ」

「OK。んじゃ俺の考えを言うぜ」

追跡を行うのはゴン、キルア、クラピカ、シャネルで行う。レオリオはオーラを絶つ"絶"を使う事が出来ない為追跡に参加しても即効でバレてしまう、これにはレオリオ自身も賛成で競売を担当する事になったがこれにクラピカは異を唱えた。

「8割方賛成だがシャネル……私が参加するのは辞めておく」

「えっ辞めるのクラピカ？チャンスかもしれないんだよ？」

「確かにこの場面で得られる物は大きいかもしれない……私も"絶"は出来るが憎悪と殺気は、近づけば押さえつけられないだろう……」

案を出したシャネルはそれにとっりと笑った、案を出した際に敢えてクラピカを追跡組に組み込む台詞を言った。それに飛び付くか合理的に判断し自分を押さえ付けられるかを試した。目論みは大成

功、クラピカはなんとか感情を押さえつけながら冷静に判断して自分を追跡組から抜くように申し出た。

「パーフェクトだクラピカ、良く踏ん張った」

「シャネルも人が悪いな……だが、皆気を付けて……危険だと思ったら直ぐに帰ってきてくれ……！」

それがクラピカの切実な願いだった、確かに復讐も遂げたい。だけれどもこの大切な仲間達を失いたくない、自分の身勝手な復讐心のためだけに……。

「解ってるよクラピカ、危険だと思ったら直ぐに逃げる。それでも俺、ハンター試験の時に一日ずっとヒソカを尾行してたんだから」

「おいおいすげえな。良くあの変態ピエロにバレなかったな」

「まあそれなら合格だな……後ゴン、後で殴らせろ」

「なんでえ!？」

若干コント染みたやり取りの後、追跡組は「絶」を使用し気配とオーラを完全に絶ち一気にジャンプして建物の屋根へ飛び乗って旅団の追跡を始める、細心の注意を払いつつ……。広場を抜けて小道を進んで行く二人を追いつつ隠れながら進んで行く3人。

「（やばいな、どんどん人気の無い方に……。奴らは何処にいく……流石に尾行はバレてるだろうしな。ならこれは、罠か?）」

暗殺者として育てられたキルア、相手を尾行する際のノウハウは叩きこまれている為その尾行は完璧な物、だが故に相手の行動の真意

をより深く探ろうとしてしまっている。

「（気づかれていなくてアジトに戻るのだとしたら尾行は大成功……罨即脱出、アジトならまだ追うべき……否あいつらの態度に不自然な点はない、続行だ！！）」

どんなに訓練を積んでいる人間だとしても尾行されていると気づいた時にはほんの僅かな態度の差が出る、それを見逃すが無いという自信から尾行は続行するべきだと判断しそれをシャネルとゴンに知らせる。そして尾行は更に人氣が無い場所へと続けられ、遂には人の氣配が完全に絶たれるほどの場所へととなった。

『シャネル、キルア如何思う？』

「誘っていると思って間違い無いだろうな。姿を確認出来ていないが尾行されている事は解ってるから姿見せろって言いたいだろうな」

『ああ俺も賛成。でも待ち合わせの可能性あり、まだ様子を見る』

廃墟の4階にそれぞれ陣取り二人組を見張る、唾を飲み込む音すら響きそうな空気の中で携帯の音になった。3人は何か怪しい動きを見せたら即離脱と決め込み様子を見る。男の方、ノブナガの携帯がなった。携帯を取り何かを話している……そして

——キルアの方へと視線を向けた。

「「「っ！！！！」」」

全身に感じる強い殺氣と危機感に全員が同時に地面を蹴って離脱を

試みようとした。だが……既に部屋の出口にはそれぞれ人間が立って出口をふさいでいた。

「よお、何処行くんだお前」

「ッ!!（退路を……!）」

「逃げようって思わないでよね」

「（おいおい此処4階だよな……!?!）」

窓があった位置にも既にもう一人が立っていた。完全に退路を塞がれている状況、閉鎖的な空間。下手に動くのはまずい……。

「幾つか質問。問1・なんで追ってた」

「……」

「おっと、動くなよ。殺すぞ」

窓を塞ぐ見た目は優男な金髪、そして部屋のドアがある部分には自分よりも少々大柄で筋肉質な男。

「お前らの首にマフィアがでけえ賞金を掛けてんだ、それが目当てで追ってた」

「問2・尾行は誰に習ったのか」

「自己流だ。俺は狩りもする、やってる内に覚えた」

「ほう……絶、解いてみな」

大柄な男は面白そうという感情を表情に貼り付けながらそう言った。シャネルは素直に「絶」を解いた、そして男達はシャネルのオーラの強さに感心し笑みを浮かべた。

「そうかそうか……おい下に降りろ」

「……」

指示通りに下へ、先程まで二人組がいた位置にまで誘導される。少しするとゴンとキルアもそこへと集めた。二人の身体を見る限り何かされた訳でもないようだ、それにホッとしていると大男は廃墟の一部を破壊し台にするように地面に叩き付けるように置いた。そしてそこへ腕を置いた、昨日自分がやった腕相撲のように。

「おいウボォー、何する気だ？」

「ちよっくらこいつと力比べしたくなつてのさ、こいつなかなかやるぜえ？」

「らしいね」

「……やれば、最低でもこの二人だけでも逃がしてくれるのか。そうならやってやる」

その言葉に思わずゴンとキルアはシャネルの顔を見た、冷や汗一つ欠かず真っ直ぐとした表情で言っている。本気だ、シャネルは自分達を逃がそうとしている。ウボォーと呼ばれた人物は更に面白いだといわんばかりに笑う。

「良いぜえ、但してめえは一緒に来て貰おうか。念の為にな」

「ああ解った」

「「シャネル！！」」

「静かにしてな二人とも、安心しな。ちよっとした出張みたいなもんだ、留守番、頼むぞ」

「この場は無事脱出し情報を渡せ、二人を頼んだ」。言葉にそういう意味があった。

「だったらウボォー、アジトでやりな。さっさと連れて行くよ」

「まあいいか。うしならさっさと行こうぜ」

「あんた達ここで30分は動くな、動けば直ぐに解る」

ノブナガと一緒にいた女、マチはそう二人に言い聞かせるように言いつつ指を動かしていた。そしてウオボーはシャネルの肩に腕を回しつつそのまま歩き始めた。ゴンは思わず動きそうになるがこっそりと動いているシャネルの左手を見た時、完全にとまった。子供に駄目と言い聞かせるように指を左右に振っていた。

「（下手に動くな……そう言いたいんだなシャネル）」

「（絶対、絶対に無事で居てね……！！）」

017話

「おいこっちだぜ」

「……………」

幻影旅団からキルアとゴンを逃がす為に一人、旅団に連れて行かれたシャネルは車に乗せられ廃墟街一角の大きいビルへと連行されていた。四方を旅団のメンバーに囲まれ逃げ出せる隙もない上にウボオーギンには肩を組まれてしまっている、100%逃げ出す事が出来ない。奥へと連れて行かれる、そこにいたのは残りの旅団。全員が凄まじい使い手だと直ぐに把握できる程に……。

「そいつ如何したね」

「おう中々強そうだからよ、力比べでもしてやろうかと思ってよ」

「んっそいつ確か一昨日シズクとやった奴だな」

瓦礫の上に腰掛けている男がシャネルを見つめながらそう呟いた。それを聞いたウボオーギンはへえっと声を漏らした。

「おいシズク」

「何。あっ一緒に机粉碎した人だ」

「……如何いう覚え方ア……？」

「へへっこれは更に面白くなりそうじゃねえか……おい早速やるぜ」

掛かった獲物が想像以上のものなのが嬉しいのか嬉々として瓦礫を

運んでくるとそこへ腕を置く。

「おら早くしろよ」

「……ちっ解ったよ」

右腕の袖をまくり腕を置きがちりとウボォーの手を組み合わせる。周囲に他のメンバーが囲いつつ逃げられないようにしている、もう片腕で瓦礫をがちりと掴む、腹いせに相手の手を握りつぶす勢いで。そうしたらウボォーも同じように返してくる。不思議な連帯感を感じつつ、言葉を口にする。

「「レディ……ゴッ!!」」

同時にスタートの宣言をし右腕に力を込め相手の腕を倒しに掛かる、

「ぐぐぐぐううう!!!(このパワーシズクって子以上か……!!)」
「むううううう!!!(良いパワーしてやがるぜ……!!)」

相手の力の凄さを理解していく程に腕へと込められていく力は増え続けていく。台替わりにして入る瓦礫を掴む手の力も上がっていき既に双方の手は瓦礫に埋まっている、右肘も徐々に瓦礫を砕きつつ潜りつつある。旅団一同はウボォーギンの力と同等クラスの腕力に感心しつつも警戒している。

「てめえ名前は……!!?」

「シャネルだ……ウボォーさんよお!!!!」

「そうか、チャンネルか……覚えてええええ!!!」

名前を確認すると更に力が強まり一気に押し込まれていく、先程まで使っていなかったが念を使い始めたらしい。それに対抗しチャンネルも念を使って腕を押し返し始めるがそれでも数歩劣っている、ウボォーギンの系統は強化系。幾ら強化系に寄っている放出系とはいえ生粋の強化系と比べれば劣ってしまう。

「良い念してるじゃねえのか、てめえも強化系か!？」

「残念無念俺は放出系だよ!!!」

「マジか!!!」

「嘘言って如何済んだよ!!!」

更に念を放出して力を高めていくチャンネル、力を強化していくがオーラを使えば使うほどにカロリーも消費されていく。正直な所今日は余り食事を出来ていない、精々4万キロカロリー程しか摂取できていない。あまり長い時間オーラの高出力は維持しきれない、だからといってオーラを弱めれば自分の負けを認めるような物、そんな事など出来ない……!!!

「「全開、だああああ!!!」」

遂にオーラと腕力を全開で解き放った二人、建物自体が小さくだが揺れている。強化系と放出系のぶつかり合い、一気に押し込もうとするウボォーだがそれを必死に押し返し開始の位置にまで戻し抵抗するチャンネル。互いの叫び声が木霊しつつも念は強くなり続けている、それが永年に続くかと思えた時それは終わった。

「「おおおあらああああ！！！！」」

余りのオーラと腕力で台にしていた瓦礫その物が破壊され、砕け散ると言うシズクと全く同じ結果が訪れたのだ。だがそれでも二人は腕を組み続けている、互いに立ち上がりつつ今度は真正面から腕を突き合わせ押し合いに寄る勝負に移行している。

「あいつ、マジで放出系か？」

「さあね。でも嘘を言う意味は薄いと思うし本当なんじゃない」

「ウボォーと互角か……」

押し合いが続く、だが遂に痺れが来たのか互いがバックステップを踏みつつ後退し拳を振り抜いてぶつけ始めた。肉どころか骨にまで響く振動にウボォーギンは笑いつつ思った、こいつを本気で殺したいと。

「面白い……面白かったぜおい、シャネルさんよお」

「へっ俺はそこまでだな、いやちょっとだけな」

「良いぜ、もう帰って」

力比べと言う本来の目的を果たしたからかウボォーギンは満足そうに言った、帰って良いと。軽く押さえている右腕を嬉しそうに擦りながら。

「おい良いのかよ帰しちゃって」

「良いんじゃないの、元々ウボォーが力比べしたいって言うから連

れてきたようなもんだし」

「おいシャネルよ、またやらねえか？」

「ふざけんな、御免蒙る」

「つれねエな」

どこかシャネルを気に入ったのかウボォーギンはそのままシャネルを見送る事にした、正直あそこまで出来るとは予想外だったらしく気に入ってしまったらしい。また、戦いと思ってしまう。そして思わずこんな事を言った。

「明日の0時、街外れの荒野で待ってるぜ。また、やろうぜ」

「……俺が、来るとでも？」

「来るさ、てめえは俺と同類だ」

ウボォーギンが感じ取った何か、シャネルの隠された本性に近い何か。この男も互角に戦える相手がほしいと心の何処かで思っている。それが間違いだと思わない、恐らくシャネルは自分の全てを出し尽くすほどの戦いをまだ経験していない、そんな戦いをしたいと望んでいる。そう直感出来る。最後に待ってるぜと言うとシャネルは何も答えずに去っていく。

「へへへっ久々に本気が出す時が来たぜ……！！！！」

「くそが……腹減ったし腕はいてえし……何が俺と同類だ、あの野郎……！！！」

歩きながら酷くイラつき言葉を漏らしながら先程の言葉が何度も何度も脳内でリピートしている。

——来るさ、てめえは俺と同類だ——

同類、自分がああの幻影旅団と同じだと言うのだろうか。絶対に違う、自分はある奴らと一緒になどではない。だがそれでも自分は全力を出せて嬉しいと思っていた、クラピカの修行でも出せなかった全力の腕力と全力のオーラ、それを発揮出来て嬉しいと言うか。

「……わかんねえな」

剃を使い一気に遠ざかっていく旅団のアジトを見送りつつ、一旦立ち止まり溜息を吐きつつ携帯を取り出し連絡帳からクラピカの番号を押した、コールが一回すると即座に通話が繋がった。ずっと携帯を握り締めていたのだろうか、クラピカは。

『シャ、シャネル！！大丈夫なのか！！？本当に本当に本当に前なんだな！！！！？？？』

「だあああ声デカいつての！！？俺は大丈夫だ、心配掛けたな」

シャネルの声を聞くとクラピカは心底ほっとしたという溜息と声を漏らしているのが聞こえてきていた。かなりの心配を掛けてしまったようだ。

『何かされなかったか！？』

「腕相撲した位だな」

『な、なんだとお！？それでは手を合わせたというのか！？大急ぎで戻って来るんだ！！早急に消毒と滅菌処理をしなくては！！！！！！』

「いや……それは大袈裟なんじゃ……」

『何を言っているこのぐらい当然だバカァ！！！！！！』

携帯から聞こえてくる爆弾のような声、思わず耳が一時的に聞こえなく程の爆音にチャンネルは携帯を落としそうになる。

『そこから悪性の菌が繁殖したら如何する！？否既に毒が感染している可能性だって有りうる！！！！ああなら今すぐにでも私がそっちに行って迎えに行かなければ！！！！』

『おいクラピカマジで落ち着け！？冷静になれ！？』

『私は至って冷静だ！！！！レオリオ道具借りて行くぞ答えは聞いてない！！！！』

『せめて答え聞けよ！！！！ってせめて消毒用のアルコールしかねえってだから待てえ！！！！おいゴン、キルア取り押さえるぞ！！！！』

『う、うん！！！！』

『離せお前たち！！チャンネルが、チャンネルが危険なんだああああああ！！！！！！！！』

「いや心配してくれるのは嬉しいけど……それは、ないわあ………」

聞こえてくる声に思わず顔を青くしつつ引いてしまうチャンネル、これから戻って顔を合わせた時どんな反応をしたら良いのやら……。

『いってえなおい静まれて!!!』

『ああもう首に一撃入れて良いか!?!』

『せめて最終手段にしろ!!!』

『クラピカお願いだから大人しくしてよお!?!』

『うおおおシャネルウウウウウ!!!』

「…………俺の弟子って、こんなに怖い奴だったっけ…………?」

「ただい、ま……」

「ぜえぜえ……何でこんなくだらねえ事で体力消耗しなきゃいけないだよ……」

「マ、マジ疲れた……」

「さ、流石にシャネルと修行してただけはあるよねクラピカ……」

ホテルへと戻ってきたシャネルは両手に途中で買ってきた大量のファーストフードなどを下げて部屋へと入った。がそこに広がっていたのは全身で息をしているゴン達と椅子に座らせられながらロープでぐるぐる巻きされた上で気絶させられ、拘束されている自分の弟子の姿だった。

「……すいません間違えましたお邪魔しました」

「「嫌々嫌々合ってるから……!」」

「そりゃ……うちの弟子が申し訳なかったな、後でキツく言っとくわ」

「ああしつかり頼むぜ」

「ったく取り押さえて気絶させるのに豪い苦勞したぜ」

「凄い強かったよねクラピカ」

「そりゃかなりきつい修行メニュー組んだからな」

シャネルが買ってきた大量のファーストフードを凄い勢いで食べて

いくゴン達、クラピカを止めるのにかなり力を使って疲れているのだろう。シャネルも元々一緒に食べる為に買ってきた物なので食べる事には何も言わず本人も一緒に食べている。

「しかしシャネルよお、クラピカお前に依存してるじゃねえのか？修行中何があったのか知らないけどあの取り乱し方は異常だったぜ」
「……否なんとも俺に言われてもなあ……如何してあんなったのか」
「取り合えずあの事は忘れてやろうぜ、クラピカの名誉の為にも」
「確かに、なんか傷つきそうだもんね」
「異議なし」

全員一致で先程の言葉は忘れる事になり取り合えずクラピカの拘束は解かれた。それとほぼ同時にクラピカは目覚める。

「うううん……シャ、シャネル……！？そ、そうか無事に戻ってきてくれたのか……しかし、如何して私は眠っていたのだ……？」

「コケてシャネルの頭と激突して気絶したんだよ」

「なっ！！？」

「お、おいキルア」

「こっちの方がまだマシだ」

顔を赤くして謝罪するクラピカ、それを受けつつ構わないから気にするなど言いつつ食事をし続けるシャネル。ゴン、キルア、レオリオは思わずハンター試験第2次試験の試験であったブハラを連想した。シャネルの食べっぷりと既に食べている量を見たからの考え。

「良くそんな食えるな……ハンター試験の試験管思い出すぜ」

「ああ豚の丸焼きを凄い食べた人だね！」

「あいつに負けず劣らずって感じだな……………」

「まあ俺の場合は食わなきゃいけないだけだな」

「いけない……………」

巨大ハンバーガーを10個目を完食した所で一旦喉を潤すシャネル、話しても大丈夫かと思いい口を開いた。

「お前ら、制約と誓約って知ってるか？」

「なんなのそれ？」

「知らなかったか、簡単に言うとな念能力を強化する手段の一つだ」

「念を強化！！？」

念能力を強化出来る言葉にゴンとキルアは強く食いついた、その食いつきはクラピカを思い出させる。二人を何とか押さえつつ改めて説明に入る。

「ルールを宣言してそれを守る……………」

「そんな強化法があるなんてね」

「でもこれは安定しない力、だから無理に組み込もうとはするなよ。基礎能力を上げて念を強める方がよっぽど安全だし安定するんだ」

「かあ……念っていうのは奥が深いんだな」

レオリオも感心したように制約と誓約、念についての話を聞いていた。そして笑っていた。彼の目標は医者となり病気を治すにも金がない人々を無償で治してやる事、だが医術だけでは到底救えない命もある。輸血が間に合わず、出来ずに死んでいく命だってある。し

かし念能力ならばそんな命も助ける事が出来るかもしれないと強い希望を持てた。そして決心したように大きな声を上げる。

「シャネル、俺も絶対念を覚えてやるぜ！そしてそれで相手を癒す力を作る！！」

「回復能力か、良いじゃないか。それ」

「レオリオ立派だよ！」

「確かに、金ばかり求めていた頃からだいぶ進歩しているな」

「否今も十分金に執着してるって」

「喧しい！！」

怒り声を出しつつも笑うレオリオ、良い目標が出来たのかもしれない。笑いあっている時、キルアが声を上げた。

「なあシャネル、旅団に連れて行かれたんだろ。何があったんだ？」

「端的に言えば電話で言った通り腕相撲だな、まあ台にしてた瓦礫粉碎して無かった事になったけど」

「ま、まだぶっ壊したのか？」

そう言われてしまうと困ってしまうがそれほどに相手の力が半端無く自分もそれに全力で対抗した結果だった。全力で抗わなければ腕は砕けていたかもしれないしあそこまで連れて行かれてあっさりと負けを認めるような行為などしたくは無かった。単純に自分が負けず儀らだからこそ生まれた結果なのかもしれない。

「クラピカ、一言言っておくぜ。今のお前のレベルだと旅団に勝つのは難しいかもしれない」

「っ！！！！」

「俺が力比べをしたのはウボォーという大男だけだったが連れて行かれたアジトには他のメンバーもとんでもない念の使い手だ」

今この部屋に入る5人の中でも実力者はシャネル、念能力オーラの強さ、体術も含めても彼はかなりの高い実力を持っている彼でも旅団の強さは強すぎると認識している。実際にウボォーギンと言うメンバーと手合わせをして入るから言える台詞でもある。それを含めた結果、今の実力のクラピカは戦うべきで無いと思っている。

「それほど、なのか……？」

「ああ。念能力をまだ向上させないとやばい、そうだと確実に言える」

「……くっ」

師である彼の言葉に思わず齒軋りをしてしまう、半年間必死に修行して来た。シャネルにも良い評価を貰っている、だがそれでも自分の刃は相手に届きえないという事実が酷く齒がゆい。

「（悪いクラピカ、今はまだ耐えてくれ……）」

クラピカの能力は確かに高い水準の物だろう、だが念能力はまだ未熟。六式を同時に学んでいた為か念のレベルが当初計画していたレベルより低くなってしまっている、それを六式で補うと言う戦いも出来るだろうがそれを完全に物していない時点では危険が多すぎるし今この時点でないと蜘蛛を妥当できないと言うわけではない、まだチャンスはある……！！

「それって俺達も勝てないって事だよな……」

「そうだね……あっそうだねえシャネル！俺たちの師匠になってくれない！？」

「お、俺がか？」

「うん！俺達、もっと強くなりたいんだ！！」

思わず呆気にとられてしまうシャネル、ゴンは明るく裏が無い素直な気持ちでぶつけてくる。旅団に僅か間でも接触しそこで相手の力量の凄さを実感し更に強くなりたいと思ったのだろう。そしてクラピカの師匠でもある自分にそれをぶつけてきたのだろう。

「俺からも頼むよ」

「うゝん……まあ俺自身は構わないけど、その前に念を教わった人居るだろ」

「うん。心源流拳法の師範代のウィングさんって人から習ったよ」

「ならそのウィングさんとやらに一言断るのが礼儀って奴じゃねえか？いきなり師匠鞍替えってのは流石にな」

そう言われると二人は納得したように顔を見合わせた、早速連絡して聞いて見るととベランダに出つつ携帯を取り出すゴンとキルア。

「んでレオリオ、お前どうする？」

「俺も是非とも習いたいのには山々だけど大学受験に向けての勉強があるからなあ、受験が終わったら頼みてえな」

「おう解った」

「シャネル許可取れたよおゝ！！」

「早いなおい!？」

「なあクラピカ、お前納得してくれてるのか」

「……正直言うともあまり納得出来ていないかもしれないな」

真夜中、ヨークシンの夜景を見るには絶好の時間にベランダに出ているシャネルとクラピカは鋭い瞳をしたまま話し合っていた。蜘蛛打倒を誓った者同士の会話。言葉に答えるクラピカは、柵を精一杯の力で握り締めながら耐えているようにも見える。

「例え、力が足りていなくても戦いたい……蜘蛛を、この手で捕らえたい……!!その思いでいっぱいさ」

「……………」

「だが……私は師の言葉が無碍にするほど愚かじゃない……私は誓ったのだから、シャネルと一緒に蜘蛛を打倒すると」

クラピカの復讐心を押さえつけているのはシャネルと言う大きな存在。自分を支えると宣言し共に歩んでくれると言ってくれた人が居るからこそ、自分の力量では勝てないと言った師匠の言葉を信じ自分を押さえ込んだ。

「私は、もっと強くなる。そして、必ず蜘蛛を……!!!!」

「クラピカ」

——我慢など出来ない。

「なんだ、師匠？」

——言うべきなんだ。

「俺はこれから、蜘蛛の一人と戦いにいく」

——支えたと決めた人物に、隠してはいけない事実なのだから、言うべきだと思う。

「なっ!!?」

「お前も、来るか」

衝撃的だった。夜に吹く風が頬を撫でた時、クラピカは目を見開きシャネルに驚愕の表情を向けていた。

「な、何故……私に、言うんだ……!!?」

「言うべき、そう思ったからさ。蜘蛛の事はお前に言うべきだと、な」

「……!!先程まで、我慢出来ていたのに……!!これでは、我慢、出来ないじゃないか……!!!!!!」

先程と打って変わってクラピカの目の色と感情が一気に乱れていく、瞳は緋の目隠す為にコンタクトをしているのに色の変化が見えている。震える身体を抱き締めてなんとか押さえようとしているが溢れ出す激情をコントロール出来ない、誰もが解る程。

「クラピカ、付いて来い。蜘蛛との、戦いをその目に焼き付けるん

だ」

「無論だっ……！！！」

ベランダから飛び降りると建物の屋上から屋上へと飛び移るように走り出しヨークシン郊外の荒野へと目指す。この激情を押さえる為に、蜘蛛と言う集団に鉄槌を下す為に……。

「——良い月だぜ……0時まで後30分……」

荒野に立つ一つの影、夜の帳を照らす月を見上げる男は刻々と近づいてくる約束の時間に興奮するようにオーラが少しずつ沸き立っていた。

「来いシャネル……！！全力で、やり合ってやるぜ……！！！」

蜘蛛は叫ぶ。久しく会い見えた強力な力の持ち主に。その人物と、全力の力比べがしたいと叫ぶ。

019 話

月が煌々と輝く真夜中、時間はすでに11時58分を過ぎ間もなく0時となろうとしていた。誰もが眠っていた李眠気を飛ばすためにコーヒーでも啜っている頃だろうか、そんな闇の中の荒野に立ち続けている大男、ウボォーギン。闇の帳が落ちた暗闇の中でも真っ直ぐと前を見つめ続けている、強すぎる眼光は闇に決して飲まれたりしていない。

「時間か」

遂に時間となった0時。旅団一時間に煩いと男として有名なウボォーギンは時計など見なくても時間の確認など容易い。事実時計は0時に指針を刻んでいる、約束の時間になったが待ち人の姿は見えない……いや見えた。ゆっくりと歩いてこちらに向かっている自分より少し小さいほどの体格の男が。その姿を見たとき思わず口角上がってしまう。

「よお……待たせたか、ウボォーさんよお」

「いやちょうど良い時間だ。だが約束の時間から2分オーバーだ、守るのがマナーってもんだろ」

「盗賊にマナー守れとか言われたくねえよ」

言葉を吐き捨てつつ左手に持った酒瓶のワインを一口飲んだ。もう一本、右手に持っていたものをウボォーへと投げた。かなり上物のワイン、飲んでみると上品で美味な味に笑みが零れる。

「良い酒だろ、俺が持ってる酒の中でもトップクラスに良いもんだ」
「こいつはいいなあ……戦前酒には良さ過ぎる物だなおい……!!」

「良い酒飲んで良い気分で戦う……さあやろうぜ」
「おうよ」

飲み干した瓶を地面に叩きつけ割った、同時に腕相撲の時のように全力でオーラを放出し全身をオーラで包み込んでいく。

「行くぞ、ゴラァアア!!!!」
「こっちの台詞だああ!!!!」

獣の咆哮とさして変わらぬ声を上げるウボォーは地面へと腕を突っ込みアッパークットのように岩を巻き上げてシャネルへと飛ばす。回避すべき物だろうがシャネルはそのまま突っ込み岩など無視するように前進し続け左腕をそのまま突き出した。軽くステップを踏み左腕の射線上から退避するが右腕の皮膚が切り裂かれ血が滲み出る、それでシャネルの一撃のやばさを見抜いたのか続く右腕の一閃は全力で回避する。

「（俺の肌に傷をつける一撃、あいつの攻撃は両腕から繰り出される斬撃に近い突きと切り払いか。否あのパワーだ、パンチや蹴りだって威力は十分な筈）なら、隙ありだっ!!」

「鉄塊!!」

攻撃後に出来る隙、そこを突いたウボォーのカウンター。オーラが込められた右腕のストレートがシャネルの脇腹へと突き刺さる、食

らったシャネルは僅かに苦しげな息を漏らしその威力に僅かに吹き飛ばされるが直ぐに止まり構えを取り直す。だがウボォーは解せないという表情を浮かべている。

「（俺の拳が直撃して無傷……！？奴は放出系と言っていた、幾ら強化より放出系といっても俺の一撃は防御しきれない筈。それに今の感触……）てめえ、何者だ」

殴った時に感じた感触、鋼鉄でも殴っているかのように硬さと感触だった。殴られる瞬間に筋肉に力を込めつつオーラで防御してもそこまで硬くする事は強化系位しか出来ない筈、ウボォーの疑念は更に深まっていく、本当は強化系なのに放出系だと言ったのだろうか。この為に……。

「不思議か？安心しろ、俺は……放出系だ、ナァアイフツ！！！」
「ッ！！！」

ウボォーの疑問を晴らすかのような大声で放った一撃、ナイフの念弾が一気に放たれる。だが単純な攻撃に回避は余裕だったが背後にあった岩の壁に深々と傷が入った。

「（こりゃマジで放出系みてえだな、強化系も鍛えて防御用の能力を開発したって所か……バランスの良い能力開発だ）」

本来の系統の威力に感心しつつもシャネルがわざと自分が放出系だと証明する為に避け易く、一直線の攻撃を行ったのは理解した。とことん負けず嫌いなようだ。ならばそれに負ける訳にはいかない……

……！！

「なら俺も行くぜ……全開だああああ！！！！！」

腕を大きく広げて叫びながら抑えていたオーラを全てを解き放った。腕相撲の時よりも強いオーラの波動にチャンネルは気づかぬうちに口角を上げながら自分も前回のオーラを展開していた。あの時と違い自分は十二分に食事をしてきた、オーラの節約なんてみみっちい事など言わずに戦える……！！

「おおおうらああああ！！！！！」

「おおおおお！！！！！」

「……っ」

最早人間同士の戦いとは思えぬ絶叫と上がる土煙に爆音、戦争でもしているのかと錯覚さえしそうな規模の戦いに驚きを隠しきれない観戦者。唯じっと、“凝”を使って戦いを見続けていた。

——クラピカ、別に我慢出来なくなったら戦いに割って入ってきても構わない。だが、最低でも最初は見てる。

「これが、旅団……！！！」

チャンネルがそう言った言葉の意味が解った気がした。具現化系と解った時に想定した強化系を極限にまで極めたものとの戦闘。それが

今日の前行われているが自分の想定が如何に甘かったのか思い知らされる、対旅団専用能力と六式を学んでいる自分なら勝てると思っていたが、それだけでは甘かった。

「うらああああ！！！！」

「鉄塊・砕！！！！」

また、普通の人間だったら一瞬でミンチになってしまうほどの一撃同士がぶつかり合った。相手に命中さえすれば多大なダメージとなる必殺の一撃、自分はあれを受けて無事に入れられただろうか。絶
エンペラータイム
対時間中であつたとしてそれで増強された強化系の防御力と鉄塊を組み合わせたとしてあの一撃で耐えられていただろうか、恐らく無理だろう。

「私は、まだまだ弱い……！！！！」

シャネルの言葉を借りるとすれば、自覚し悔いれるだけマシ、といえる。それでも旅団を捕らえてクルタ族の無念を晴らしたいと冷静さを欠いて戦いに首を突っ込むよりはるかに良い。

「嵐脚！！！！」

「おっとお！！！！」

眼下で広がっている戦いに無念の炎に強くなりたいという気持ちをくべていく。炎は更に強くなっていく、その無念を糧に更に先に進む事が今の自分に出来る一番のことなのかもしれない。

「たくてめえは面白い事ばかりだなあ！！！！」

「そりやどうもねえ！！！！剃！！！」

「また消えやがった！」

剃による急加速で姿が掻き消える、目で捉え切れない。"円"を使用して直ぐに認識出来るようにするのがいいのかもしれないがそれは危険な行為でしかない。"円"に防御力など無いに等しい、そんな状況で近接戦を挑める念能力者は達人級か唯の馬鹿。旅団の仲間のノブナガはそれが出来るほどの使い手だが、ウボォーはそれができない。よって取れる選択肢は"堅"！！

「指銃！！ってえな！！」

「そう簡単にやれると思うなよ！！！」

剃の高速移動でウボォーの前方から強襲したがウボォーの"堅"と肉体の頑強さで指銃は弾かれる。左手の指がビリビリと痺れを感じた時、シャネルの腹部に鋭く重い一撃が突き刺さった。

「ビックバンインパクト超破壊拳オ！！！！」

「————鉄塊ッ！！がぁはぁっ！！！！」

余りの切り替えしの速さに食らった一撃、それはウボォーの必殺の一撃。念能力でもある超破壊拳、念を込めた攻撃だけというシンプルな物。だがそれ故の強さを誇る技、その破壊力は小型のミサイルにも匹敵し得るほどのパワーを持つ。全力の一撃に確かな手応えを感じた、最低でも骨が何本も逝った感触音が伝わってきた。

「今度こそ砕いてやったぜ！！俺の本気の超破壊拳を生身で止められた奴はいねえ！！だが褒めてやるぜ、お前、身体を鉄のように硬くしつつオーラで全力で防御したな、あの一瞬で。普通なら絶命してる筈なのに、それを骨の数本で留めてるんだからよ！！」

「ぐっがあっ……ふっ！月歩！！」

吹き飛ばされながらも血を吐き出し空中を蹴って体勢を立て直しながら地面へと降りる、だがダメージはかなりでかい。肋骨の数本は間違いなく逝っている、激痛が身体を貫いている。だが、まだ戦えなくなるほどのダメージではない。

「……すうううはあああ……今度は俺の番だ、ううううおおお……！！！！」

身体のを念を全て腕へと集中、同時に念弾を生成しそれを腕の中へと仕込む。痛みが邪魔するがそんな事どうでもいい、今出せる全力を出さなければこいつには勝てない、ならやれるだけの事をやるだけ。

「男なら……どんとやれた……！！1、2、3、4、……！！！！」

「（オーラがさっきより増えてやがる……全ての念を腕に込めてるのか！！面白れえ……）燃えてきたぜ！！俺の全力の超破壊拳とお前の一撃、どっちが強いかわかってやろうじゃねえか！！」

迫りくるウボオーギン、腕へと念を込め続けるチャンネル。振りかぶる拳、そしてそれがチャンネルに炸裂しようとした時、腕が通常よりも二回りほど大きく膨張した。

「5っ！！！！5連釘パンチイイイイ！！！！」

「ビックバンインパクト
超破壊拳オオオオ！！！！」

互いの全力の拳がぶつかり合った、瞬間的に周囲を襲ったのは互いのパンチ力で発生した衝撃波。爆風、周囲の砂塵と岩を一気に弾き飛ばす衝撃波、その後に襲ってくるのは

「ぐっ……があああああっ……！！！」

シャネルの悲鳴にも近い痛みを耐える絶叫。念を集中させていた右腕でさえウボォーギンの全力の一撃に悲鳴を上げている。筋肉断裂、骨は罅割れていている。右腕を抑えつつも前を見ると同じく腕が痺れているのか抑えつつも立ち続けているウボォーの姿があった。

「俺の方が、勝っていたようだな……シャネルウ！！」

「ああ……一撃、だとな！！！！」

「何……（ビギイ！！！！）あっ！？（ビギイ、ビギイ！！！！）がああっこりゃ一体！！？」

何を言っていると言おうとした時に走った衝撃と痛み、先ほどぶつかった右腕に強い痛みが走っている。

「2、3……！！釘パンチ……パンチの前に念弾を作り出し腕の中に込めてパンチと同時に打ち込む技」

「念弾を、中にだとお！！？」

「仕込む際はいてえけどその分威力は抜群……！！そして、数が多

ければ多いほど念弾は相手の体内で爆ぜて奥へと突き刺さっていく!!」

「それでかっ!!!（ビギン!!!）がああああ!!!」

これがシャネルの必殺技、釘パンチ。腕に込めた念弾を釘を打ちつけるように同時に打ちつけて放つことで、威力が奥まで浸透し内部から相手を破壊する必殺技。現在では5連しか出来ていないが鍛錬を積みめば一発一発の威力も更に上がり、連弾も可能になる筈……!!

「5……吹き飛びなウボォーギン!!!」

「（ビギン!!!）がああああ!!!」

最後の念弾が炸裂しウボォーギンは岩壁に突き刺さるように吹き飛ばされた、凄まじい威力。自分の超破壊拳と遜色の無い威力に驚きつつ地面に没する。

「くそ……右腕が、全然言う事聞かねえ……!!!」

「ったくこっちもだ、身体がこんなに重くなったのは何時以来だ……!!!」

「……!!!」

「ッ!?!」

顔を上げてみるとそこには大量の血を吐き、身体をふら付かせてはいるが立ち上がっているウボォーギンの姿があった。自分の全力の一撃を食らってまだ立てるといのかこの男は……!?!だがウボォーギンは携帯のようなものを取り出し何かを確認すると、舌打ちをしてそのまま歩き始めた。

「おい、てめえ……どこに行くつもりだあ……!!!?」

「団長からの呼び出しだ……まったく楽しい時間だったのによお……だが逆らう訳にもいかねえ、元々この時間までには終わらせるつもりだったが、楽しすぎて時間オーバーしちゃった」

「おい、俺を、やらなくていいのか……！！！」

去ろうとするウボオーギンを挑発的な瞳で見つめる、まだ自分は戦える。右腕は逝かれてしまっているがまだ左腕に足だってある、まだ戦える……！！

「俺は蜘蛛一、時間に厳しい男だ。お前なんかより蜘蛛の方を取るに決まってるじゃねえか、なんか言わねえと、団長がこええからな」
「……へっ」

そのまま去っていくウボオーギンにシャネルは追跡して叩きのめす気など微塵など起きなかった。正直言ってもう限界に近かった、オーラもカロリーも使い果たしこれ以上戦ってしまうとオーラが自分の身体を食らって無理矢理にでもカロリーを捻出する所だった。

「ああもう無理い……」

そのままドサッと倒れこむ。もう全力を本当に出し尽くしてしまった、もう疲労と激痛で身体が動かない。

「シャネルウ……！大丈夫か……！！？」

「お、おうクラピカア……良ければ治療頼めるかあ……？俺もう駄目、もう出せるオーラなんかねえ……」

「解ってる今治療する……！！」

癒す親指の鎖を展開し即座に治療にあたるクラピカ、時間は掛かるものの絶対時間で能力を強化すれば治療出来る。治療を受けつつシヤネルは尋ねてみた。

「なんで、割って入って来なかった？」

「……静かにしてくれ、治療に集中できない」

「俺はお前が入ってくると思ってた、感情を抑えきれずにな」

紛れも無い本音。実物を目の前にしすぐ手が届く範囲にいるのであれば幾らクラピカでも冷静さを失って戦いに割って入ってくると思っていたがそれをしなかった。賢明な判断だがそれがシヤネルは酷く気になった。

「入れる気がしなかったからだ」

「……？」

「私は、まだまだ弱いとあの戦いで実感させられた……だから、念を強めてから戦うよ」

「そっかつ……」

どうやら弟子は成長していたようだ……、自分が思っていた以上に。

クラピカ

「あゝあ、もう腹減ったあ……クラピカアなんか作ってくれないかあ？」

「私がか？良いだろう、クルタ族に伝わる料理をご馳走しよう！」

「おっほっ楽しみいってあいたあっ！！？ほ、骨があああああ！！！！？？？」

「ああまだ治療終わってないぞ！？もうう……世話が焼ける師匠だ」

「いってえ……まだ腕がじんじんと痺れる感覚が残ってやがるぜ……」

「大丈夫シャネル？」

「ったく、俺達に黙って旅団と戦ったんだから良い報いだってえの」

「そう言うなよキルア……巻き込んだじゃ悪いと思ったしお前らじゃ、まだ勝てなかっただろうしな」

「自分だってそうなくせに」

「一緒にすんじゃねえよ、引き分けた」

治療も終って漸く帰ってこれたシャネルだが既に昼になってしまった。ホテルで引き続きクラピカの鎖で治療を受け続けるシャネルに向けて向けられている視線はどれも痛い。理由は単純、たった一人で旅団と真っ向から対峙したから、その結果大きな怪我をしたからだ。痛い視線と言葉を浴びながらクラピカが作ってくれた食事を食べ続ける、オーラと共にカロリーも枯渇しかけていた身としては素早くカロリーを摂取するのが一番優先される。なら帰ってくる途中で食べてくれば良かったのと思うがそれほどにクラピカの料理が楽しみだったのだ。

「んで、お前らは如何だったんだよ。グリードアイランド、出るオークションに出てきたんだろ？」

「……んああああ思い出したら腹立ってきたあああ！……！」

「うおっ！？」

質問をしてみたらいきなり激しく怒りながら練をしてオーラを発散し始めるゴン、珍しく怒りの感情を露にしつつキレている。クラブカも若干驚いている、そんなゴンを放置しつつキルアが説明してくれた。

結局の所資金は集め切れなかった、だがゴンには秘策があった。競り落とした人物はそれと同時にプレイヤーを集める筈だと、セーブデータを持っている自分達ならプレイヤーとして採用してくれるのではないかと考えるだった。実際に案としては良案である、一週間にも満たない期間で約90億を稼ぐよりもよっぽど現実的で可能性としても高いとキルアの御墨付きだった。が

それは無理だった。グリードアイランドを競り落とした大富豪のバツテラに会談する事は出来たが、練を見せろと言った専属のハンターと思われる男から

『逃げ回って死ぬのが落ち』

と言われてしまい一蹴されてしまった。まだやる気があるのならオークション最終日に審査をするから来て見ろ、と挑発紛いのおまけを付けて。

「練を見せろ、って言ったのか？」

「うん、そう言ってた!!!」

「……プツ。ダァゝハッハッハッハッハ!!!」

ゴンがイラつきながらもそう答えるとチャンネルはもう堪えられない

と言いたげに大口を開けて大爆笑をし始めた。左手でテーブルを叩きつつ涙を流して爆笑している、思っても見なかった爆笑にゴンは凍りつきキルアは若干引いている。クラピカは少々頭を押さえつつ微笑ましい物を見るように笑っている。

「何が可笑しいのさ!!? 練を見せろっていうから練をやったのに!!!!」

「ヒィヒィ……ああなるほど……解った、解った……プクク……」

「ゴンにキルア、練を見せろというのはハンター間のスラングで鍛錬の成果を見せろとも言えるんだ。故にその男が言っていたのは、念の強さの集大成である"発"を見せろと言う事にもなるんだよ」

「えええっそうなの!?!」

「いやあまさかそのまま四大行の練を見せられたらそりゃ嘲笑されるわ」

唯の練を見せた場合は世間知らずのハンターだと笑われる、それがハンターの間でのスラングの練である。まあ知らなかったのではしょうがないだろうが。

「よしなら俺の師匠としての付ける指導は発って事だな」

「おう頼むぜ、シャネル師匠」

「うんお願い!!」

「おう任せとけ」

ゴンとキルア、シャネルの元で念能力の集大成、発の修行に入る。

「その前にクラピカお代わり〜!」

「はいはい」

「つつう訳で発に入る」

十分に食事を堪能したチャンネルは早速二人に修行を付ける事になった。

「発は念能力の集大成、個別の能力まあいわゆる特殊能力・必殺技を指す事になるわけだな。俺の場合は念弾を飛ばして攻撃したり、念弾その物を操ったりだな。二人の系統は、解ってるだろ？」

「俺は強化系、キルアが変化系だよ」

「了解だ。まずはどんな能力にしたいかだな、応用が利く能力であるが好ましいな。制約と誓約を課しても良いが重過ぎ軽すぎるってのが一番だ」

そう言われて早速ゴンは考え込むが直ぐに頭から煙を出してショートし始めている。まあいきなりこんな事を言われて困るのは解るが……。

「んじゃまずはどんな能力にしたいかを考えろ、クラピカは具現化系と解った時には何を具現化したかを問った。そしたら鎖が良いって言った。そんな感じにまずはどんな感じのが良いのかなあって考えるんだ」

「俺はもう考えてあるぜ」

「………兎に角すごい能力が良い」

「ちょっと漠然としすぎだな……キルアはどんなの？」

耳から煙を出しているゴンに差し置いて既にどんな能力にするかを考えているキルアの意見をこっそり聞く。ゴンが聞くとそれに影響されて自分にあっていない能力になってしまう可能性がありそれを防ぐ為。

「へえ面白いな、めっちゃ応用利くし」

「だろ？ゴンの邪魔になると拙いから他でちょっと実験してくるわ」

「おう許可する。クラピカ、一応付いてやってくれ」

「ああ行こうキルア」

と出て行く二人。ゴンはいまだに煙を出し続けている。

「わ、解らないよお……ヒ、ヒントください！」

「否ヒントってお前自分で考えるもんなんだけど……んじゃ一つやっいていこう。まず強化系、何かを強める系統だな」

「俺の何かを強める……（ブシュウウウ……）」

「……そこからあ……？」

最早論外に近い現状、発に十分入れる状態なのにどうしたら良いのか思い当たらない。解らなくも無いがこれでは修行のしようがない。どうした物か……自分はゴン達と別行動を取っていたし念を教わったウイングさんとやらがどんな指導がされたのか、どんな修行経過だったのか知り得ない。なら、本人にこれまでその師匠に習った事を実演してもらおう。

「良し解った、ゴン。俺に師匠から何を習った、それを全部だ」

「……あっうん解った！」

ゴンが見せてくれたのは纏、絶、練、発、凝。基本的な四大行であるそれらと応用技、それが教わった事。発は水見式と言う形で見せてくれた。基本に忠実で良い教え方だと思う、此処から如何それを開花させるか……少々頭を捻るとある事を思いついた。

「ゴン、今やってくれた事を全部同時にやってみな」

「同時に……うん！」

言葉通りに実践するゴンだが絶から練に入る際に戸惑った。鍊は通常の以上のオーラを生み出す事だが絶は出さない事。それを同時にやるという事が解らなかった、取り合えず凝を行う。そして身体を見て見ると目にオーラを集中しているのにまだオーラが出ているのが見えた、それさえも閉じて集中させれば全て同時に出来ると気づいた。

「そうかこうすれば良いんだ、うわっ!？」

「（気づいたか）」

練で生み出したオーラ全てを一点に、拳へと集めたゴン。これにより纏、絶、練、発、凝を同時にやった事になったが出来たと喜んだ途端にオーラがはじけ飛んでしまった。

「出来たけど少しでも集中力欠いたら解けちゃった……」

「はははっ練習すれば良いんだよ。強化系の能力者は身体強化とか威力の増強を計る奴が多い、俺が戦った旅団のウボォーって奴も拳にオーラを集めたパンチだったからな」

「へえそうなんだ」

「そもそも強化系ってのは攻守のバランスが一番高い。故に。単純に拳に凝をやって殴っただけでも十分な必殺技になる」

「成程お……よし、シャネル。俺、これをずっと練習してみるよ！！」

「おう良いやる気だぞ！」

その後、順調に修行をしていくゴンとキルア。ゴンは全てのオーラを拳に集めて攻撃する技を練習し、キルアはオーラを電気に変換する技を修行し続けた。そしてオークション最終日に行われた選考会。そこには面白そうという理由で参加したシャネルと個人的に興味があるというクラピカも参加し見事4人とも合格した。

021話

「手酷くやられてんなあウボォー。そんだけの相手だったのか？」

「右腕粉碎骨折、筋肉断絶、神経も酷くやられてるねこれ。ウボォー、オーラを操作して治癒高めさせるからアンテナ刺すよ」

「おう頼むぜ」

幻影旅団アジト。シャネルとの1対1との戦いの後アジトに戻ったウボォーギンは団長たるクロロに遅刻の理由と身体の大怪我の理由を説明しながら治療を受けていた。メンバーの殆どが一瞬目を白黒させていたのが本人としては少し面白かった。仲間の一人であるシヤルナーク的能力でオーラを操作され治療中もその目はとまらなかった。

「ウボォーギン、随分と満足そね」

「あんだけ興奮した上で楽しいのは私怨のリベンジマッチ以外じゃ久しぶりだったぜ……もう一度やりてえ……！！！」

「へえ……俺もやってみてえな」

珍しく相手をかなり賞賛する言葉に自分もシャネルと戦いたいと言う声が上がりが始めた、何よりも強く　ただ強くと言うのを心情としている彼自身の言葉と此処まで傷つける男に興味が沸いた。だがそれにウボォーギンは反論した。

「てめえらは手え出すなよ？俺の獲物だ……あいつだけはな！！！」
「随分と気に入ってるな、ウボォーさん」

「へへへっ当然だぜ、ああ。あのときの本気の一撃……それを打ち返してやりてえな!!」

唯純粋なりベンジへと燃え上がらせている感情、一対一のタイマンだった以上に視力を尽くした戦いだったのが気に入ったのだろう。

「……俺も、是非会ってみたいものだな。そのシャネルとやらに」

クロロールシルフルを含めた全員。シャネルへの興味を示し、ウボオーギン、リベンジへの闘志を燃やす。

「んでお前らも行くのか？」

「ああ。私もグリードアイランドに興味が沸いてな」

「同じく。面白そうだ」

「ホント気楽だな……」

オークション最終日、シャネルとクラピカはプレイヤー選考会に挑むゴンとキルアに同行していた。数多くの人間が席につき、今か今かと選考会始まりの時を待ち続けていた。4人仲良く席につきつつ待っているとマイクを持った黒服が壇上に上がって声を出した。

「皆さんお待ちいたしました。それではこれよりグリードアイランドプレイヤー選考会を始めたいと思います、このゲームに参加するには念能力が必要となります」

黒服が語るのは選考会のルール、各々の念を見せそれを審査され合

否が決まるという単純明快なルール。そしてその合否を決めるのはバッテリー氏に雇われているマネーハンター、ツェズゲラ。下ろされたシャッターの内側で念を見せて決められる。そして合格人数は32人。それだけを説明するといきなり審査が始まった。

「説明ってあれだけか……？」

「そうようだな、最低限情報は出した。後は自分で考えろって言う所だろう」

素早く動き審査に向う者。その後が続いている者。そして席に座ったまま動かない者。現在この3グループに分かれている、キルアは如何するべきかと考える、隣では顎に手をやり同じように考えているクラピカに目を瞑り後頭部に手を置いてリラックスしているシャネルにじっとして集中しているゴン、正にそれぞれが違う行動を取っている。どれが正しいと思ってしまいが一旦思考をリセットする。

「（まず合格者は32名、合格者が揃った時点で終了。でもそれならまだ残っている時点で32名も出たら、その他の奴は合格者よりも下って事になる。俺が主催側だったら如何する、32名もこの場で出さずに……）そうか、ここでは32名も合格者は出ない！」

「私も同じ意見だキルア」

どうやらクラピカも同じ結論に達したのか意見を肯定した。今後有望な応募者が出た時の為に、保険として空きを作っておく。だから今回、全員はしっかりと審査する。

「ゴンにシャネル、解っていたのか？」

「いいや。でも一応全員見て置きたいって言うのが人情かなあって思ってる」

「俺は何となく待ってても良いかなって思ってた。後残り物には福があるっていうしな」

そのまま様子を見続けているといよいよ人数も少なくなってきた。遂には自分たちだけになってきた。キルアとゴンは先に行き戻ってこない、まああの二人が落ちるとは思いにくいが。

「先に行くぞシャネル」

「おう、待っててくれ」

ハイタッチをする師弟、クラピカはそのまま壇上へと上がりシャッターの奥へと消えて行くがシャネルは全くと良いほど心配などしていない。

カーテンとシャッターで仕切られ外からは完全に見えなくなった壇上。そこではツェズゲラが待機し次の審査希望者を待ちかねていた。

「では、練を見せて貰おうか」

「壁を傷つけても？」

「問題ない、存分にやるが良い」

ツェズゲラの許可を得たクラピカは右手の鎖を具現化し人差指の鎖を壁へと勢い良く伸ばす、真っ直ぐに伸びた鎖は深々と壁に突き刺さった。その鎖の威力に驚いているツェズゲラは次の瞬間に自分を取り囲んでいる鎖の存在に気づいた。しかもその鎖は先程壁へと伸

ばした人差指の鎖、壁へと伸ばし壁に刺さった瞬間に消して瞬時にツェズゲラを取り囲んだ事になる。

「こっこれは……！！素晴らしい、文句無しの合格だ」
「解った」

合格者が入る部屋へと進んでいくクラピカを見送るツェズゲラはあの若さであれだけの強さを手に入れる事に驚きつつ心を僅かに乱すのであった。そして次に入って来たシャネルの審査に入った。

「さあ練を見せてくれ」
「おう、ふう……いただきます。はあっ！！！！フォーク&ナイフ！！！」

開始の合図を聞くと合唱をし瞬時にフォークとナイフの念弾を生み出し空中に浮かばせる。そしてそれを腕の動きにシンクロさせるように操作して見せ、止めに壁の一部をナイフで切断しそれをフォークで刺してツェズゲラの足元に置いて見せた。

「これで良いか？」
「いいだろう、合格だ」

こうしてゴン、キルア、クラピカ、シャネルの4人も合格者となりグリードアイランドをプレイする事となった。

「んでここがマジでゲームの中な訳？到底信じられねえな」
「あっシャネル！」

「おう遅くなって悪かったな」

遂に始まったグリードアイランド。ゲームの内へと入ったチャンネルは説明を聞くと先に入っていたゴン達との合流を果たした。見渡す限りの大平原、そこにポツンと立てられた建物。此処がスタート地点で此処からゲームをプレイするのだろうか

「見られてるな」

「やっぱり解る？」

「当然。だけど監視してるって相手に解っちゃ駄目だろ」

「全くだ。未熟にも程がある」

こちらへと注がれている視線は約二方向から来ている、そして前のプレイヤーもその方向へと進んでいる。そちらに街などがあるからだ、見張りは体力と気力を消耗する。単独でも集団であっても直ぐに休める所で見張るのは悪くない手。一先ず監視の気配がする一方向へと向ってみる事にする。

「にしてもマジでここゲームの中か？全く実感無いな」

「だよね、普通に現実の世界って感じ」

「それを感じさせないように作られているのかもな」

「風も土も同じ感じ……」

本当にゲームの中に入るのかどうかと言う談義をしつつもチャンネルは円を展開し警戒をしつつ歩いている、そして円に反応。上から何かが来ると感じる。

「上から何か来るぞ！」

声を張り上げると同時に全員は後方へとジャンプすると、そこへ光の筋が落ちてきた。そこにはカードをしまうバインダーにもなる本を展開し笑いながらこちらを見て笑って入る男がいた。

「（今のは……？）」

「（放出系の念能力か？）」

「くくくっ……君たち、ゲーム始めたばかりだろう」

警戒心を抱きつつ相手を注視していると男はバインダーにカードを一枚嵌め込みニヤニヤと更に笑う。

「ゴン、キルア、クラピカ、シャネルね」

「俺達の名前を……カードの効果か」

「さあ如何だろうね？（スペルカードも知らない、初心者決定だな……狙うは……餓鬼！）」
トリス オン
「追跡」使用！キルアを攻撃！！」

一枚のカードを持ち、呪文のようなものを叫ぶとカードが光となって対象として指定したキルアへと一直線に向って行く。一同は散開するが光は走るキルアを追い続ける。

「ヒヤハハハハ！！無駄無駄ア！ゲームのスペルからは逃げられねえよ！！」

「なら……！！」

「ッ！？」

馬鹿笑いをしている男、相手が初心者だと思って油断したのか迫ってくるシャネルに反応が遅れた。勢い良く伸ばしてくる豪腕をギリギリで回避し素早く身を翻して距離を取る。そんな相手に対してシャネルは合掌し箸の構えを取る。

「お前を直接狙えば良いじゃねえか！！逃がさねえぞ！」

「（こいつはええ！！まずい、絶対にやばい！！）」^{リターン}再来「使用！マサドラヘ！！」

箸を繰り出そうとしたシャネルに凄まじい脅威を感じたのか男は顔を青くしながら新しいカードを一枚取って唱えた。男の身体はやってきた時のように光に包まれて凄まじい速度で何処かへと飛んで行く。流星にあれを捉えられる事は出来ず、舌打ちをして構えを解く。

「キルア大丈夫か？悪い逃がしちゃった」

「身体に変化はなさそうだしあれはしょうがないんじゃないかね？また空飛んでいくなんて予想外だし」

「放出系の能力者、と言うわけではなさそうだな」

「所謂カードの魔法、って感じかな？」

「その認識が一番正解っぽいな。トレースにリターンか……」

先程の男が唱えていた魔法の名前と思われる物。初心者にもかける事を躊躇しない簡単な物と取るべきだろう。

「名前からして相手の位置とかを探ったりするのがトレース、どこかに戻るのがリターンってのらしいな」

「それだったらキルアの身体に影響は無いのかな？」

「そう思って良いんじゃないか？あくまで相手の様子を探るならな」
「しかしそう決め込むのは危険だな、私たちには情報が無い。まずは街で情報の収集をするのが先決だ」

クラピカの意見が最もだと全員が賛成し街へと目指す一同。

強欲が渦巻く島、世界一危険なゲーム『グリードアイランド』、彼らはこの師までどのような冒険を繰り返し広げて行くのだろうか……。

022話

懸賞の街 アントキバ。

突如現れた敵プレイヤーを取り逃したシャネル達は情報を得る為に感じる視線を頼りにその方向へと向っていた。そしてスタート地点である草原地帯を北に進んだところにある都市アントキバへと到着した。街にはそこら中に張り紙などがされており、どれも懸賞の情報ばかり。

「これ全部懸賞!？」

「すげえ数だな……いなくなった犬を探してください、報酬として」
呪われた幸運の女神像"を差し上げます。なんか、逆に不運起こりそうだな」

「兎に角情報の収集を兼ねて懸賞のチャレンジしてみるのが良いんじゃないか？月例会大会と言うのもやっているみたいだしな」

クラピカが指差す先には大きな看板に示されている情報、月毎に行われている大会について。今月、即ち9月は15日に行われるじゃんけん大会、賞品は"真実の剣"なるアイテム。

「重要なアイテムだろうなきっと、月例って事は年に一度しかその大会にはチャレンジ出来ない訳だし」

「他のプレイヤーも居るみたいだしチャレンジする価値はありそうだな」

「ねえだったらあれやってみない？」

ゴンが指差す先にあったのは大食いチャレンジ。どうやらゴン自身も空腹気味な様子、それはこの場の全員同じなようで全員でそれにチャレンジしてみる事に。結果は見事に大成功、全員が大盛スパゲッティを完食し御代は無料となり賞品のカードである「ガルガイダー」もゲットした。

「1217のF-185。如何いう事？」

「おゝやカード初めてって事は外国の人？」

「うん！」

「そうかならカードは初めてね。左の数字はカードナンバーで、右の数字は入手難易度とカード化限度枚数ね！」

レストランの店主から説明を受けるとゲームを始めた際に受けた説明を思い出す、それを当てはめていくと情報が見えてくる。

「因みに難易度はSSからHあるね」

「って事はランクFは所謂コモンカードって事か」

「だろうな」

キルアは低レアなカードな事に若干がっかりしている、まあ料理を無料で食べられた上にカードを入手出来たのだから良いと思った方が良いでしょう。それに店主からカードに関する説明を受けることも出来たのだから得られたものは大きい。

「取り合えずまだ情報収集するか、一旦別れるか」
「だな」

そうして情報収集へと繰り出す一行だが街全体を揺るがす凄まじい揺れと爆音が巻き起こった。

「何だ！？地震か！？」

「にしては爆発音も聞こえたよ！？」

「あっちの方に人だかりが出来ているぞ！」

「行ってみよう！」

一角に出来ている人だかり、其方の方へと駆け人混みの中を書き分けて進んでいくそこにあったのは、腹から血を流して死んでいる男の姿だった。しかもその男は自分達と同じように選考会に参加していたプレイヤーだ。

「何があったの？」

「突然腹が吹き飛んだ、爆発したみたいにおおくな！！」

「……駄目だ、即死している」

「そうか……」

念の為確認したクラピカが首を横に振った、既に絶命している。命の危険を孕んでいるゲーム、正にその通り。実際に人の命が消える可能性が高いゲーム、だがこの男が死んだ原因が対何による物なのか謎。

「まさか俺が掛けられた奴って……」

「解らないな……情報が足りなすぎる」

「安心しな、このゲームに人を傷つけるようなスペルは無い」

困惑する4人に語りかけて来る一人の男。警戒するが男は両手を上げ交戦の石が無い事を示しつつ自分もバッテリー氏の依頼でゲームをプレイしている事を語った。その男が言うにはゲームのクリアは非常に難しく今同志を募って居るらしい、仲間になるかどうかは話を聞いてからでもいいからというので彼について行き話を聞く事にした。

まず、先程の男が死亡したのはゲーム内で使えるアイテムカード、所謂スペルの類の物ではなく念能力によるもの。スペルは40種類、キルアが受けたのは調査型でシャネルの予想通りに位置が常に把握されると言う物らしい。

カードの入手方法は自力探索、交換、強奪の3種類だが現在強奪を選ぶプレイヤーが続出している。理由はカードが入手難易度、限枚数のシステム。大人しくカードを渡さなければ殺す、そうすれば指輪も消滅するがその分カード出来る数が触れるからとの事。そしてその中でも最も過激なのか相手を爆殺するような手段を取るプレイヤー、爆弾魔と呼ばれている者。

そして仲間になるかと問われたがゴンが真っ先にそれを拒否しシャネル達もそれに続く形で断った。自力でプレイすると宣言して……。

「あああムカツクうう!!!」

「まあ落ち着けてゴン、正当にゲームやってる連中だ」

「だけど囲んでこっち馬鹿にするみたいにカード奪って行っちゃっ

てええ!!!」

情報を手に入れた後月例大会に参加し見事にキルアが優勝し指定ポケットカード、No.83「真実の剣」を入手したがその後にカード狙いの他プレイヤーのスペル攻撃を受けて見事にカードを奪われてしまった、それにゴンは酷く腹を立てている。

「落ち着けゴン。さてと、これからの予定だが私はスペルカード入手を目標に魔法都市マサドラに行く事が一番だと思う」

「意義無し！俺もスペルでバビュンって感じに移動したい!!!」
「さっき「ガルガイダー」のカード売ってみたら全部で12万ジェニーだったしそれを元手にして食料と水そして地図を買って準備を整えよう」

懸賞で手に入れたカードを元手に準備を整え地図を購入、地名などが詳しく記入された地図は65万と高額だった為買えなかったので2万の安い地図を購入してみたが全く解らなかった。そこでアイテムや呪文の情報も購入できるトレードショップでマサドラの位置を購入した。その途中には山賊の住処に怪物が住む岩石地帯を越えなければ行けない事が解った。

「俺怪物みたいよ！どんなのかなぁ!？」

「全く気楽だなゴンは」

「まあポジティブなのは悪い事じゃねえって、んじゃ行きますか」
「待ってください!」

と早速出発しようとした時、背後から呼び止められた。そこには同

じく選考会にいた金髪ツインテールの少女が居た。

「お願いです、私も一緒に連れてって貰えませんか!？」

「ああごめん無理、邪魔だから」

ばっさり即答でキルアが拒否した。

「おいおいもうちょい言い方ってもんがあるだろうに……」

「いやだって邪魔だし行くぜゴン」

「キルア……」

「クラピカ先行っててくれ、俺フォローしてから行くから」

先程から硬直し口角をヒクヒクとあげている少女、3人を先に行かせて留まったシャネルはすまないと謝罪の言葉を発する。すると少女はハッとしたように顔を上げた。

「悪い、アイツ悪い奴じゃないんだけどさっきカード取られてちょっとピリピリしてるんだ。申し訳ない」

「い、いえそういう訳なら……（あのがきや何時か泣かす……!!しかし……）」

「そう行ってくれると助かるよ」

軽く笑っているシャネルに少女は救われた!と言いたげな笑みを浮かべているが

「（かぁゝ良い男だわさ!鍛えられている筋肉にこの体格、そしてこの優しい性格にまぶい笑顔!……ゴクリ、良い欲しいわさ……」

…色んな意味で……………!!)」

内心は色んな意味であらぶっていた。

「多分あいつ何言っても拒否するだろうしこっそり付いてくるなら良いぜ、何かあったら俺がフォローするから」

「有難うございます!あ、あの私ビスケット、ビスケット・クルーガーと申します!!」

「俺はシャネル、まあ宜しくねビスケちゃん。んじゃ俺行くから」

軽く頭をなでるとそのまま3人を追って走り出すシャネル、そして頭を撫でられたビスケはぐふ、ぐふふふふっと気味の悪い笑いを発し始めた。周囲の人間はそのあまりの気味の悪さにドン引きしヒソヒソ話したり、奇異の目で見るのであった。

「良いわさ……良いわさ……………!!頭を撫でた時の感触から本当に鍛え抜かれた筋肉だって解ったし更にあの撫でられ心地……絶対に、手に入れてやるわさ……………!!」

シャネル、短い間に幻影旅団と謎の少女ビスケに目を付けられる。

「へくシヨン!!風邪引いたか……………?」

「それはないな」

「ないね」

「ないな」

「おいてめえらそれ如何いう事だこら」

023話

シャネル一行は旅支度を済ませると早速スペルカードが入手出来る
と言う魔法都市マサドラに向かう為に走っていた。マサドラに辿り
着く為にはまず北へ80キロ、一山越えた先にある湖へ。そこから
北西へと進んで行けばマサドラに着けるといいう情報を手に入れてい
る。その通り一同は走り続けている。

「はぁ〜やく山賊来ないかなぁ〜♪」

「見てみたいよなぁやっぱゲームなんだから正に山賊！って感じか！？」

「二人とも物騒だぞ、危険なら回避する方が良いだろうに……」

「案外下っ端気質で太ってて、でがすって言葉の最後に付けてたり
な」

「なんだそれ、何処のキャラだよ？」

軽口を叩きつつ走り続けていると既に日も傾いて夕暮れになって来
ていた。森林地帯を進み続けるが全員に疲労の色など全く出て居な
い、一応3人の師匠なので先頭を切って走りかなり飛ばしているが
しっかりと付いてきていていっている。ビスケも自分達の後ろ10メー
トルほどをぴったりと付いてきている。

「如何するあの子、この先山賊居るんでしょ？」

「俺が付いてくるなら好きにしながら言ったんだよ。それにあの子
だってツェズゲラに認められてる念能力者だぞ？」

「そうだな、シングルの称号を持つマネーハンターツェズゲラ。彼
に認められるだけの力を持っている、それは確実」

「そう言う事だぜゴン、下手に気にする必要はねえって」

ビスケを心配するゴンだがそれは間違っているという指摘を受けて納得する。彼女とて自分達と立場は同じなのだから。

「（其れに……なんか違和感を感じるんだよね）ちょっと飛ばすか？」

「異議無し」

「修行も一緒にしなきゃね！」

「よし、ペース上げるぞ」

そのままペースアップして森林地帯を駆け上がって行くが途中で方々から視線を感じ緊急ストップする。既に太陽も落ち夜の帳がそこから一体を包んでいる、森林地帯と言う事もあって普通の夜中よりも暗く視界も悪い。その中で木々の背後に隠れつつ此方を注視する視線達、間違いない山賊達だ。

「戦闘準備って聞くのも野暮か、来るぞ」

「何時でも！」

「何処でも！」

「ロクン」「」「助けてください！！お願いします！！」「」「」
口、…………ハッ？」

飛び掛ってくる山賊達に掛け声を上げて戦いに入ろうと思った直後、山賊達は自分達を囲うように土下座を助けを請うように言葉を上げつつ酷く咳き込んでいる。山賊の想像外の行動に目を白黒させつつ互いに顔を合わせてしまった。

「んで付いて行った結果がこれか」

「んもう……キルアがゲーム語で要求聞けばアイテムとか情報とかくれるって言うから少し期待したのにこれだよ」

「俺のせいか!」

「ゴン落ち着くんだ、幾らキルアの口ぶりに乗ったとしても現状は変わらない」

「おいクラピカまでもか!?俺が、俺が悪いのか!?」
「冗談だ」

山賊達の土下座に目を白黒させてしまったが事情を聞いてみるとどうやら島の風土病に掛かってしまい苦しんでいるとの事。ゲーム的に考えれば要求してくるアイテムなどを差し出せばアイテムや情報が得られると踏んだキルアは渡しても良いと判断した。ゴン達にしても困っている人を助けるのは吝かではないので要求を聞き薬の代金として7万ジェニーを提供した。

『いやぁ喜んでいただければ』

『あっ代わりに情報とかアイテムとか貰えない?』

『『『『……ゴホゴホッ!!!!!!』』』』』

何を聞いて咳き込んで誤魔化すばかり、そして起こるのは服、食料の要求。幾らゲームの設定で苦しんでいると解っていても目の前でこうして苦しまれては断りづらくそのまま持っていたカードや服など全てを渡してしまった一同。今はシャネルが空間倉庫バックの中から出した予備の服をサイズ調節などして着ている。

「だけど森林地帯を抜けたぜ！」

森林地帯である山を越えるとそこに広がっているのは大小様々な大
きさの岩山がある岩石地帯、情報では此処には大量のモンスターが
住み着いており此処を突破してマサドラに行くのはゲームをプレイ
するにおいてかなりの鬼門になるとの事だがこれは自分達を鍛え上
げるには丁度良い。

「行くぜ！」

「ああ待てよおい！　たく子供は元気だねえ、追うぜクラピカ」

「ああ」

先に岩石地帯へと駆け込んで行く二人を追ってシャネルとクラピカ
も入って行く。そして降り立つと同時に岩山に隠れ潜んでいたモン
スター達が一斉に姿を表した、筋骨隆々で十数メートルはあろうか
という一つ目の大巨人だ。

「いいいいい！！？」

「いきなり出たあ？！」

「おいおいマジか山よりでけえ！？」

「こ、これがモンスターか！？」

『ウオオオオオオオオオ！！！！！！！！』

一つ目の巨人は持っている棍棒を振り回し叩き潰そうと迫りつつ攻
撃を仕掛けてくる、それを避けると続けて振り回してくる、回避す
る際に身体が受ける風圧。直撃するとかかなり危ないかもしれない。

「このおおお！！ってありやうわぁ！？」

やられっぱなしでは嫌と言わんばかりに右腕の拳にオーラを集中させ、そのまま巨人の頭部を殴りつけた。クリーンヒットするが巨人は全く答えていないのかそのまま反撃に転じてくる。

「ダメージ無し、一撃で動きを封じるには何処を狙うべきかなキルアにクラピカ」

「目！！」

「正解っだ！！」

迫ってくる巨人の振り下ろされた攻撃を紙絵の要領で回避しつつ棍棒を駆け上っていく、そのまま瞳を殴り付ける。巨人は苦しみもがく声を上げつつ煙に包まれつつカードへと姿を変えた。

「ビンゴッ！ゴン、目だ、目を狙え！」

「解った！！うらあぁ！！！」

言葉を聞いた gon は早速近くに居る巨人の頭部に飛び乗りそのまま肩へと降りて瞳を殴り付けた、シャネルと同様に苦しむとカードとなっていきそれをバインダーへとしまう。

「はあああっ！！ふっはぁっ！！」

クラピカ人差指の鎖を撓らせてターゲットにした巨人の周囲の岩山を粉碎する、それに一瞬動きが止まった巨人の隙を付いて土煙と砕けた岩に鎖を紛れ込ませつつ瞳へと鎖をぶつけカード化させる。次

の獲物は一瞬で動きを先読みし真っ直ぐ鎖を瞳へと突き立てた。

「そおorraっよっと!!!!!!」

キルアもシャネル同様に身体を駆け上っていく、捕まえようと伸ばして来る腕に逆に飛び移り続けて相手を翻弄しつつ瞳に鋭い蹴りを加えてカード化させていく。次々と襲い掛かってくる巨人を返討ちにしつつカードへとして回収していく4人を高台で見下ろすビスケは感心するように見守っていた。ゴンとキルア自体は動きに無駄が多いが、シャネルとクラピカは全く違った。

「あの二人は動き自体に無駄が多いけど中々……だけどあっちの二人は別格だわね」

視線を移した先にあるのはシャネルとクラピカの師弟コンビ、相手の動きを最小限の動きで回避してそのまま相手の急所に攻撃を加えている技術。今まで実践形式の修行を行って実力を高め続けてきたとビスケは直感した。

「一体だけ残ってたけど、カードから戻っちゃったね」

「システム説明の時に1分過ぎたらカードから戻るって言ったもんな、その通りか」

「だがモンスターには弱点があると言うのは安心だな、冷静に慎重に対処すれば倒せる」

「だな。よおし次行こうぜ！」

「おおっく!!!」

と子供二人が声を上げた次の瞬間、それは凍りついた。目の前に現れた巨大なトカゲに。大きさは日宇も巨人の半分にも見たいがそれでも十二分にデカイ。そして舌をチロチロ出しつつ此方へと迫ってきた。

「うわあああああ！！！！！！」

「お、おい逃げるのかよ！？」

「シャネル二人は私が！！」

「こっちは任せろ！！」

二人の元へと向かうクラピカとトカゲと真正面に向かいあう。トカゲはそのまま巨体を活かしてそのまま体当たりでもするかのように突撃してくるが、それに対して一旦後ろに下がりつつゴンと同じように拳にオーラを集中させる。

「鉄塊・砕硬！！！！」

迫ってくるトカゲの顎へオーラで強化された拳、それをインパクトの瞬間に身体を硬化化させて威力を倍増化させる。その一撃は流石のトカゲの体力を一気に削り目を回して引っ繰り返らせた、トカゲは目を回してカード化した。

「よし……って、そんだけ倒せるのか……？」

トカゲの説明にホクロを押しただけで気絶すると言う文章を見つけ、態々あんな技を使った事を後悔しつつバインダーに収める、これは敢えて弟子達には伏せて置く事にしよう。そしてクラピカが確保

してしてくれた二人の元へと向かう。

「確保完了。つつうかお前ら、俺一応師匠なんだから師匠置いて逃げんなよ……？」

「いやぁごめんごめん俺、ああいう感じの奴ちょっと苦手でさ。準備してないときつくて」

「俺は単純にびっくりして、ごめんねチャンネル」

「んじゃ罰として、マサドラに付くまで俺の許可が出るまで自分達でモンスターを倒す事」

それなら大丈夫！と大見得をゴンと望む所とやる気を出すキルア。そんな二人を見つつクラピカはそっとチャンネルに小声で聞く。

「いいのか？」

「ああ、モンスターを倒すには瞬時に判断する力と相手を観察して考察する力がある」

「それを鍛えるということか」

「そう言う事、お前も頑張ってモンスター倒せよ？」

「ああ勿論だ」

「クラピカ入手できたカードは？」

「マリモッチ2枚にリモコンラットが3枚だ。それ以外の奴にはまだ遭遇出来ていない」

「俺と似た感じだな、マリモッチが3枚だけだなクラピカとの違い」

岩石地帯にてモンスターカードの収集に入ったシャネル達、一旦二手に分かれて収集に入ったが中々新しいモンスターに遭遇出来ずに同じモンスターカードが重複してしまっている。正直新しいモンスターと戦ってみたいものだ。

「そういえばキラアとゴンは？」

「私は知らないな。二人はなにかと頑張っているようだが……」

「俺の円の射程外に居るみたいだな……あの二人だったら一応大丈夫だと思うけど……少し心配になってきたな」

「探してみよう」

基本的に共に行動しているシャネルとクラピカ、元々師弟と言う事も合っつかそれとも別の意味があるのか。但し二人を探すにあたって使用するのクラピカの能力、約55メートル程の円を持つシャネルだがそこから出られてしまっただけでは探すのには時間が掛かる。それにもしも二人が倒せないレベルのモンスターに遭遇し怪我をしていた場合も考えられるので急ぐ。導く薬指の鎖を出し二人の場所を探る。

「……解った、彼方の方向だ」

「解った、急ごうか」

円を念の為に広げたままでクラピカの案内で其方へと歩き出す、円を広げ続けるのは精神的にシンドい部分がある。常に自分が触れて確認出来るという感覚を広げている為である、歩を進める度にそれは増えて行ったり消えて行ったりする、それだけでも疲労は溜まっていく。

「見つけた、がもう一人誰がいるな」

「誰かって……ああビスケちゃんか」

発見した二人だがなにやらビスケに説教されているような感じであった、しかもその直後にキルアはぶん殴られてぶっ飛ばされていた。

「……おいおい如何いう状況だよゴン」

「あっシャネル！いやなんというか……」

「ってえ……ああシャネル！！おい俺たちはこのシャネルに念を教わってんだ！お前なんかお呼びじゃねえんだよ！！」

「いや、だから状況の説明を……」

いきなり自分を指さしてこいつ師匠だからお前の教えなんかいらないと言われても困ってしまう。まあ確かに師匠なのは間違いないが……まだ本格的な修行は一つもつけていないが。

「師匠つつつてもまだまともに修行付けた覚えねえけどな。本当の意味じゃ、本当の師匠は前任のウィングさんとやらじゃねえのか？」

シャネルがそういうとビスケはやや首を傾げた。

「ウイングって眼鏡をかけた寝癖坊や？ 幾ら言っても服の着方が直らない？」

「そなの？」

「うん正にウイングさんの癖とか見た目的中だよ、知ってるの！？」

「そりゃ知ってるわさ、私の教え子よウイングは」

自分の前任のウイング氏とやらの師匠、っという事はこの少女は一体幾つになるんだと思わず思考してしまう。しかし女性に年齢を聞くのは失礼にあたる行為、聞くのは火事場にガソリン被って突撃するようなもの。

「あんたらにしたら今の師匠の前の師匠の師匠、つまり大師匠って事になるんだから教わるのに不服はないでしょ？」

「なんか言葉にしたらややこしいな……てかあんでシャネルとクラピカには言わねえんだよ！？」

「だってこの二人は別格だもん、貴方達ってモンスターカード何枚集めた？」

「マリモッチ2枚にリモコンラットが3枚」

「マリモッチ3枚にリモコンラットが3枚、後はメラニントカゲだな」

ほらねと言いたげな視線を向けるビスケ。

「あんたらはマリモッチすらまともにゲット出来てない、指定ポケ

ットでもないランクDのカードをね。あんたらがゲット出来てないのが問題じゃなくてこのカードを簡単にゲットできる奴らがこの島にゴロゴロいるのが問題なのよ、そこんところ理解できる？ シャネルさんとクラピカさんだっけ。二人は大したもんよ、修行時は実戦形式が多かったんじゃない？」

その言葉に二人は迷う事無く肯定した。六式の修行も勿論、念能力を覚えた後も行ってきたのは実戦形式による修行が大多数を占めていた。理由としてはクラピカの目標が蜘蛛という実力者ばかりの盗賊を打倒するという物だからだ。その為には兎に角実力を付ける必要があった為実戦形式で総合的な戦闘力の向上をメインに据えていた。

「まあ、9月に合流って約束があったから応用技の修行がまだ不十分だけどな」

「しかし実戦で使うものはしっかり習ったが」

「あれはしっかりって言えない。まだみっちりやらないとキツイよ」

実戦で使う物と言われて真っ先に挙げられる応用技と言えば凝、硬、堅、流の4つ、クラピカにはこれを重点に叩き込んでいるがそれもまだ不十分。このグリードアイランドなら色んな修業が出来ると思いうろしうかと思った時、円に反応があった。

「……何かいるな」

「モンスター？」

「いや人だな……敵だな。いただきます、おうら！」

素早く合掌をして左腕にある岩山へと伸ばし念弾を飛ばす、飛ばす際に念弾を"隠"で見えにくくしたステルスフォークは岩山に炸裂すると一人の人間を遠くのほうへと吹き飛ばした。

「ふう……さてとビスケちゃん否ビスケさんと呼ぶべきかな？」

「堅苦しいのは苦手だからビスケでいいわよ、シャネルさん♪」

「いや急に猫撫で声にされても……あんた何者だ？俺の円に入ったのを気づいたのとはぼ同じ時、いや一步早く気づいてたよな」

「ふ〜んいうなれば直感と相手がほんの僅か、漏らした殺気。恐らく陰で見えたのが子供だけだったから漏れちゃったのね、直ぐに諷めてたけど」

凄いとしかシャネルは言い表せなかった、彼女は自分よりも高みに居る存在だと解る。

「ああこいつ念覚えて40年のババアなんだっドアアアア！！」

「4、40年！？」

「と、とてもそうには見えないが……まだ幼い少女にしか私の目には映らないぞ！？」

「まあ若さの秘訣とか色々あってねえ〜♪」

「ゴン、キルア。お前たち、この人に念を教わった方が良い」

真っ先に、そうした方が良いと直感出来た。キルアは驚きつつ声を荒げてどうしてと向かってくる。

「まず一つ、俺よりも彼女の方がレベルが高い事。念を覚えて40年って念能力者と俺とじゃレベルが違いすぎる。二つ、正直俺が師

匠としてあまり向いてないって事だな、それだったら彼女の方が良いだろうし」

素直に自分が劣っている点を語っているシャネルにビスケは感心した、自分が劣っている点や欠点を素直に認め肯定出来る人間は強くなれるからだ。認められない人間は意固地になって逆に欠点を大きくしてしまう場合が多い。

「じゃ、じゃあクラピカはどうするの？」

「クラピカには既に半年以上も修行付けてるから責任をもって最後まで教える。それが俺の責任だ、それにお前ら解ってんだろ。このままじゃいけないって」

「……うん、近くまで敵が来てたなんて解りもしなかった……」

「俺も……殺気にも全く気づけなかった」

「んじゃ決まりだね」

ビスケットⅡクルーガー。57歳、シャネルに代わってゴンとキルアの師となる。

クラピカヤンデレ編

——私にとってあの言葉ほど、甘美で心を溶かしたものはなかった。

「ここだシャネル」

「へえ、此処か」

——復讐という感情に囚われていた私が、その他の事に心を奪われた瞬間だった。

「何も変わっていないな、いや埃が積もってしまっているな」

「掃除すればいいじゃねえか」

——……嫌、私の心が奪われるのは必然だったのかもしれない。

「そうだな、手伝って貰うが良いか？」

「当たり前だ。お前だけにやらせるなんて野暮な事させねえよ」

——ああっ……私は本当に……。貴方が大好きだ。

「ふうやっと終わったあ……地味に疲れたぜ」

「お疲れ様、コーヒー要るか？」

「ああ貰うぜ」

積もりに積った埃を掃い、床を磨き窓を開けて掃除する事2時間。

漸く綺麗になった家の中を見て満足気な言葉を漏らしつつシャネルはリビングの椅子に座った、そんな師匠の手伝いの甲斐もあって完全に綺麗にする事が出来て嬉しく思うクラピカ。今二人がいるのはクラピカの親族が友人から譲り受けたと言う別荘の一軒家だった。既に使われていないと聞かされていない過去に聞いていた為、ハンター試験を受けるまでは此処に住みつつ身体を鍛えてらしい。

離れて大分経っていたがそれでも何処に何があるのかは完全に把握しているのかキッチンの戸棚からまだ賞味期限が切れていないコーヒーを発見しポットを火に掛ける。

「にしても……本当に良い家だな、俺も住むならこういうのが良いかな」

「そう言って貰えると私も自分の事のように嬉しいよ。ありがとう」

沸騰して来たポットの音を耳で聞きつつコップを取り出す。中には自分が子供の頃に使っていたのと同じような物まであり懐かしい思い出が思い起こされる。気づかぬうちに微笑みつつ、子供用のコップを撫でつつ二つのカップを出して粉を入れていく。

コーヒーが淹れられるのを待ちつつ家の中を物珍しげに見回す。良く考えてみればシャネルは此方の側の世界にやってきてから一般的な家庭が持つ家に入ったのは初めてかもしれない。ホテルや食事処などには入った事はあれど良く考えてみればなかった事だ、だが特に目立った所はない。流石に普通の住居はどの世界も共通で同じと言う事か。どんな事を考えていると小さな皿に乗せられたカップが自分の前に置かれた。

「そんなに見回しても変わった物はないと思うが？」

「いやさ、俺って考えてみたら一般家庭の家に來た事無いなあって思っつてつい色々見ちまったよ」

「それでご感想は？」

特に目を引く物は無かったので肩を竦めて見せるとクスクスと笑う彼に惹かれて自分も笑いつつコーヒーを口に付けた。

「ハンター試験前は此処で暮らしてたんだって？」

「ああ。何をするにも拠点と言う物があった方が良いと思って色々考えていたんだが、前に母に聞いた此処の事を思い出したんだ。本当に、懐かしいさ……」

ハッとした、悲しげな瞳を浮かべつつ彼は窓の向こう側の景色を見つめ続けているのを。それで気づいた、自分が如何に愚かな質問をしてしまったのか。母に聞いた、親族の家だったなどという事はクルタ族惨殺の事を思い出させ辛い事や感情を呼び起こさせる事だと仲間なのに、師匠なのにどうして苦しめるような事を言ってしまったのかと自分を殴りたくなった。クラピカは身体を反転させるとシヤネルが顔を伏せているのを見て察した。

「大丈夫だよシヤネル。私にはお前がいる、気になどしていなかったよ」

「でも、俺が辛い事を思い出させたのは事実だし……」

「だから気にしなくとも」

と言いかけた所である事を思いつき少々悪い顔になった、何処か子悪魔のような感じた。ゆっくりと足音を鳴らしながら近づきシャネルに顔を近づけた。

「本当に、悪いと思っているのか？」

「ああ思ってるよ」

「だったら」

そう顔を上げた時シャネルは思わず息をのんだ。クラピカが自分の膝の上に座りつつ背中の手を回して抱きついたのだから。腕を回し強く抱き締められると感じるクラピカの体温と男と思えない絶妙な柔らかさに不覚にもドキッとしてしまった。

「このまま、抱き締めてくれないか。父さんにこうしてもらったのを思い出してな」

「……………（ハッ！？）解った」

我に返りつつも抱き付いてくるクラピカを優しく抱き締める、身体を包まれていくのを感じつつ暖かな感触が広がって良くのが酷く快感だった。思わず蕩けそうになり眠りに落ちそうになるのを耐えつつ更に強くクラピカは抱き締める力を強めていった。

「こんな感じで、良いのか」

「ああ……………暖かい……………この感覚だ、もっと……………もっと……………」

「そっか」

喜んでくれているクラピカに自分も嬉しさを感じ始めているのを感じ

じた、だがこれが普段の嬉しさとは違う何かと感じた。親しい誰かの為に注いだ自分の何か、それを誰かが受け取りそれを喜んでいる事に対しての歓喜。そう、転生前の事など殆ど覚えていない今の彼だが解った。これは……

「（誰かへと向ける、愛情か……）」

クラピカに対する愛情、そう理解した。その認識が正しいなど如何でも良かった、それで彼が喜んでいるのだから……。愛情だと理解し、それが生み出す喜びによっていると何かが咀嚼されるような音が聞こえるような気がした。そして、クラピカはゆっくりと力を緩めて身体を少し離していた。

「シャネル、目を瞑って貰って良いか？」

「んっ目をか？」

「ああ、頼む」

「まあいっか」

何かをするのかと思ったが別に構うまいと思いつつそのまま瞳を閉じた、何も見えない時間が少しだけ経った時小さく「行くぞ……」というクラピカの声が聞こえたと思った次の瞬間、唇に暖かい感触がした。それが何なのかは解らないが不快な感じはしない、包みこむような暖かさ。一体何なのかと気になり、悪いと思いつつ瞼を開けてみた。

自分の目の前には自分の言葉通りに目を閉じている彼の姿、そんな

彼の無防備な姿に少々心が乱れてしまう。だが心を落ち着けつつ膨らんでいる胸に手を当てた。本来男にはない胸のふくらみを……。

「（よし、利いている……!）」

僅かにあった不安、もしもこんなときに利かなかったら如何しようと思いは吹き飛んだ。自分は今、女になっ……ている。何故そのような事になっているのか、それはシャネルに対する一途な愛が齎した行動。グリードアイランドというゲーム内で入手した『ホルモンクッキー』というアイテム、それを食べたのだ。これを食べると24時間という制限がある物の性別を変える事が可能になる、シャネルから身体を離れたのもこっそりと食べたホルモンクッキーによる性別変化を悟らせない為。

「行くぞ……」

何処か、心の何所かにあった恐怖心を拭い去る為に、呟いた決意の言葉。そして顔を近づけ、そしてシャネルの唇を奪った。

瞳を開けて一体何をしているのかを確認する、閉じてくれと頼まれた手前それに反する事をするのは悪いと思ったがそんな事など吹き飛んだ。目の前にあるのはクラピカの顔、自分と正反対に瞳を閉じていた。妖艶な魅力を発散させながら彼は唇を奪っていた。

「（えっえっ……?!ど、如何いう事だぁこりゃ……!?!）」

突然の事で彼の脳内は混乱で満ちていた。唇に触れる感触に僅かに漏れている官能的な声で脳内はパニックに陥っていた。

現状の確認だ！→つつうかクラピカは男だろう→んな事如何でも良いどうしてこんな事になってんだ！？→いやだから今俺どうなったんの？！→クラピカにキスされてって→だからそうじゃなくて！

というループに入ってしまった正常な思考など出来ていなかった。だがそれと反対にクラピカの行動は単純であった、もっと良くキスをしたいと首にてを回し身体を押し付けるように更に強く唇を押し付けた。それと同時にムニョンと身体に触れる柔らかな感覚が更にシヤネルをパニックの渦に引き込んだ。

「（えっえっムニョン！？これってあれ、胸のあれ……？いやいやいやいや何、クラピカって女だったの！？え、ええええっ！！？んじゃ俺今まで女だったクラピカをずっと男だと思いこんで……もっとねえよ！！雨でずぶ濡れになった時にクラピカの身体見たけど胸なんか無かったわ！！ちゃんとした男の胸板だったわ！！えっじゃあなってるの！？）」

「んちゅう、れるお……ちゅうう……」

パニックになり続けているシヤネルにキスし続けるクラピカはホンの僅かに開いた唇を挟み開けるように下を捻じ込んで自分の舌とシヤネルの舌を絡ませ続けていた。ぴちゃぴちゃと水音がリビングに響き渡りつつも快感に身を委ねて、もっと快感を感じる為に更に強く、深く絡ませるのであった。

「（って混乱してる場合じゃねえ！！？と、兎に角離れないと……ッ！？）」

身体をしっかりと抱きこんでいる腕を外そうと漸く思考出来た時クラピカと目が合った。底無しの闇のようだがどこまでも澄んでいるようにも見える緋色の瞳の色、その瞳が語っている。

ハナサナイ、ゼッタイニ。

怒りでもない、憎悪とも違う絶対的に違う感情の渦にシャネルは思わず恐怖を感じてしまった。振り解こうとするが、それは許されなかった。

「ッ！？（く、鎖、だとお！？）」

「（ダメ……ゼッタイニ……離さないから可愛い人♪）」

自分をクラピカを纏めて覆いそのまま巻き付くかのように拘束している鎖、それは紛れも無くクラピカが具現化した鎖。それによる脱出は出来なくなりシャネルはそのまま更に激しくなるキスを受け入れるしかなかった――。

「――んう、チュ……ぷはぁ！」

一体どれだけの時間、口内を犯され尽くされたのだろうか、感覚が麻痺し始めている。長い長い強制的なキスが終わり唇が解放され、シャネルはクラピカの表情を見た。頬を赤くし緋色の瞳はより美しくも狂気的な光を宿し、口から垂れていた涎を指でなぞりそれを舐

める姿は今まで見てきた何よりも妖艶だった。それに見惚れる、否、寒気と恐怖を感じ思わず声を出した。

「い、一体何を……!!?」

自分の気持ちを伝える簡潔で適切な言葉だった。答えるクラピカは何所か悲しげだが嬉しげな笑みを浮かべた。

「もう、解っているんだろうシャネル。私の愛する人……」

「ああああ愛するう!!? ななな何言ってるんだ!? 俺とお前は男同士で……!!?」

それを聞いた時、彼いや彼女は歓喜とも言えるような表情を浮かべていた。自分は正しかったとでも言いたげに、それを見つめる者からすれば狂気としか映らないがそんな事如何でも良いのかもしれない。クラピカはシャネルの手を大きくなっている胸へと当てさせた。

「解るだろう、今の私は女なんだと……?」

「はああああ!!? で、ででも、どどっとうして!??」

「ホルモンクッキーさ、それを食べたんだ……男同士では駄目だときっとシャネルなら言うと思ったから、これなら、大丈夫だろう……?」

その言葉がシャネルにとって酷く恐ろしかった、自分の従順だがそれでいて理性的で相手の事を考えているのだから。自分が同性だからとキスを拒むのは予想の範疇内だったのだろう、それが当たったのが嬉しいのだと。

「さあ……シャネル、私を……女となった私を……抱いてくれ」

鎖を消した、女ならば自分を拒む理由が無いと思ったのだろう。ゆっくりと服を脱いでいくクラピカ、娼婦のようにも見えるその行為。シャツ一枚になった時膨らんでいる胸部を見た時、シャネルは言い表せ無い感情の襲われ思わず彼女となったクラピカを押しつけて壁に逃げるようによりかかった。

「はぁはぁはぁはぁ……如何し、たんだよクラピカァ！？お前、可笑しいぞ！？男同士、否今は女だけどそうじゃねえ！？ああもうなんて言ったらいいんだよ！？」

問題はある意味ではなかった、だがある一点で問題があった。クラピカは絶対に自分を受け入れてくれると信じていたがシャネルにはそれが出来なかった。いきなりすぎる、目まぐるしく起こっていく出来事を受け入れきれなかった。待ってくれと大声で叫び言葉を聞いたクラピカは瞳から光沢が消えて焦点が合わずに虚ろ目になってしまう。

「何で……？どうして嫌がるんだ……？」

「ど、どうしてって……」

簡単には答えられない、正解といえる言葉が見つからない。今は、気持ちを落ち着けて冷静になるようにしなければと必死に気持ちを落ち着けているシャネルだが急に笑い始めたクラピカに顔を上げた。

「そうか……照れているんだな？」

「はぁっ………！？何を、言ってるんだ………よ！？」

「良いんだよ、シャネル全て解っているよ………だから、照れなくても良いんだよ………？」

答え

到った正解が正しいとは限らない。到ったのは愛しの彼がいきなりすぎる告白で照れているから、自分の事を受け入れてくれる筈の気持ちちが混乱して正しく言い表せないからだ。だったらどうしよう、落ち着くまで待つ？いや、

——『自分が導いてやれば良いんだ』——。

シャネルへと伸ばされた手、同時に伸びた鎖がシャネルの胸をつき刺した。そして心臓へと巻きついていく、混乱しきったシャネルは避ける事など出来なかった。心臓へと刺さった鎖、それはクラピカの念能力であろう手首から伸びている鎖だった。

「お前………何をっ………！？」

これから来るであろう展開を予想してしまったが、何所か違うと望むように声を出した。彼女は首を少し傾けてから満面の笑みで言った。

「照れているチャンネルが正直になれるように制約ルールを作るんだ」

「せい、やく……?」

「ああ。1・私の言葉に従う事、2・私の許可無しにこの家から出ない事、3・私が許可しない以外は私の半径2メートルに居る事、4・一日一回、私が指定する場所にキスをする事、5・私と、ここで生活する事……♪」

完全な束縛、5つの制約。そしてこれは小指の鎖、律ジャッジメントする小指の鎖では無い事。新たな能力。

「もしも破ったら……どうなるってんだ、俺が、死ぬのか……?」

「そんな訳無いさ、愛するチャンネルを殺すなんてありえない。約束を破ったら――」

私が死ぬんだ――」

「なっ!?!?!?」

手首の鎖はクラピカの胸を突き刺されそのまま心臓へと達した後抜かれ消えて行った。

「（なんて、こった……!?!?!）」

相手の命ではなく自分の命が消えるように設定された鎖、それはチャンネルが絶対に約束を守るからと信用し自分を殺すなんて事を絶対にしないと理性的に判断していると言う事を示唆している。狂気の光を宿しているのにも拘らず、なんて冷静な事をとチャンネルを戦慄させた。

ふざけた制約だ、ふざけた束縛だ今すぐにも抜け出てやりたい……！！だが、自分が破ればクラピカは死に至ってしまう……こんな事をされているのに死なせたくない、絶対に約束を破らないと思う自分が居た……。完全にクラピカの術中に嵌っている……完全な詰み、チェックメイトを示されていた。

「クラピカ……ごめん……」

「良いんだよ、許そう。だからさあ、私の唇にキスをして、二階にあるベツトで私を抱いてくれ……」

逆らえない。自分にこんな事を強要しているのに……無理矢理自分を愛せと言っているのに……逆らえない……。彼女の唇にキスをして、彼女を抱きかかえて二階へと向かう、もう、戻れない……。ああ、自分は、クラピカを愛する道しか残されていない……。

そして静かな森の中にある家から響く嬌声、それは幸せに満ちた声。それはこれからずっと聞こえるだろう、彼らの命がある限り、ずっと……。

——私にとってあの言葉ほど、甘美で心を溶かしたものはなかった。

「ここだシャネル」

「へえ、此処か」

——復讐という感情に囚われていた私が、その他の事に心を奪われた瞬間だった。

「何も変わっていないな、いや埃が積もってしまっているな」

「掃除すればいいじゃねえか」

——……嫌、私の心が奪われるのは必然だったのかもしれない。

「そうだな、手伝って貰うが良いか？」

「当たり前だ。お前だけにやらせるなんて野暮な事させねえよ」

——ああっ……私は本当に……。貴方が大好きだ。

「ふうやっと終わったあ……地味に疲れたぜ」

「お疲れ様、コーヒー要るか？」

「ああ貰うぜ」

積もりに積った埃を掃い、床を磨き窓を開けて掃除する事2時間。

漸く綺麗になった家の中を見て満足気な言葉を漏らしつつシャネルはリビングの椅子に座った、そんな師匠の手伝いの甲斐もあって完全に綺麗にする事が出来て嬉しく思うクラピカ。今二人がいるのはクラピカの親族が友人から譲り受けたと言う別荘の一軒家だった。既に使われていないと聞かされていない過去に聞いていた為、ハンター試験を受けるまでは此処に住みつつ身体を鍛えてらしい。

離れて大分経っていたがそれでも何処に何があるのかは完全に把握しているのかキッチンの戸棚からまだ賞味期限が切れていないコーヒーを発見しポットを火に掛ける。

「にしても……本当に良い家だな、俺も住むならこういうのが良いかな」

「そう言って貰えると私も自分の事のように嬉しいよ。ありがとう」

沸騰して来たポットの音を耳で聞きつつコップを取り出す。中には自分が子供の頃に使っていたのと同じような物まであり懐かしい思い出が思い起こされる。気づかぬうちに微笑みつつ、子供用のコップを撫でつつ二つのカップを出して粉を入れていく。

コーヒーが淹れられるのを待ちつつ家の中を物珍しげに見回す。良く考えてみればシャネルは此方の側の世界にやってきてから一般的な家庭が持つ家に入ったのは初めてかもしれない。ホテルや食事処などには入った事はあれど良く考えてみればなかった事だ、だが特に目立った所はない。流石に普通の住居はどの世界も共通で同じと言う事か。どんな事を考えていると小さな皿に乗せられたカップが自分の前に置かれた。

「そんなに見回しても変わった物はないと思うが？」

「いやさ、俺って考えてみたら一般家庭の家に來た事無いなあって思っつてつい色々見ちまったよ」

「それでご感想は？」

特に目を引く物は無かったので肩を竦めて見せるとクスクスと笑う彼に惹かれて自分も笑いつつコーヒーを口に付けた。

「ハンター試験前は此処で暮らしてたんだって？」

「ああ。何をするにも拠点と言う物があった方が良いと思って色々考えていたんだが、前に母に聞いた此処の事を思い出したんだ。本当に、懐かしいさ……」

ハッとした、悲しげな瞳を浮かべつつ彼は窓の向こう側の景色を見つめ続けているのを。それで気づいた、自分が如何に愚かな質問をしてしまったのか。母に聞いた、親族の家だったなどという事はクルタ族惨殺の事を思い出させ辛い事や感情を呼び起こさせる事だと仲間なのに、師匠なのにどうして苦しめるような事を言ってしまったのかと自分を殴りたくなった。クラピカは身体を反転させるとシヤネルが顔を伏せているのを見て察した。

「大丈夫だよシヤネル。私にはお前がいる、気になどしていなかったよ」

「でも、俺が辛い事を思い出させたのは事実だし……」

「だから気にしなくとも」

と言いかけた所である事を思いつき少々悪い顔になった、何処か子悪魔のような感じた。ゆっくりと足音を鳴らしながら近づきシャネルに顔を近づけた。

「本当に、悪いと思っているのか？」

「ああ思ってるよ」

「だったら」

そう顔を上げた時シャネルは思わず息をのんだ。クラピカが自分の膝の上に座りつつ背中の手を回して抱きついたのだから。腕を回し強く抱き締められると感じるクラピカの体温と男と思えない絶妙な柔らかさに不覚にもドキッとしてしまった。

「このまま、抱き締めてくれないか。父さんにこうしてもらったのを思い出してな」

「……………（ハッ！？）解った」

我に返りつつも抱き付いてくるクラピカを優しく抱き締める、身体を包まれていくのを感じつつ暖かな感触が広がって良くのが酷く快感だった。思わず蕩けそうになり眠りに落ちそうになるのを耐えつつ更に強くクラピカは抱き締める力を強めていった。

「こんな感じで、良いのか」

「ああ……………暖かい……………この感覚だ、もっと……………もっと……………」

「そっか」

喜んでくれているクラピカに自分も嬉しさを感じ始めているのを感じ

じた、だがこれが普段の嬉しさとは違う何かと感じた。親しい誰かの為に注いだ自分の何か、それを誰かが受け取りそれを喜んでいる事に対しての歓喜。そう、転生前の事など殆ど覚えていない今の彼だが解った。これは……

「（誰かへと向ける、愛情か……）」

クラピカに対する愛情、そう理解した。その認識が正しいなど如何でも良かった、それで彼が喜んでいるのだから……。愛情だと理解し、それが生み出す喜びによっていると何かが咀嚼されるような音が聞こえるような気がした。そして、クラピカはゆっくりと力を緩めて身体を少し離していた。

「シャネル、目を瞑って貰って良いか？」

「んっ目をか？」

「ああ、頼む」

「まあいっか」

何かをするのかと思ったが別に構うまいと思いつつそのまま瞳を閉じた、何も見えない時間が少しだけ経った時小さく「行くぞ……」というクラピカの声が聞こえたと思った次の瞬間、唇に暖かい感触がした。それが何なのかは解らないが不快な感じはしない、包みこむような暖かさ。一体何なのかと気になり、悪いと思いつつ瞼を開けてみた。

自分の目の前には自分の言葉通りに目を閉じている彼の姿、そんな

彼の無防備な姿に少々心が乱れてしまう。だが心を落ち着けつつ膨らんでいる胸に手を当てた。本来男にはない胸のふくらみを……。

「（よし、利いている……！）」

僅かにあった不安、もしもこんなときに利かなかったら如何しようと思いは吹き飛んだ。自分は今、女になっ……ている。何故そのような事になっているのか、それはシャネルに対する一途な愛が齎した行動。グリードアイランドというゲーム内で入手した『ホルモンクッキー』というアイテム、それを食べたのだ。これを食べると24時間という制限がある物の性別を変える事が可能になる、シャネルから身体を離れたのもこっそりと食べたホルモンクッキーによる性別変化を悟らせない為。

「行くぞ……」

何処か、心の何所かにあった恐怖心を拭い去る為に、呟いた決意の言葉。そして顔を近づけ、そしてシャネルの唇を奪った。

瞳を開けて一体何をしているのかを確認する、閉じてくれと頼まれた手前それに反する事をするのは悪いと思ったがそんな事など吹き飛んだ。目の前にあるのはクラピカの顔、自分と正反対に瞳を閉じていた。妖艶な魅力を発散させながら彼は唇を奪っていた。

「（えっえっ……?!ど、如何いう事だぁこりゃ……!?)」

突然の事で彼の脳内は混乱で満ちていた。唇に触れる感触に僅かに漏れている官能的な声で脳内はパニックに陥っていた。

現状の確認だ！→つつうかクラピカは男だろう→んな事如何でも良いどうしてこんな事になってんだ！？→いやだから今俺どうなったんの？！→クラピカにキスされてって→だからそうじゃなくて！

というループに入ってしまった正常な思考など出来ていなかった。だがそれと反対にクラピカの行動は単純であった、もっと良くキスをしたいと首にてを回し身体を押し付けるように更に強く唇を押し付けた。それと同時にムニョンと身体に触れる柔らかな感覚が更にシヤネルをパニックの渦に引き込んだ。

「（えっえっムニョン！？これってあれ、胸のあれ……？いやいやいやいや何、クラピカって女だったの！？え、ええええっ！！？んじゃ俺今まで女だったクラピカをずっと男だと思いこんで……もっとねえよ！！雨でずぶ濡れになった時にクラピカの身体見たけど胸なんか無かったわ！！ちゃんとした男の胸板だったわ！！えっじゃあなってるの！？）」

「んちゅう、れるお……ちゅうう……」

パニックになり続けているシヤネルにキスし続けるクラピカはホンの僅かに開いた唇を挟み開けるように下を捻じ込んで自分の舌とシヤネルの舌を絡ませ続けていた。ぴちゃぴちゃと水音がリビングに響き渡りつつも快感に身を委ねて、もっと快感を感じる為に更に強く、深く絡ませるのであった。

「（って混乱してる場合じゃねえ！！？と、兎に角離れないと……ッ！？）」

身体をしっかりと抱きこんでいる腕を外そうと漸く思考出来た時クラピカと目が合った。底無しの闇のようだがどこまでも澄んでいるようにも見える緋色の瞳の色、その瞳が語っている。

ハナサナイ、ゼッタイニ。

怒りでもない、憎悪とも違う絶対的に違う感情の渦にシャネルは思わず恐怖を感じてしまった。振り解こうとするが、それは許されなかった。

「ッ！？（く、鎖、だとお！？）」

「（ダメ……ゼッタイニ……離さないから可愛い人♪）」

自分をクラピカを纏めて覆いそのまま巻き付くかのように拘束している鎖、それは紛れも無くクラピカが具現化した鎖。それによる脱出は出来なくなりシャネルはそのまま更に激しくなるキスを受け入れるしかなかった――。

「――んう、チュ……ぷはぁ！」

一体どれだけの時間、口内を犯され尽くされたのだろうか、感覚が麻痺し始めている。長い長い強制的なキスが終わり唇が解放され、シャネルはクラピカの表情を見た。頬を赤くし緋色の瞳はより美し

くも狂氣的な光を宿し、口から垂れていた涎を指でなぞりそれを舐める姿は今まで見てきた何よりも妖艷だった。それに見惚れる、否、寒気と恐怖を感じ思わず声を出した。

「い、一体何を……!!?」

「(わ、私は何をしてるんだ……!!?)」

自分の気持ちを伝える簡潔で適切な言葉だった。答えるクラピカは何所か悲しげだが嬉しげな笑みを浮かべた。

「もう、解っているんだろうシャネル。私の愛する人……」

「ああああ愛するう!?!? ななな何言ってるんだ!?! 俺とお前は男同士で……!?!」

「(ち、違うこんな無理矢理なんて駄目だ……!!!)」

それを聞いた時、彼いや彼女は歓喜とも言えるような表情を浮かべていた。自分は正しかったとでも言いたげに、それを見つめる者からすれば狂気としか映らないがそんな事如何でも良いのかもしれない。クラピカはシャネルの手を大きく広げている胸へと当てさせた。

「解るだろう、今の私は女なんだと……? (な、なんて破廉恥な事を……!!?)」

「はああああ!!?!? で、ででも、どどっとうして!?!」

「ホルモンクッキーさ、それを食べたんだ……男同士では駄目だときっとシャネルなら言うと思ったから、これなら、大丈夫だろう……? (だ、駄目だ私はこんな事を望んでない……!!!)」

その言葉がシャネルにとって酷く恐ろしかった、自分の従順だがそれでいて理性的で相手の事を考えているのだから。自分が同性だからとキスを拒むのは予想の範疇内だったのだろう、それが当たったのが嬉しいのだと。

「さあ……シャネル、私を……女となった私を……抱いてくれ」

鎖を消した、女ならば自分を拒む理由が無いと思ったのだろう。ゆっくりと服を脱いでいくクラピカ、娼婦のようにも見えるその行為。シャツ一枚になった時膨らんでいる胸部を見た時、シャネルは言い表せ無い感情の襲われる、その感情に駆られ彼女とを突き飛ばそうとした時に見た。クラピカの瞳の奥にある一欠片ほど理性の光を。狂気に塗れてはいるが理性的判断を出来ている、ならまだ落ち着かせる事は出来る。

「如何したんだ……？さあ、私を……滅茶苦茶に犯してくれ……」

耳そばでそっと囁かれる言葉は淫靡な響きでこちらの心を揺さ振ってくる。劣情が沸き立たせてそれに実を委ねさせたいと強く思ってしまうほどに……だが一度でもしっかりと心を持ち直した自分は揺るがない、意識さえ保てればもう大丈夫だ。だが問題はどうかやって落ち着かせるか、ここまでなっているクラピカを落ち着かせる手……

「勘弁してくれよ？」

「何をdむう！！？（シャ、シャネルウ！？）」

「むちゅうちゅ、……っ、んっ……」

迫ってくる彼女を身体を抱き寄せつつ掌を合わせてそのまま唇を奪い返した。先程の激しいキスに比べれば唯唇を合わせているだけの優しいキス、だが相手からそれをされているという事実が激しくクラピカの中にある心と理性を揺さ振った。

「（えっえええっわ私は今キスされているのか！？シャ、シャネルにキスをされるのかぁ！？だ、だがどうして！？何故こうなっているんだぁ！？）むうううう！！んんんっ！！！！」

「チュ……」

唇を離すと顔を真っ赤にさせながらワナワナと震えているクラピカの顔があった、瞳の色も何時も色へと戻っている。自分からキスをしてクラピカの中にあるだろう僅かな理性を揺り起こすという賭けはどうやら正解だったようだ。

「なななななっなああっ……！！！？？」

「落ち着いたか？」

「おおおおお落ち着いたかだなんて落ち着ける訳が……！！！」

真っ赤に、顔から火でも出そうな勢いで赤くなっている顔、落ち着いているかと問われれば当然その逆だろう。確かに自分から彼を襲っていたが逆に、キスをされた事でハッキリとした理性と言う意味では落ち着いている。それに気づくとクラピカは段々と顔色を悪くするように俯いて行く。

「……して」

「？」

「離、してくれ……！！！」

今自分は抱き締められている、そんな状況から逃げ出したかった。自分は師匠で敬愛し尊敬する存在を性的に襲った、そして無理矢理彼の唇を奪い鎖で縛り、純潔まで奪おうとした。決して許される訳が無い、許して良い筈の行為ではない。だからせめて今日の前でこちらを見ているシャネルから少しでも遠ざかりたかった。だが幾ら身体を動かして彼は自分の身体を全く離してくれない、寧ろ逃さないと更に抱き締める力を強めていく。

「頼む、離してくれっ！！！！お願いだ……！！！」

「嫌だな。冷静に、訳は話してくれるまで絶対に離さない」

「頼む……！！！！私は、もう……貴方の傍に居る資格なんて無い！！！！」

何所まで自分を卑下し見下し嫌っているのは解る、当然だ。自分の師にあんな事をしたら、だが理由も話さずに解放する訳には行かない。それにここで離れたら自殺でもしかねない、それは絶対にさせない。抱き締め続ける事10分、漸く大人しくなったクラピカは静かに謝り始めていた。

「落ち着いたか？」

「ああ……本当、に、本当にごめんなさい……」

「よしよし……大丈夫だ大丈夫。だから理由を話してくれないか？」

あんな事をしたのにも拘らず師匠シャネルの言葉は優しく、優しく頭を撫でてくれた。子供をあやす様に、甘く暖かく……。

「貴方を好きになったのは、ハンター試験の時に私の行き方を肯定してくれたから……」

——だけどな自分だけは否定しちゃいけねえ、自分を信じ続けるクラピカ。お前を信じる俺を信じろ、そうすればお前はお前でいられる——

「復讐と報復ばかり考えていた私を、支えてくれるなんて優しい言葉は初めてだった……。ドロドロで醜かった私の心を融かして、暖かい気持ちを思い出させてくれた……」

「そうだったのか……」

ポツポツと漏らした言葉、クラピカの心の奥に秘められていた本心。

「私に修行を付けてくれた時も、上手く行かない時もずっと付き合ってくれた……。気づけば、私は貴方に夢中になって、恋をしていた。可笑しいな、男が男を好きになるなんて……」

だがそれほどに自分の目にはシャネルが魅力的に見えてしまった、赤黒い感情が渦巻き続けていた自分の心を魅了してしまった明るく強く、一緒に居てくれる存在に。

「そっか……」

「何時までも一緒に居てくれる、それだけ私は満足出来ていた……。だがグリードアイランドで出会ったビスケ、彼女がシャネルに向けていた思いで私は、不安でいっぱいだった……!!」

グリードアイランドで出会ったプロハンターのビスケットIIクルーガー。明らかにシャネルに好意を持ち度々アタックを仕掛けていたのを何度も目撃していた、時には腕を組んだり好みの女性を聞きだしたり時には頬にキスマでしていた。あれを見る度に精神は荒れまくり、狂いそうになった。

「貴方を奪われるのではないかと、もう私の傍に立ってくれないんじゃないかと……嫌だ、そんな事は嫌だ……!! 貴方にずっとそばに居て欲しい、貴方に愛されたい!! 貴方の、一番でありたい……!! ！そう、思っていたんです……」

吐き出されていくクラピカの本心と本音。此処まで自分の事を思ってくれたなんて思いもなかった、そしてそこまで苦しんでいたなんて気づく事も出来なかった自分が恨めしく思った。泣き出してしまったクラピカ、そっと名を呼んだ。

「はい……」

「俺の為にそこまで悩んでくれたのか……そんな苦しんでいたのか……すまない……態々ホルモンクッキーまで手に入れて……」

「シャネル……」

「なあクラピカ、俺と一緒に暮らしてくれないか？」

その言葉はクラピカにとって驚きに満ち満ちていたものだった、あれだけの事をしてそんな事を何故言えるのかと素直に疑問に思った。

「正直俺の事を此処まで思ってくれる人なんてその、初めてだった

し……その、俺もお前の事結構好きだし……修行中も割と何度か不覚にもお前にドキっとした事あったし……」

「そ、そうなのか……？で、でも私は……」

「クラピカ。俺の命は既にお前に預けてる、だったらお前の命、俺に出来ないか？」

そう、ハッキリ言った。お前が欲しいと、クラピカに訪れるは喜びの嵐だった。もうこれ以上の喜びなどあるのかと思えるほどの……。

「ああ……貴方に、私の命を……不束者ですが宜しく願いします」
「ああ、俺も宜しく……」

互いの身体を強く抱き締めあう、互いに対する思いが一つになってから初めての抱擁は酷く暖かいものだった……。

「あっクラピカ、今身体女じゃん。ぶっちゃけもう俺の自制心限界に近いんですが」

「奇遇だな私もだ……ってま、まさか……！？」

「する？」

「……ッッ！！！？や、優しくお願いします……」

025話

「そう言えばさ、ちょっと思ったんだけどさシャネル」

「にゃんふあらふおん（なんじゃらはい）」

岩場の荒野にて修行をしているシャネル一同。新たな師匠ことビスケ指導の元、修行をしているゴンとキルアと今まで錬度を高められなかった修行をしているシャネルとクラピカ。今現在やっているメニューは基本的一度マサドラにて購入したスコップやトロッコなどを使って一直線にまたマサドラへと向かう。が真っ直ぐなので途中ある岩山は道具で掘っていくと言う物。それに加え、クラピカ対ゴン&キルアで実戦形式の模擬戦を行っている。そんな修行の合間の食事中の一時の事であった。

「……口にあるもん飲み込んでから喋れよ」

「（モグモグモグモグ……）プハア、悪い」

「ああシャネル、口元にソースが……これで良いぞ」

「悪いクラピカ。んでなによ」

「シャネルの能力って放出系で、念弾を操作するんだよな。あれってどの位ホーミング出来んの？」

戦闘食事のナイフ&フォーク、自分の腕をナイフとフォークに見立てた形してそこから念弾を放ち時にはそれを操作して攻撃すると言う物。戦術的にかかなりの幅を生み出す能力だがキルアはそれが一体何所まで適応されるのが気になった。

「最高で20メートルぐらいまでの距離までしかホーミングは無理だな、ぶっちゃけ俺は操作系の能力は苦手なんだ」

「あれっでも前念弾で器用に岩とか切ってたよね？」

「あれは腕の動きに連動させるってプログラムを前もって仕込んでたのさ」

仕込むっという意味が良くわからないのか首をかしげる少年二人と納得しているクラピカ。ビスケはやっぱりそういう形式よねえと言葉を漏らしている。

「俺の念弾を細かく沸けると幾つかの種類があってな。まず一つは腕の動きに連動して動く物、これは近距離でのリーチを伸ばす為。次に単純に真っ直ぐ飛ぶ念弾、最後にホーミングする念弾だ。まあ正確にはホーミングして無いんだけどな」

「如何いう事だよそれ」

「あれはホーミングさせてるんじゃないくて俺が相手の動きを先読みして、相手が避ける方そっちの方向に動く念弾を撃っているだけな訳」

念能力は細やかに能力設定して行けば行く程に念の容量を食らっていく。複雑な能力にしていけば行く程に容量を消費していく為出来る事ならば能力はシンプルな物が好ましい。シンプルで応用が利く物であれば態々容量を消費せずとも技を繰り出す事が出来るからだ。

そしてチャネルも容量を節約する為に前もって決まった動作しかないような能力設定を行っている。一旦動作のプログラムを組んでしまえば、本来自分が苦手な系統能力を使うために多く使ってしまう容量を少なくする事が出来る。

「まあ欠点があると言えばあるけどな。既に動作が決まっちゃってるから予想外な場で対応出来ないんだ、だから俺の奴は俺が相手の動きを読み違えばホーミングじゃなくなるって訳だ」

「へえっく念って奥が深いんだね」

「そりゃそうよ。念なんて個人によって大きく変わって行く物、それこそ能力なんてと億と言っても過言じゃないぐらいあるんだから」

改めて自分の能力はしっかり決めなくてはいけないと思うゴン、良く考えて見れば自分が助言で習得した技は念の応用技である"硬"であった。それでも強化系としては十分な必殺技と言えるらしいが、どうにももう少し違った個性が欲しいらしい。

「さてとお……飯も食ったし俺も自分の修行をちょっとしようかな？」

「あれシャネルもするの？」

「否そりゃするよ、確かに俺はお前らより数年早く念能力使ってるけどそれでも数年の差しか無いんだぞ？」

それでも数年の差はあると思うてしまうキルア。

「そう言えば以前からやって見たい能力があると言っていたな、どんな能力なんだ？」

「あ……エネルギーの具現化的な奴」

「はあっ？なんだよそれ、どういうことだ？」

エネルギーの具現化、それは詰まる所具現化系の能力という物に当たらないかと思わず思ってしまった。

「実は昔修行してる時、すっげえ腹減って死に掛けた事あったんだ。簡単にカロリーを制約した事を後悔したなうん」

「まあそりゃそうだわさ。普通カロリーを制約にするなんて方が少数派よ、かなり自分のエネルギーを一気に削るような物だし下手したら直ぐに戦闘不能になるわ」

「ああ。んでその時ああもう死んだと思ったら、目の前に化け物出てきてさ」

「「「化け物？」」」

転生したばかりの事、目覚めた念能力の設定を決め制約を決めた配意がその制約、カロリーの消費で死に掛けていた時目の前に出現した化け物。それは自分と同じぐらいの体格をし黒が掛かった紫の体色をした鬼のような怪物。何処か自分にも似ているそれは、死にかけている自分を狩りに来た死神のようにも見えたそれはぶっきらぼうに言った。

——タイムリミットは3分だ。

タイム、リミット……？一体何を言っているのかと思った、何の事なのかさっぱり検討が付かない。そして次の瞬間には自分の身体に力が漲っていた、先程まで空腹死にかけていた身体に活力が溢れ返っていた。

一体何が起きているのかと思った、だが次の瞬間目を疑った。目の前の化け物は今にも死に絶えそうなもう一人の自分の肉を抉り喰らっていた。

——さっさと何を食え。そうじゃねえとお前死ぬぞ。

そう言われたかと思ったら化け物は消え失せていた、死に掛けていた自分が見た幻覚かと思ったが身体に漲る力は本物だった。その後山のような巨大な猛獣を3匹を平らげて死を回避した。

「——あれは俺の中にある食欲のエネルギー、何じゃないかなあ
って思ってた。だからそれが俺自身を食ってエネルギーを生産した
んじゃないかと思って」

「化け物……んな事あんのか？」

「それは唯の幻覚のような気もするが、自分が自分を喰らうという
のは聞いた事があるな」

「えっあるの!？」

「あるわよ、それはきっと自食作用よ」
オートファジー

自食作用。栄養飢餓に陥った生物が行う活動、自らのたんぱく質を細胞がアミノ酸に分解し一時的にエネルギーとする仕組み。栄養が無くなり、生命の危機を脱する為に行われる最終手段。自らの身体を喰らって飢餓を回避する物、それはある意味飢えに飢えた結果自分を喰らった食欲とも言えなくは無い。

「多分だけど制約で結果的に産まれた凄い食欲がそういうイメージ
に見えたんじゃないかしら。生きるために他の命を喰らい尽くすこ
とも厭わないって気持ちの表れみたいに」

「それを具現化しようと言うかシャネル……?危険じゃないか？」

「なんか話だけ聞いてたら自分まで食っちまいそんな能力になりそ

うだな」

無論そうなってしまふ可能性も高い、だから決まった事しか出来ないようにするつもりではある。まだ細かくは決めていないが……。

「まあそのうち決めて作るさ。今は……」

「今は？」

「食欲を高めるイメージ修行！」

「それ修行か！？」

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
http://www.akatsuki-novels.com/stories/index/novel_id~18107

HUNTER×HUNTER 六つの食作法
2016年11月12日 01時46分発行